

紀元年	號	兼好の年齢	文段
一九七八	文保二年	三六	「洞院左大臣殿云々」(百一段)以後
一九七九	元應元年	三七	「元應の清養堂の御遊」(六九段)以後
一九八四	正中元年	四二	(出家)
一九八六	嘉暦元年	四四	「吉田中納言云々」(百七十六段)以後
一九九〇	元徳二年	四八	「惟繼中納言は云々」(八十五段)以後
二〇〇六	正平元年	六四	(在京)
二〇一〇	觀應元年	六八	(死)

### 2 作者

兼好法師 ケンカウ ホフシ。

(1) 略歴

(藤岡博士の考證)

(國太曆による)

正中元年(42)  
後宇多法皇の崩御によつて出家  
貞和二年(64)  
貞和四年(66)  
京都にあり

延慶二年(27) 二月八日 院の御せにより神詠部類を編む。  
三年(28) 六月十四日 萩戸の隅に化鳥を射る。  
康永二年(61) 七月廿七日 雙岡に塔婆を立てて親戚故友の跡を弔ひ、櫻を植えてうゑおきし花とならびの岡のべにあはれ幾世の春をすぐさむ。  
貞和四年(66) 八月廿八日 南帝の召によりその御痘瘡加持にゆく。  
貞和四年(66) 二月二日 新古今集を講じ、殿上廿餘人聽聞す。  
五年(67) 正月廿四日 横川に上り法華經を寫す。

本姓は卜部氏。名は兼好。山城吉田神社の祠官卜部兼顯の第三子。吉田に居つたので、吉田を姓とした。後宇多上皇に仕へて左兵衛尉となつたが、上皇の崩後剃髮して(吉野拾遺による)俗名のみ、兼好と稱し、風月を友として、諸國を歴遊した。(家集の詞書による)後、信州木曾に庵を構へた(吉野拾遺による)こともあつたが、又京都に還り、専ら和歌を詠じて娛んだ。當時兼好は頼阿・淨辨・慶運と共に和歌の四天王と稱へられた。寂滅の地を洛西雙が岡に卜し、櫻樹を栽ふ、  
「契りおく花とならびの岡のべにあはれ幾代の春をすぐさむ」と詠んだ。晩年構成忠に招かれて伊賀に赴き、國見山の麓なる密集院に住して、正平五年(二〇一〇)そこに入寂した。年六十八。  
(2) 年譜

顯基中納言記をつくる。

宇都宮公綱・薬師寺公義の訪問を受けしが、寂然として答へず。

頼阿と共に伊勢國阿野明神に詣で、七日の通夜のすまびに「寢堂の友(草子)を撰す。

病氣。光嚴法皇より典薬頭和氣清元をつかはさる。辭して藥をのみず。即ち米三十石を賜ふ。

寂。(一説二月十八日・四月八日)

二月十五日 右註進。

二月十八日 權僧都を諡賜せらる。

二月廿七日 二條良基は兼好の撰べる「往生傳」「寂光淨土錄」「徒然草」の寫本を將軍に上る。

### 3 編纂の用意

四時の推移及びその各季節に於ける行事のおもなるものについてものした兼好法師の趣味ふかき文を讀ましめて感興を催さしむると同時に、その讀解力を養ひ、兼ねて隨筆文學の眞諦を味ははしめたい。

### 4 要旨

四季自然の風物の特色を捉へ、それ／＼そのもの持つ趣味を描き出したところ、殊にそのうつりかはりのあはれ

れを敘したところに、この文の最も深い興味がある。又、人事の傳統的趣味を、以上の自然の風情にまづはらせて寫して行つたところに、更にいひがたい筆致の妙味があることを感得せしめたい。

### 5 取扱上の注意

卷五の「仁和寺の法師」や卷六で讀んだ「懈怠心」などは教訓や諷刺や暗示を盛つたもので、修養的教材として取扱はるべきものであるが、本課は全然趣味的教材であ

る。徒然草が趣味の教科書であるといふ特色は、かういふ文で最もよく窺はれるのである。もとより、自然の景物を題材としたものばかりが、徒然草の趣味の教科書たる所以を示してゐるのではない。有職・故實その他當時のいろ／＼の生活事實を兼好は趣味の眼を以て眺めてゐる。が、特に、この文では、自然の見どころ、年中行事的人事に對する趣味といふものについて、われらに教へるところが多いのである。即ち、本課では、本文そのものから來る味はひを汲み取らせると共に、既習の節の内容と比較せしめて、「徒然草」といふ隨筆に含まれてゐる價値をも考へるやうに導かるべきである。

6 設問

- 1 「あはれ」の語義と用法とについて説明せよ。
- 2 「あわたしう散過ぎぬ」の「ぬ」は、今日で何といつたらばよいか。
- 3 次の語句を文法に注意してその意義を解して見よ。  
イ、花橋は名にこそおへれ。  
ロ、水雞の叩くなど、心細からぬかは。

ハ、取集めたる事は秋のみぞ多かる。  
ニ、魂祭るわざは、あづまの方にはなほすることにてありしこそあはれなりしか。

7 釋義

【四時のあはれ】 春夏秋冬の四時に於ける感興。  
「あはれ」は、こゝでは、喜怒哀樂を通じて心に感興をおこさしめる情趣をいふ。

【折節】 ヲリフシ。こゝでは、季節・時節などの意。

新古今集、夏に「折節も移ればかへつ世の中の人の心の花染の袖」

【物ごと】 物毎。それ／＼のもの。こと／＼。萬事。

中務内侍日記に「立ちさわぐ水鳥のけしき、中島の松の木末、物ごと。に面白きこと限りなし。」

【物のあはれは秋こそまされ】 「物のあはれを感ずることは、秋が一ばんまさつてゐる。」との意。

拾遺集、卷九、雜下、よみ人知らずの歌に

春はたゞ花のひとへにさくばかり物のあはれは秋ぞまされる

によつて、かやうに書き出でたものである。

その他、萬葉集・源氏物語等に春秋の争のことが見え、秋の情趣が春に優つてゐると斷じてゐる者が少なくない。それらをもとりすべて、「人ごと」といつたのである。

「人ごと」は、「誰も皆」といふほどの誇張法。

「いふめれど」は、「いふやうではあるが」の意。

【それもさるものにて】 この下に「あれど」を補つて見ることがよ。

「それもさることにて、一理あるけれども、しかし。」それもさうではあるが。」などの意。

【いまひときは】 今一層。今一段。

「ひとときは」は、一際。一層。一段。ひとしほ。更に。

源氏物語の帚木の卷に「心にまかせて、ひとときは人の目を驚かして。」

【春の景色にこそあめれ】 春のやうすであるやうだ。

「景色」は、正しくは氣色。けはひ。やうす。

「あめれ」は「あるめれ」の約。あるやうに見える、あるやうだ、などの意。

【のどやかなる日影】 天氣がおだやかで、うろ／＼かな日の光。

「のどやか」は、「のどか」に同じ。空が晴れてうろ／＼なこと。天氣のおだやかなこと。

枕草子卷一に「やよひ三日、うら／＼とどかに照りたる。」

【日影】は、日の光。日の影。

萬葉集卷四に「朝日影にほへる山に照る月のあかざる君を山越しにおきて」

【霞みわたりて】 一面にかすんで。遍くかすんで。

枕草子卷十一に「日はいとうら／＼かなれど、淺緑にかすみわたるに。」

【花もやう／＼けきだつほどこそあれ】 花の苔も次第にくらんで、咲きさうになつて來たそのときに。

「やう／＼」は、「やうやく」の音便。おひ／＼に。次第に。漸次。

「けしきだつ」は、様子が外面にあらはれること。こゝは花の咲くやうが見えてくること。

源氏物語の初音の巻に「いつしかとけしきだつ霞に。」  
【心あわたじしう散過ぎぬ】 心いそがしさうに、あたふたと散つてしまつた。

「心あわたじしう」は、心のあわたじしいさま、氣のせかせかするさま。

榮華物語の日蔭蔓に「いと心あわたじしけに思して。」  
【青葉になりゆくまで云々】 いや／＼花が散つてしまつて青葉が出る頃になるまで、何かにつけて、いろ／＼と心をなやます。

在原業平の詠「世の中にたえて櫻のなかりせば、春の心はのどけかりまし。」と同意。



【花橋は名にこそおへれ】 花橋は香氣がよくて、これをかけば、昔の或歌人がさつきまつ

花橋の香をかけば昔の人の袖の香ぞする  
とよんだやうに、昔の人の袖の香もおもひ出でられ、頗る有名ではあるけれど。

「さつきまつ云々」の歌は、古今集、夏に「題しらす、よみ人しらす。」として見えてゐる。

【花橋】は、橋に同じ。芸香科の常緑喬木。枝條を密生し、葉腋に刺がある。葉は革質長楕圓形或は楕圓狀披針形。葉柄は無翼。初夏の頃白色五瓣の花を開く。果實は徑二乃至三種の扁球形をなし、赤く熟する。味はすつばくつや、苦い。

垂仁天皇の十年、田道間守(タチマモリ)が常世(トコヨ)の國より齎した田道間花(タチマメナ)といつたのが約まつて「タチマメナ」となつたといふ説がある。

【花橋】は、その花を賞する意より、花の咲いた頃の橋を稱美して、かくいふのである。

【名におふ】は、(一)その名をもつてゐること。(二)有名なること。こゝは(二)の意。

古今集、雜下に「かんな月しぐれふりおける檜の葉の名におふ宮のふるることぞこれ」

謡曲、誓願寺に「所は名におふ洛陽。」

【なほ梅のにほひにぞ云々】 古今集、春上に「題しらす、よみ人しらす」として、「色よりも香こそあはれとおもほゆれ、たゞ袖ふれし宿の梅ぞも。」などとあるやうに、やはり梅の香の方がかへつてあはれがふかいと思はれる。

【山吹の清げに】 山吹の花が、さも清らかに見えることをいふ。

【山吹】は薔薇科に屬する灌木。莖は青緑色で細く叢生する。中心は柔かで白い。葉は單葉で桃に似る。初夏の頃黄金色の花を開く。稀には白色のものもある。

【藤のおぼつかなき様したる】 藤の花が外の木などにまつはりついて、たど／＼しく、不得要領な風をしてゐるのもおもしろい。一説に、藤の花の紫がおぼろで、はつきりしないことだともいふ。これでも意味は通じる。

【藤】は豆科に屬する植物。纏繞莖を有し、葉は羽狀複葉をなす。花は白色又は淡紫色を呈し、總狀花序に排列する。葉は大きくて、短い密生毛を有する。觀賞用として栽培せられ、莖皮の纖維も亦種々の用に供せられる。

【おぼつかなし】は、判然しないこと。分明ならぬこと。おぼろなこと。おぼ／＼しいこと。

古今集、春上に「をちこちのたづきも知らぬ山中におぼつかなくもよぶこどりかな」

【灌佛】 クランプツ。「灌佛會」のこと。毎年四月八日、釋迦の誕生の記念に行ふ法會。浴佛會・佛生會・龍華會などともいふ。各宗の寺院では、この日小さい假室を作り、種々の花を以てこれを飾り(これを花御堂といふ)堂内に誕生佛を安置し、その下に銅盃を設けて甘茶(正しくは五種の香水を用ひる)を湛へ、參詣の人が小柄杓を以てこれを誕生佛に灌ぎかける。我が國では、推古天皇の十四年(一一二六六)、大和の元興寺でこれを行つたのを初めとする。

降つて中古頃は、朝廷でも灌佛の公事を行はせられた。【祭】 マツリ。毎年四月中の西の日に行はれた賀茂神社の葵祭をいふ。その儀式が盛大であつたので、單に祭とのみいつて葵祭を意味するに至つた。

【葵祭】とは、祭日に葵の葉を奉幣使供奉の職員の衣冠・車簾等にかけて、又社前をかざる故の名である。葵は、加茂葵(單に葵ともいふ。學名は雙葉細辛)とて

馬兜鈴科の山地自生草本。莖は地上を匍匐し、諸所より鬚根を下し、又短枝を生ずる。通常一寸餘で二岐をなし、心臟形の變葉が相對する。故に二葉葵とも、二葉草ともいふ。春二葉柄の間に花梗を出し、三瓣暗紫色鐘狀の花を下垂する。

祭は欽明天皇の御代に起つたといふ、今猶行はれてゐる。

【人】 誰とも知りがない。

花が散りはてれば、今迄浮きたつた心も落ちついて、稍、さびしさを感じ、緑いろこき新樹に對すれば、何となく深遠の感を抱かせるものである。そのころもちをいつたのである。

古今和歌集、春上に、

櫻の花のさけりけるを見にまうで來りたりける人よ  
みておくりける  
と題して

わが宿の花見がてらに來る人は散りなむ後ぞ戀しかる  
べき

といふ躬恆の歌があるので、或人を躬恆だらうといふ舊

説もある。

【げにさるものなれ】「ほんたうにさうだ。」と、さる人の説に同意の旨をいつたのである。

【五月】 サツキ。陰曆の五月。早月とも早月とも書く。早苗月の略か。

萬葉集卷十七に「わがせこが國へましなばほととぎす  
鳴かむさつきはさぶしけむかも」

【菖蒲茸く頃】 アヤマフクコロ。菖蒲を屋根にふく端午の頃。端午に菖蒲をふくことは、枕草子に、

九重のうちをはじめて、いひ知らぬ民のすみかまで、いかでわがもとにしげく茸かむと茸きわたしたる云々。などあるを見れば、古來上下一般の風習であつたと見える。

「菖蒲」はアヤメグサともいひ、又シャウブともいふ。天南星(サトイモ)科の多年生草本。池沼の水邊に生ずる。地下の根莖は太く、劍狀の葉を簇出する。葉は花しやうぶに似て質が厚く、一種の香氣がある。葉間に花軸を抽き、肉穂花序をなして、淡黄色の小花をつける。葉は端午の節供に用ひ、又香料を取る資に供する。

で、その鳴くことを叩くといふ。

「水雞」は、又秧雞とも書く。涉禽類の水鳥。脚と趾とは共に長く、翼は短くて圓く、尾は短く、嘴は赤くて細長い。體色は上部は緑褐、下部は黒色及び鉛灰色の條紋、横腹には黒白の條紋がある。夏秋田澤に居り、小魚・蟲類などを食する。

【心細からぬかは】 反語。心細くなからうか、實に心細い。

【六月】 ミナヅキ。陰曆六月の稱。「水無月」とも書く。萬葉集卷三に「富士のねに降りおける雪はみなづきのもちにけぬればその夜降りけり。」

【あやしき家】 賤しく見ぐるしい家。

枕草子卷三に「人もあはなむと思ふに、更にあやしき法師、あやしみのいふかひなき者のみ、たまさかに見ゆる、いと口をし。」

【夕顔】 ユフガ

ホ。壺蘆。胡

蘆科の栽培一年生蔓草。卷

鬚によつて他



【水雞の叩く】  
クヒナのタ、  
ク。水雞の鳴  
く聲はちやう  
ど人が戸を叩  
く音のやうに  
きこえるの

「端午」は公武年中行事の一。陰曆五月五日の佳節をいふ。初五の義で、五が午に通じたもの。中古時代、朝廷では天皇親ら武徳殿に臨御して節會(セチエ)が行はれ、節會が終つて後、左近・右近の馬場で騎射が行はれた。徳川幕府では五節供の一として嚴重な儀を行ひ、幕府出仕の面々が登城して祝儀を陳べることゝを式例とした。民間ではこの日を祝して、軒端に菖蒲をふき、粽(チマキ)。柏餅を食し、菖蒲酒を祝つたので、菖蒲の節供ともいつた。特に七歳以下の男兒のある家々では、武者繪の幟及び鯉幟・吹流しなどを樹て、室内にも座敷幟・宵人形を飾つてその立身榮達を祝つた。この風は今も一般に行はれてゐる。

【早苗とる頃】 早苗を取つてこれを水田に移植する頃。

「早苗」とは、苗代から田に移しうゑる頃の稻の苗をいふ。古今集、秋上に「きのふこそ早苗とりしかいつの間にいなばそよぎて秋風の吹く」



物に巻絡する。葉はやゝ心臓形で浅く、掌狀に分裂し、長柄がある。夏白い花が夕に開いて朝にしぼむ。實は圓くて長く、色が白い。果皮で干瓢を作る。

【蚊遣火ふすぶるもあはれなり】蚊遣火をふすぶるさまも亦情趣が深い。

【蚊遣火】(カヤリビ)とは、蚊を追ひやるためにたく火。かやり。かいぶし。

宇津保物語の藤原君の巻に「か。や。り。火。の。け。ぶ。り。も。雲。と。なるものを下草をしもむすばさらめや」

「ふすぶ」とは、燃やして煙に立たせること。又、燃えあがらせないで煙に立たせること。いぶすこと。くゆらせること。けぶらすこと。くすべること。

源氏物語の須磨の巻に「後の山に柴といふものをふすぶるなりけり。」

【六月被またをかし】六月被のさまもまたおもしろい。

【六月被】(ミナヅキバラヒ)は陰曆六月晦日に行ふ大被(オホハラヒ)。又ナゴシ(夏越・名越)ノハラヒとも、夏被ともいふ。「ナゴシ」は神意を和し慰める意であらう

か。

「大被」は犯した罪及び觸穢を解除する儀式で、毎年六月と十二月とに、朝廷で行はれた。昔は親王以下百官が朱雀門に會し、中臣が祝詞をよんだ。始めて天正五年紀に見え、中世以後は陰陽家の職となつた。撫物(ナデモノ)とて人形を作り、それで身體を撫でたのを川原に持出で、歌を唱へて被ふ等のことがあつた。今も宮中並に各神社で善く行はれてゐる。

【棚機祭る】年中行事の一。古くは乞巧奠(キカウテン)といひ、また織女祭・星祭ともいつた。陰曆七月七日の夕、牽牛・織女の二星を祭つて機杼・裁縫の巧を祈るもの。我が國では聖武天皇の天平勝寶七年(一四一五)に始まつたといふ。徳川時代には五節供の一に定められて、上下一般にこれを祝するを例とした。

もと、支那の故事。荊楚歳時記に、

天河之東、有織女。天帝之子也。年年機杼勞役、織成雲錦天衣。天帝憐其獨處、牛嫁河西牽手。即嫁後遂廢織。天帝怒命、歸天河東。但使其一年一度相會。

これを乞巧奠といふことについては、圖書に、  
七夕婦人以綵練穿七孔針、或以金銀鑲石爲陣、果於庭中。以乞巧。有雙子、綉於瓜上。則以爲得巧。

とあるにある。

これを「たなばた」といふは、「たなばたつめ」即ち棚機(機には棚があるから、機のことをかくいふ)を織る女の略。蓋し織女を棚機津女に附會したのである。

【なまめかしけれ】優におくゆかしいことである。

「なまめかし」は、(一)わか／＼しくみづ／＼しいこと。(二)優におくゆかしいこと。上品なこと。みやびやかなこと。優美なこと。閑雅なこと。(三)艶に美しいこと。いろめかしいこと。こゝは(二)の意。

徒然草に「すべて神の社こそ捨てがたくなまめかしきものなれや。」

【夜寒】ヨサム。秋など、夜になつて寒く成りゆくこと。又、その寒さ。

後拾遺集、秋上に「さ夜深く旅の空にて鳴く雁はおのが羽風や夜寒なるらむ」

【雁鳴きて来る頃】雁が鳴きながらわたつてくる頃。

雁は游禽類、鳥類の一種。その鳴く聲によつて「カリ」と名づける。又、音讀してガンともいふ。體の長さ二尺ばかり。嘴はほゞ頭長に等しく、末端のみ硬い。背は褐色、翼は帯青色。秋來

り、夏去る。

古今集、秋上、藤原音根の歌に

「秋風に聲をほにあげてくる船は天のとわたる雁にぞありける」

【萩の下葉色づくほど】萩の下葉が霜にたまつて紅くなる頃。

古今集、秋上、題しらず、よみ人知らずの歌に

「夜を寒みころもかりがねなくなべに萩の下葉もうつろひにけり」

【早稲田】ワサダ。こゝはワセダと讀まぬやう。早稻(ワセ)即ち最も早く熟する稻をうゑてある田。

萬葉集卷七に「いそのかみふるのわさ田をひてすとも繩だにはへよもりつゝをらむ。」

【取集めたる事】いろ／＼と、けしきのおもしろいこと。

「取集む」とは、何やかやいろ／＼なること。何やかや残るところなきこと。

源氏物語の明石の巻に「鹽やく煙かすかにたなびきて、取集めたるところなり。」

【野分】ノワキ。秋吹く暴風。野の草木を吹き分ける風の義。

「野分のあした」とは、夜來の野分が吹きやんだ翌朝をいふ。

玉葉集、秋上に「夜もすがら野分の風のと見れば末ふす秋に花ぞまれなる」

【源氏物語・枕草子などに事ふりにたれど】源氏物語や枕草子などにもくはしく記されてゐて、ふるくさいことではあるが。

枕草子第九十八段「風は」の條に、

のわきの又の日こそいみじうあはれにおぼゆれ

とあり、源氏物語の野分の巻にもそのさまをうつしてある。なほその條参照。

「源氏物語」は五十四帖。紫式部の作。著作の年代は不明であるが、寛弘五、六年の頃既にその一部は世に流布してゐたことは明らかで、全部完成したのはかなり後のことであらう。大體二部に分れ、初の四十一帖は光源氏を主人公として、その花やかな一生を描き、後の十三帖は薫君を主人公として、惠まれぬ戀の半生を描いた。而して最後の十帖は引離して宇治十帖とも稱せられる。五十四帖の巻の名は、

桐壺・帚木・空蟬・夕顔・若紫・末摘花・紅葉賀・花宴・奏・神・花散里・須磨・明石・澄瑠・蓬生・關屋・繪合・松風・薄雲・楳(びつ)、少女・玉葉・初音・胡蝶・螢・常夏・篝火・野分・行幸・藤袴・櫻柱・梅枝・藤裏葉・若菜上下・柏木・横笛・鈴蟲・夕霧・御法・雲隱・匂宮・紅梅・竹川・橋姫・稚木・總角(すげ)・早慶(はや)・宿木・東屋・浮舟・蜻蛉・手習・夢浮橋。

註釋・研究の書は頗る多い。中にも北村季吟の湖月抄、賀茂眞淵の新釋、本居宣長の玉の小櫛、萩原廣道の評釋等は最もすぐれてゐる。傳本には青表紙本・河内本の二系統がある。

「枕草子」は清少納言の隨筆。初め清少納言の記といつた。殿上生活を中心として、世上の事象に就き著者獨特の繊細鋭利な觀察を以て巧に描寫した長短三百有餘の文章をあつめたもの。殊に「心ゆくもの」及び「あてなるもの」はその代表的名篇といはれてゐる。寛和・正暦の頃から長保年間に互つて書かれたものであらう。源氏物語と共に平安朝時代國文の雙璧と稱せられてゐる。

【おぼしき事言はぬは腹ふくる業(ワザ)なれば】思ふこととがあるのに、口をつぐんで言はずにゐると、腹にたまつて不愉快になることだから。

大鏡の序に「おぼしき事いはぬはげにぞ腹ふくることちしける。かゝればこそ、昔の人は、いはまほしくなれば、穴をほりて言ひいれ侍りけめ。」

蘇軾(東坡)の文に「忍事腹如囊」

【あぢきなきすさびにて云々】「かやうな陳腐の文は、もとよりつまらぬなぐさみわざで、早速破り棄つべきものだから、人の見るはずのものではない。」との意。

「あぢきなきすさび」は、つまらぬなぐさみわざ。

「かいやりすつ」の「かい」は、接頭語「かき」の音便。

「やりすつ」は「破り棄つ」の意。

【冬枯】フユガレ。冬になつて草木の葉の凋落すること。

又、冬のけしきの寒くしてさびしいさま。

【をさく】おほかた。たいてい。あまり。まんざら。

(下に打消の語を添へる。)

宇津保物語の俊蔭の巻に「そこにゐてもものたまへど、をさをさいらへもせず。」

【汀】ミギハ。水際の義。水の陸地に接するところ。みづぎは。

土佐日記に「行く人もとまるも袖の涙川、みぎはのみこそ濡れまさりけれ」

【遣水】ヤリミヅ。庭などに水を導いて流しやるもの。庭



園に遶る流水。

宇津保物語、吹上、上に「やり水にこがねの船ども漕ぎつらねて船遊びして。」

【またなく】二つとなくこの上もなく。ならびなく。たぐひなく。

枕草子卷十二に「上たちの、またなきに

もてかしばかれたる妹一人あるばかりにぞ。」

【すさまじきものにして】この副詞句は、下の「心細きものなれ」にかゝつてゐることに注意させたい。

「すさまじ」は、ものすごいこと、ものさびしいこと。

紫式部日記に「年暮れてわがよふけゆく風の音に心のうちのすさまじきかな」

新古今集、冬に「山里の風すさまじき夕ぐれに木の葉みだれて物ぞ悲しき」

【御佛名】 オブツミヤウ。正しくは佛名會(ブツミヤウエ)。陰曆十一月十九日から三日間、僧侶をして宮中清涼殿で佛名經を誦み、過去・現在・未來三世の諸佛の名號を唱へしめ、六根の罪を消滅せしめる法會。光仁天皇の寶龜五年(一四三四)から始まった。一説に、淳和天皇の天長七年(一四九〇)十二月始めてこれを修したともいふ。

【荷前の使】 ノザキのツカヒ。古へ、年の終に、諸國より奉れる荷前即ち貢物の荷の初穂を十陵・八墓に獻られる使。

十二月三日に使定め儀があつた。使は納言以下の官人を選び、十一月中の吉日を擇んで遣はした。十陵は御歴代の天皇及び御生父母等、八墓は外戚の祖父母等で、世變轉がある。唯天智天皇の陵にのみは、歴世遣はされた。

【あはれにやむことなき】 興趣が深く、又もつたないことである。

「やむことなし」とは、たいそう貴いこと、恐れ多いこと、もつたないこと。

源氏物語の桐壺の卷に「いとやんごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めきたまふありけり。」

【公事】 クジ。朝廷の政務及び儀式。おぼやけごと。古今著聞集卷十一に「正朔の節會より、除夜の追儼に至るまで、公事の禮一にあらず。」

【春のいそぎ】 春をむかへる準備。

【いそぎ】 は、用意。仕度。準備。土佐日記に「この頃のいでたちいそぎを見れど、何事もえいはず。」

【催しおこなはるゝ様ぞいみじきや】 いろ／＼と公事どもをとり行はせられるやうすは、たいそうおもしろい。

【いみじ】 は、甚だしい、すぐれてゐる、いちじるしい、などの意で、善惡に通じて用ひる。中古文では、この語のみ用ひて、うれしい、烈しい、など下にあるべき語を略し、前後の文勢でこれを知らせたものが多い。本文の如きもその例である。

【や】 は感歎の意を示す助詞。疑問の助詞ではないことに注意させたい。

【追儼】 ツキナ。中古禁中で行はれた公事の一。十二月晦

日の夜、年中の疫鬼を拂ふ儀。一に儼遣(ナヤラヒ)又鬼遣(オニヤラヒ)ともいつた。鬼は大舍人寮の舍人これに當り、大舍人長が方相氏(鬼を儼ふ任にあたる人)を勤める。方相氏は黄金四目の假面をつけ、玄衣・朱裳・戈を右にし、楯を左にして鬼を儼ふ。別に仮子といふ八人の小兒が紺布・朱衣、末額をつけてこれに従ふ。陰陽師が南殿の版に就いて祭文を讀むと、方相氏が先づ儼聲を發し、戈を以て楯をうつこと三遍、上卿以下相唱和して疫鬼を追ふ。殿上人は御殿の方に立つて桃の弓、葦の矢でこれを射、桃の杖でこれを儼ふ。鬼は宜陽・承明・陽明・玄壇四門を廻つて瀧口から逃れ去る。

【四方拜】 シハウハイ。毎年正月元日寅の一刻に、主上が親しく清涼殿の東庭に出御、天地・四方・山陵を拜して天下泰平・五穀豐穰・寶祚長久を祈らせられる大祭。

明治以後は天地四方を拜することを停め、更に皇大神宮、豐受大神宮、天神地祇、神武・孝明兩山陵、氷川神社、男山八幡宮、鹿島・香取兩神宮を順次御拜あらせられる

こととなつた。

その御儀は、午前四時神嘉殿の庭上に屋を設け、中央に簀簾を敷き、几・燈臺を据ゑ、御座を作り、周圍に屏風二雙を立てる。同五時三十分出御。御拜終つて、更に賢所を拜せられる。

【つごもり】 晦。月隱(ツキゴモリ)の略。陰曆で月の末又は末日の稱。こゝは一年の最終日、大つごもり、又、大みそかをいふ。

伊勢物語に「富士の山をみれば、さつきのつごもりに雪いと白う降りり。」

【いたう暗きに】 たいそう暗いのに。

「いたう」は、「いたく」の音便。たいそう。はなはだ。

伊勢物語に「雨もいたうふりければ。」

【松】 タイマツ(燒松)の略。松の脂多き部分、又は竹・葦などを束ねて火を點じ、道を照らすに用ひたるもの。

【何事にかあらむ事々しくのゝしりて】 掛取りなどが、この機會を逸せじと奔走するさまをいふ。

「事々しく」は、たいそうらしく、ぎやうさんらしく、

事ありげに。

古今集、俳諧歌に「秋の野になまめき立てる女郎花あなことくし花も一時。」

「のゝしる」とは、やかましく言ひさわぐこと。聲高く言ひたてること。

土佐日記に「とかくしつゝのゝしるうちに夜ふけぬ。」

【足を空に感ふ】 あわたゞしげに東奔西走すること。

「足を空」とは、あわて又は浮きたつて、心のおちつかぬさま。

源氏物語の夕顔の巻に「殿のうちの人、足を空に思ひ感ふ。」

落窪物語巻中に「車のをのこども、足を空にてまどひたふれて。」

【魂祭るわざ】 古は大晦日に精霊を祭つたのである。

亡き魂は大晦日午前に来て、正月一日卯の時に歸るものとして、その来た夜に祭るのである。

後拾遺和歌集哀傷に、十二月のつこもりの夜讀み侍りける、和泉式部「なき人の来る夜ときけど君もなし、わが

すむ宿やたまなしの里」

【あづまの方】 關東地方。東國地方。

【引きかへ】 きのふにひきかへて。昨日にうつてかはつて。

【大路】 オホチ。幅の広い通路。大道。

萬葉集卷十五に「青によし奈良の大路。はゆきよけどこの山道はゆきあしかりけり。」

【松】 こゝの松は門松、即ち新年に門口にかざり立てる松といふ。まつかさざり。

8 通釋

文學博士芳賀矢一著「國文口譯叢書第一篇徒然草」の中から、同博士の筆になる本課の口譯を左に掲げて参考供へよう。

四時の折々のうつりかはりといふものは、何を見ても趣味のふかいものである。物事にあはれ深いのは秋が一番であると誰でもいふやうであるが、あはれを感じるといふ方ではともかくとして、それよりも、人の心を段々浮きたゞせるものは、春の景色であるやうだ。鳥の聲にしても、ことの外にぎやかに春らしくきこえ、のんびりした日あたりに、垣根近くの草が青々と芽を出す頃から、段々春がたけ、露が一面にたなびいて、梢々の

花もおひ／＼色めいてくると、雨風がうちつゞいて、折角の花も心せはしく散つてしまふ。若葉青葉に包まれる頃までは、何につけても、心が落ちつかぬ。花柄は昔から名高きはあるが、やはり梅の花のかをりの方に、昔の事の追憶が、なつかしく想ひ出される。しかし又山吹の花の、さつぱりしたさまや、藤の花の、外の木をたよつたやうな不得要領な風をさしてゐるさまなど、どれもこれも棄てがたい趣がある。

四月八日の灌佛會の頃や、同月中旬の賀茂の葵祭の頃や、若葉の梢の茂みが涼しさうになつて行く頃は、世間のあはれも一番身にしみ、人の戀しさも増すものと、或人のいつたのは、全く本當である。五月のあやめの節供の頃や、田植の頃や、水雞が戸をたゞくやうな音をして鳴くさまなど、何一つとして、心細くなからうか、實に心細い。

六月になると賤しい小家に夕顔の花がほんのりと白く咲いて、蚊遣火をいぶしてゐる様子なども趣がある。六月の大祓も亦おもしろいものである。

七月の七夕祭は又中々優美である。それから段々夜寒になつて、雁が鳴いて来る頃、萩の葉が黄ばんだり、早稲を刈つて乾かしたりするなど、いろ／＼景色の面白いことは、秋が一番多い。それから野分といつて、暴風の吹いた翌朝なども、面白い

がある。こんな事をいひつゞけると、源氏物語や枕草子に書いてあるのと同じで、いかにも陳腐であるが、同じ事だからとて、今更いふまいといふ譯ではない。思つてゐる事をいはないと、腹がふくれるわけゆゑ、筆のすゝむまゝに書いて見るので、もとよりつまらない戯れがきで、破り棄てるべきものであるから、人の見る筈のものではない。

さて冬枯時のやうすは秋にも決して劣るものではない。池の汀の草に紅葉が散りこぼれて、眞白に霜がおりてゐる朝、遺水から水蒸気が立つてゐるところなどは、誠に面白い。

年もすつかりおしつまつて、誰も彼も疊ぎ合つてゐる頃は、この上なく人の心を惹くものである。見る人もない、寒さうに澄んだ二十日餘りの月影などときたら、まことにすさまじく心細いものだ。

御佛名會だの、荷前の使だのと、趣味の深い貴い御儀式が、春を迎へる準備に取り重ねて、いくつも／＼とり行はれるのも、面白いことである。

追離からつゞいて元旦の四方拜になるのもおもしろい。晦の夜、闇の夜中を、松明をともして夜中過ぎまで人の家の戸口をたゞき、何事かしら、きやう／＼しくさわぎ立て、足も空かけまはつてゐるが、晴方からは、さすがにひつそりとなるのも、



年の名残とおもへば心細い。精霊迎はこの頃都では晦にはせぬやうになつたが、東國の方ではまだひきつゝいてやへてゐるのは、いかにも興の深いことである。さうかうするうちに明けはなれた空は、別に昨日とかはつたとは見えないが、何だか、うつてかはつてめづらしい心持がする。都大路には松を門並に立て渡して、世の中がすべて華やかに嬉しうに見えるのも、亦非常に心を惹くものである。

9 挿圖

賀茂祭 田中訥言筆

日本百科大辭典から左に「賀茂祭」の條を抄録する。この挿圖と照合して適宜説明せられたい。  
かもまつり(賀茂祭)。官幣大社賀茂別雷神社、同賀茂御祖の兩社の大祭。現今いつれも五月十五日に行ふ。その祭儀の概略をいへば、勅使内藏使・山城使・檢非違使・舞人等皆舊公卿これを勤む。當日すべて皇居に參集し、裝束の上、午前八時宜秋門より出で、南門前を過ぎ、清和院御門を東へ、梶井町を北へ、出町より葵橋を渡りて下社に着、こゝにて祭典あり。終りて再び葵橋を渡り、賀茂堤を経て、御園橋より上社に至り、こゝにて祭典あるなり。この祭列を拜するには、葵

橋を、渡り給ふを、橋の袂の茶店又は積にてするを便とす。行列の順序は、騎馬の警部先づ進み、次に看督長代、次に檢非違使代(騎馬)、次に火長、次に檢非違使、調度係、童、鉾持、山城使(騎馬)、馬副、手振、雜色、御幣履、内藏寮(生、馬寮使、御車(飾りたる御所車にて、飾りたる牛これを曳き、牛飼の童、口取、白丁、雜色、替牛隨ふ)、和琴、退紅二人奉侍)、舞人、籠、勅使(騎馬束帶)、鞍鞍置きたる馬、又これに懸きて、舍人・居飼・隨身・手振等なり。なほ列中花傘といふあり。年々その様同じからざれども、造花もて美しく飾られ、勅使・内藏使代の後に高くさし懸す。人々皆諸懸(芝鬘柱枝懸けたるが冠の上に見ゆ。又當日糺の祭に於て駿馬の式あり。舊くは陰曆中の酉の日に行ひ、二酉の月は下の酉の日に行ふ。男山八幡宮の祭を兩祭といふに對して、この祭を北祭といひ、その盛大なること、京中にてその比を見ざるを以て、單に祭とのみいへり。祭日に葵の葉を以て社前を飾り、又供奉職員等の衣冠車簾に懸く。因りて又葵祭とも稱す。祭前午の日又は末の日を下して齋王の御饗あり。御饗の後、六衛府をして戒嚴せしむ。これを警固といふ。祭日には朝廷より奉幣使以下を發し、齋王に供奉せしむ。齋王先づ下社に參向し、次に上社に向ふ。その式兩社同一なり。奉幣使の行列は

頗る壯觀にして、供奉の職員皆車服を裝飾し、互に華麗を以て事とせしかば、上は上皇・女院より下は田夫・野叟に至るまで、先を争ひて見物し、棹敷は所々に構へられ、物見車は路上に填塞して、容易に往來することを得ず。爲に僕従の争ひしこと多し。祭の翌日、齋王神館を發して齋院に歸る。乃ち警固を解く。この祭應仁戰亂の後久しく中絶せしを、元祿七年に再興せり。然れども往時の盛なるには若かずといふ。

挿圖中に見える御所車はいはゆる御車、騎馬束帶の人は勅使である。

筆者 田中訥言(タナカトツゲン)は徳川時代の畫家。名は痴、字は虎頭、大虎齋と號した。尾張に生れ、京都に住した。藤原信實の畫風を學んで有職の圖に長じ、法橋に敘せられた。晩年失明し、舌を噛んで歿した。時に文政六年(二四八三)であつた。

滯佛 英一蝶筆

釋義中の「滯佛」の項を参照して、適宜説明を與へられたい。  
筆者 英一蝶(ハナフサイツテフ)は徳川時代の畫家。本姓は多賀、名は信香、字は君受。大阪の人。十五歳のとき江戸に來り、狩野安信に師事して畫を學び、又土佐の畫法を究めて終に一家を成した。元祿十一年(二三五八)罪を以て三宅

島に流され、寛永六年(二三六九)赦されて歸つた。流罪の原因は朝妻船を多がいて將軍綱吉の放埒を諷刺した爲だといはれてゐるが、異説もある。享保九年(二三八四)歿。年七十三。

追録 冷泉爲恭筆

釋義中の「追録」の項を参照して、適宜説明せられたい。

筆者 冷泉爲恭(レイゼイタメヤス)は徳川末期の畫家。岡田氏。爲恭はその名。別に冷泉三郎とも稱した。京都御所に仕へて正六位下式部大丞に敘任せられた。始め狩野永岳の養子となり、後一家を起した。宮殿・故實・位官の人物等の描寫はその長とするところである。その筆意は田中訥言より得たところが多く、又浮田一蕙に似通つたところもある。書も亦堪能で、古代の風をよく、畫上に蘆手書の和歌を題したのものなどもある。晩年知恩院の什寶なる法然上人の四十八卷傳を臨寫してから、その技が大いに進んだといふ。文久三年(二五二三)五月五日歿。年四十。

## 二〇 民 謠

### 1 解 題

島木赤彦の全集たる「赤彦全集」中の「歌道小見」の中から一節を採つた。但し原文中から處々省略したところがあるが、それは取扱はれてゐる歌の性質によつて、必ずしも讀本教材として上乘でないと思はれるものを除いたためである。

「歌道小見」は、そのはしがきに、

「歌道小見」は、歌に入りはじめた人にも、久しく歌の道に居る人にも、或は單に歌を鑑賞する人にも通ずるやうな歌論をなしたいと思つて稿を起したものである。久しく歌にゐるもの必ずしも歌を解せず。歌の門外にゐる人が往々巨人の眼で歌を見ることがある。歌の道は人情自然の道であつて、萬人共通の大道にあるべきである。歌の門内門外を問はず、博く教示をうけたいと希うてこの稿を起した所以である。

と記してゐる所によつて、その内容を窺知し得る。

本論「歌道小見」と、「萬葉集の系統」及び「隨見録」二

附録から成る。

### 2 作 者

島木赤彦 シマキ アカヒコ。

本名は久保田俊彦。明治九年、長野縣上諏訪町大字角間町かどまに生れた。生後間もなく、八ヶ嶽の麓、豊平村にうつつた。そこは廣漠たる、まづしい裾野であつた。その村に、十九の年まで居つた。



十九の年には、長野縣尋常師範學校に入學した。入學して始めて萬葉集を讀んだ。當時は書物が自由に手に入らなかつたので、萬葉集を書寫したとのこと。始めは、新體詩を

やつてゐたが、子規の歌を讀んで大いに感激した。廿四歳のとき、新聞「日本」に十四首の歌を送つたが、僅かに一首採られたのみであつた。そこで、もつと勉強せねばならぬと考へた。

師範學校を卒業したのは、二十三のときで、爾後十六年間、教育のことに従事した。最後の二年は郡視學を務めた。大正三年四月東京に出て、「アララギ」に關係し、斯道のために盡したが大正十

五年三月歿した。年五十。  
歌風は子規以来の寫生道に立ち、萬葉調を唱へ、「アララギ」派の中心人物となつてゐる。  
歌集及び著書に、馬鈴薯の花・切火・水魚・大虚集・十年・柿蔭集・歌道小見・萬葉集の鑑賞及び其の批評がある。

### 3 編纂の用意

「民謡」といふ詩形は詩のうちでも最も原始的なものである。特別の文明を持たない社會にいち早く發生する。さうして特定の作者といふものがわからなくて、その部落の歌として、その集團の歌として發生し、傳唱される。その歌には飾らぬ人間の姿が——殊に素樸な人々の情緒の——にしみ出したものが多い。そしてその上に、内容に最も相應した諸調を持つ韻律の自然に流れた曲節があつて、歌ふに勝へ、聞くに勝へ、更に樂しむに悲しむに勝へた詩の形に作り上つてゐる。さうした民謡であるから、それが包蔵してゐる内容は誠に豊富である。

詞句の上にも、感情の上にも、人間味の上にも、又生活・經濟の問題についても、思想・民族性についても、その

他多くの方面の貴重な内實を二ばいに藏してゐる。特別の手を加へずして保存された貴重な國寶であり、天然記念物である。

近時民謡についての識者の關心が高まつて來た。そして民謡の研究といふ仕事と新民謡の創作といふ仕事とが熱心に行はれるやうになつた。これらのものが健全に發達して行くことは社會の文化の上に喜ぶべきことである。以上のやうな趨勢にある故に、民謡といふ遺されたる文化に對して、些少なりとも理解を有してゐることは現代人の資格の一つとして必要なことである。本課はさうした事に緒を興へるためのものであつて、徒らに輕々に看過してはならないものである。

### 4 要 旨

我が國の民謡は遠く民族の原始時代からあつたもので、現存の記録について見れば萬葉集の古に溯り、以下各時代のものの書に見え、順次に發達して今日に及んでゐる。それらの民謡の生命となり、特色をなしてゐるものは何であるかを考察したのである。

文章全體は、主だつた民謡數首をあげて、それが解説を試みた形になつてゐるが、大體の解説の主眼は前述の、民謡の特質の二つを例證するところにあるのである。

### 5 概 説

第一節(一三九頁—一四二頁八行) 民謡は、その生活から唄はれてゐる。即ち民謡の生命は、民衆の生活苦が產出した惻々として人心を動かす力を持つてゐる情調であることを例證した。

第二節(一四二頁九行—終) 民謡は民衆の生活苦が產出したもの、即ち職業や境遇の生む情調が抒べられてゐるので、随つて地方的の個性を表現してゐるものが多いことを述べた。

### 6 取扱上の注意

□中等學校の生徒には俗謡を歌ふことは禁じてあると思ふ。殊に近代の卑穢な流行歌等は火禁物である。そこでこゝに民謡に關する文を讀ませることは、動もすれば生徒に卑俗な流行歌を肯定するかのやうな錯誤感をいだかせるかも知れない。

しかしこゝにいふ民謡は、その地方に於て何百年何千年の歴史を有し、自然の陶汰・彫琢を経た民衆藝術としての歌謡であつて、決して今日流行の俗歌のやうな低級なものでない、民族詩であり、庶民の性情を吐露した民族の自叙傳的藝術作品であることを考へしめ、決して流行歌の讚美でないといふことを知らしめたいものである。

□今日國民歌謡といふやうな名稱で、新作の歌曲がラヂオ等を通じて大いに宣傳されてゐるが、それら多くの歌謡のうち、眞に國民の愛好する民謡として百年の生命を保つものが果してどれだけであらうかと考察せしめ、若しさうした長い生命を有するものが殘存するとしたならば、それらの歌謡はどのやうな條件を具へたものであるべきかを考へさせたい。

□生徒が、父老や土地の人から聞き得るその地方々の民謡は容易に採集出来るであらう。さうした民謡を採集せしめ、それらの中から卑俗低級なものを除き、その餘のものについて、本文に述べてある民謡の特質に照らして、各自の地方の民謡の個性を研究せしめることも興味のある

る課題であらう。

□卑俗低級な流行歌は何が故に排除せねばならぬか等のことも眞剣に考へしめて、健全なる國民的歌謡の發展といふことに意をとゞめしめておきたい。(参考欄参照)

□孔子の如きも音楽に意を用ひ、雅正な音楽を強調してゐる理由にも想ひ到らしめたいものである。

### 7 設 問

- 1 「民謡」といふものの定義をいへ。
- 2 本文には民謡の特性を二箇條にわたつて主として述説してあるが、それは何と何か。
- 3 民謡が地方的個性を表現してゐるとはどんなことをいつてあるのか。
- 4 各地方に、大同小異の民謡が行はれてゐるのは、いかなる理由によるか。
- 5 民謡の一般人心、或は社會に及ぶ影響について考へて見よ。
- 6 社會の文化物として、民謡はどのやうな條件を具備してゐたらよいか。

7 各自の知つてゐる民謡を採集して、これを整理し、その特質をしらべて見よ。

### 8 釋 義

【民謡】 ミンエウ。作歌者も作曲者も不明であるが、一定の地域に昔から傳はつてゐる歌謡をいふ。多くは簡單な形式で歌詞もわかり易い。替歌や旋律の異同も少ない。船唄・馬追歌・盆踊歌・田植歌・米搗歌等の類である。

民謡の中に、特に兒童に關するものを童謡といふ。中には作曲者・作歌者の判明してゐるものもあるが、それが土着の歌となればこれを民謡と呼んで差支ない。

【歌謡】 カエウ。はやりうた。風俗歌。

【唱和】 シャウワ。彼がとなへ此がこたへること。甲の作つた詩歌に乙が和して詩歌を作ること。此處は單に、お互ひにとなへあふ。贈答の意味はない。

【萬葉集時代】 マンエフシフジダイ。萬葉集の歌の作られた時代で略、仁徳天皇の御代から淳仁天皇の天平寶字三年に至る約四百四十年であるが、殊に舒明天皇の頃から

多くなり、持統天皇以後が最も多い。故に飛鳥・藤原・奈良時代の約百二三十年間をさす。

【勅撰集時代】 和歌の勅撰の行はれた時代で、萬葉集のあとをついで、延喜五年四月十八日(假名序)に紀貫之等に仰せて古今集を撰せられて以後、八代集、十三代集等の勅撰の行はれた時代で、新編古今集の永享五年の勅撰まで、平安時代より鎌倉時代の末頃までをさす。

【惻々】 ソクソク。あはれみいたむさま。後漢書に「閭々惻々、出子誠心。」

【情調】 ジャウテウ。特有の氣分。感情的方面の氣分。杜牧の詩に「江南仲蔚多情調、悵望春陰幾首詩。」

【暢氣】 ノンキ。少しも氣苦勞のないこと。氣ののんびりとしたさま。

【船頭唄】 センドウウタ。ふなのり、水夫の歌ふうた。船唄に同じ。

【馬子唄】 マゴウタ。馬の口をとらへて宿場から宿場へと旅人を受けて歩いた馬方のうたふ歌。

【漂泊】 ヘウハク。ながれたゞよふ。一定の住居又は生業

がなくて諸方を徘徊すること。流浪。【遺瀨ない哀音】 ヤルセないアイオン。思ひを晴らすすべもない、いひやうのない哀音。悲しくてたまらないひびき。

【乳が崎】 チがサキ。茅ヶ崎。全集本は「千ヶ崎沖まぢや。」とある。

【心理】 シンリ。心の情態。心持。

【乳が崎】 チがサキ。伊豆大島の東北部にある岬。

【乳が崎沖まで見送りましよがの歌】 實際に歌はれてゐるのは「乳が崎沖まぢや」となつてゐる。「乳が崎の沖まぢは」の意である。さう解すべきである。

この歌は島に残つてゐる人が、船出を送つて、その行く手を氣遣ひ、安全を祈る心情を抒へたものである。島のはづれの乳が崎の沖までは、出て行く船を見送つてその安否もたしかめ、無事も祈りますが、それから先きは船も見えなくなり何ともいたし方もなくなるから、ひたすら神に頼つてその航海の安全を祈りませうとの意味である。

【伊豆大島】 イヅオホシマ。伊豆七島の一。列島中の最北にあり、本州に最も近い。全島火山岩から成り、中央に三原山があつて噴煙が絶えない。椿油・バタ・薪炭・魚類等を産す。行政上、東京府に属す。昔は流人の配所として知られてゐた。

【浅間】 アサマ。浅間山。長野・群馬兩縣に跨る火山。古來常に活動してゐる山で、天明三年（三四四三）の大爆發は就中著明である。登山路には沓掛口・追分口・御代田口・小諸口の四つがある。沓掛驛から山頂まで約四里弱である。

【今宵泊らにや】 コヨヒトマらにや。今夜宿泊しないと。即ち、こゝの宿場へ今夜泊らなければの意である。

【山裾】 ヤマスソ。山の麓。

【碓氷】 ウスヒ。碓氷峠。上野國（群馬縣）と信濃國（長野縣）との國境にある峻嶺。海拔九百五十八米、舊中仙道の要衝であつて、古來險路を以て知られ、かつては關所を置いたこともある。鐵道信越線は二十六箇のトンネルを穿ち、横川驛からアプト式軌道でこゝを通じ、熊平

を経て輕井澤に至る。

【北國】 ホクコク。裏日本の方の國、北陸道。北國街道は關東平野より信濃路を経て越後に通ずる街道。

【追分】 オヒワケ。長野縣北佐久郡西長倉村追分。

【宿驛】 シュクエキ。しゆくば。しゆく。街道の途中に、旅宿などがあつて、旅人の休息したり、馬子が居て次の宿場へと旅客を送つたりする所。殊に東海道は五十三次といつてその宿場が有名であつた。

【中仙道】 ナカセンダウ。江戸時代に於ける江戸・京都間の公道の一。木曾街道・木曾路ともいつた。京都から東山道を経て江戸に至る街道で、六十九驛があつた。就中、三條橋・大津・草津・番場・關ヶ原・落合・福島・下諏訪・輕井澤・高崎・浦和・板橋・日本橋等は主要なるものである。

【宿引】 ヤドヒキ。旅客を宿屋に手引するもの。

一茶句集に、「宿引に女も出たり春の風」がある。

【境遇】 キヤウグウ。身のうへ。めぐりあはせ。

【年が年中】 ネンがネンチヤウ。一年が間いつもく。

【日和】 ヒヨリ。空模様。天氣。

【峻坂】 ケンハン。けはしい坂路。

【脚絆】 キヤハン。はゞき。脛に纏ふ布。多くは旅行の時に用ひるもので、紺木綿で作り、裏をつける。コハゼで留め、上部に紐をつける。

【麥ついて夜麥ついでの歌】 慣れない夜麥つきの仕事にせいでしたために、手に九つの肉刺が出来た。その九つの肉刺を見ると自分の生家が戀しくなるとの意である。

「麥をつく」とは、大麥や裸麥を搗き臼で搗いて皮や糟をとり去つてしらげることである。そのしらげた麥は米に混じて麥飯を炊くのである。

【掌中の珠】 シヤウチュウのタマ。手の中にある珠玉の義、最愛の子に譬へていふ語。

杜甫の詩に「掌中探見一珠新」

【人麿】 ヒトマロ。柿本人麿。萬葉集の時代を大きく前期・後期に分けて、特に萬葉集の特質たる雄渾壯大なる歌調を具へた前期を代表する歌人は柿本人麿である。藤

原朝の代表歌人として、後の歌人に多大の影響を與へてゐる。敘景よりも抒情にすぐれ、ことに哀悼の歌、回想の歌にはすぐれたものが多い。又長歌にたくみであつた。その歌集として人麿集がある。

その傳記は、詳かでない。持統天皇の朝に草壁皇子の舍人となり皇子の薨後、朝廷に仕へ、後高市皇子に仕へた。歿年も不明であるが、歌聖として古くから尊敬せられて、古今集の序にも、「おほきみつの位人まる」と述べられてゐる。

彼の歌一、二をあげると、

あしびきの山河の瀬のなるなべに弓月が嶽に雲立ち渡る

遠くありて雲居に見ゆる妹が家早くいたらむ歩め黒駒  
敷島の日本の國は言靈のたすくる國ぞまさきくありこそ

【貫之】 ツラユキ。紀貫之。貫之は古今和歌集の撰者として、又當時の代表的歌人として、萬葉の人麿と共に歌聖として稱せられる。彼の傳記も詳かでない。土佐の國

司として赴き、後京都にかへつて、玄蕃頭、木工権頭等になつた。彼は土佐日記の作者であつて、和文に秀いで、又歌學に長じてゐた。

その歌を一二例示しよう。

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春たつ今日の風やとくらむ

吉野川いはなみたかくゆく水の早くぞ人を思ひそめてし

はつかりの鳴きこそ渡れ世の中の人のこゝろの秋しうければ

【抒べる】ノべる。「抒」の音は「チ」。心に思ふことをうちあけることである。

漢書の王褒傳に「抒情素」

抒情・抒情詩等の熟語がある。

【職業的個性】シ・クゲフテキコセイ。或る職業に獨得に附随してゐる性質。

即ち農業に携る人には農民に共通で、しかも他の職業の人には見られない性質がある。さういふものを指す。

【地方的の個性】或る一地方獨得な性質。

即ち、海濱の漁夫村・工場地帯の勞働街・山村の蠶業地、それ／＼特有の地方色を有してゐるやうなものをいふ。

【人の個性は少くとも土の個性を離れることは出来ない】

人はその生活してゐる地方の特性といふものを自分の特性として必ず持つてゐることをいつたものである。

【點在】テンザイ。物の間に、あちらこちらと、恰も點をうつた如くに、散在してゐること。

【口移しに傳はる】書き誌したものによつてでなく、人の言葉で次から次へと傳はり擴がつて行くこと。

【轉訛】テンク。言葉が、他へ傳はつて行く間に、本來の姿から一部分變化してなまりを生ずることである。

【在所】ザイシ。一「みなか。さいがう。平治物語に「在所にこもり居て、偏へに武藝をそ積古せられける。」

(二)田舎の我が家。くにもと。故郷。

大館常興記に「奥山孫五郎今日いとまを申し、在所へ寄り越し」

こゝでは(二)の意。

【この苗をとりあげての歌】「棲ますや」は「棲むか」又は「棲まうか」の方言。

この苗を取つてしまつたら、どこに棲むか、いなごよ。切つたすゝきや、束ねた葦でこしらへた小屋の中に棲むか、との意。

尙、全集本には、「何處に住ますや。いなこや、きりすゝき、すきよその、こやのうらに住ますや。きりすゝき(芒ならん)すきよし(芒葎か)のこやのうら(萱の末の意か)に住ますや」とある。

【苗取唄】苗代で育つた稻の苗を本田に移して田植をする時、苗代の苗を抜きとるのを苗取といふ。その時に歌ふ唄が苗取唄である。

【平安朝時代か或はそれ以前に生れたもの云々】何を根據としての立論かよくわからぬが、察する所、この苗取唄の歌調が、催馬樂サイバクによく似てゐるところからの類推ではないかと思はれる。

催馬樂は、奈良朝頃の俚謡から起り、平安朝に入つて上流社會

の歌謡となつたものである。

【哀憐の心】アイレンのココロ。あはれみいたむ心。

【強清水】コハシミヅ。全集本の傍に、「強清水は硬質の清水で、齒に冷く滲みるのである。」と註が記してある。

【出色】シラシラ。多くの色から特に、抜け出でて、目立つ義である。それより轉じて、衆に秀でる意に用ひる。

### 9 挿

大島乳が峰

大島の北西端に二つの小岬がある。乳が峰はその一つで、大島の元村から岡田村への海路では右手にあつて見ることが出来る

八ヶ嶽

寫眞は早春の候、八ヶ嶽高原から八ヶ嶽を望んだ風光である。前景の樹木は白樺の疎林。

### 10 参考

民謡について左に高野氏の所論を掲げ、教授者の参考に供す。

民 謡

民謡といふ語は支那では古くから用ひてゐるが、我國では近く明治になつてから使用して國民歌謡といつた意に用ひてゐる。勿論目で見える歌でなく、口で誦ぶ歌で、勞作用の田植歌、地搦歌、馬子歌をはじめ、祝賀の歌でも、愛情の歌でも、旅の歌でも民謡が最も人の心を動かす。元來は俚謡・俗謡といふと同意の語であるが、民謡といふと、何となく民衆の歌、貴族に對する庶民の聲、野の聲、自然の叫、郷土藝術といつた意を含むやうに聞えるので喜んで用ひられた。

民謡の包む想は廣い。社會の相は最もよく此の上に反映し、時代の相も反映する。其時々人の希望や不平や哀愁や歡喜が露骨に率直に明瞭に誦ひ出されてゐる。奈良朝は奈良朝、江戸時代は江戸時代と、國民の精神生活が些の偽を交へず告白してゐるのが尊い。作者も分らず、成立した地點も分らないのが通例である。千古不變の情は戀愛で、民謡にはこれが最も多いのだが、わが國では君を尊び、君の萬歳を祝福するの情は、千年來一貫してゐることを民謡が示す。かの國歌すなはち君が代の歌は古い古い民謡なのである。古今集にも古今六帖にも見えてゐる歌で、讀人不知とある。すなはち國民の聲で、作成年代も知れず、作者も知られてゐない。たと「君が代は」を古くは「わが君は」と歌つてゐた。そ

れが源平時代から「君が代は」の方が廣く誦はれた。此の變移の上にも一般民心が現はれてゐると思ふ。源平時代になると、「わが君」といへば、實力の所有者たる武士階級では、自分の隸屬する主將を指すやうになつて來た。公家や僧侶や、武士以外の者にあつては、元首として奉戴する一天萬歳の君を祝ふのに、疑義の伴ふ語句では満足出來ない。そこで「君が代は」と誦ひ替へて遂にこれが一般に用ひられて來たのだと思ふ。此の例證は古くからあるのである。國歌に制定されたのは明治になつてからであるが爲に、新しい歌のやうに思つてゐるものもあるやうだが、どうして千年以上も前から歌だ。

近頃の新歌謡を新民謡とも呼んだので、民謡の發生を新らしい時代からだと思つたら違ふ。民謡は上古からあつたのだが、文献の上で遺つたのでは、古事記や日本書紀の歌の中のそれが始だ。奈良朝にはもう多くある。萬葉集の中にある東歌も一切民謡だ。正述心緒歌の中にも多くあり、乞食の歌もそれだ。次いで神樂歌や催馬樂歌の中にも含まれてゐる。少女の物思や、歸化した藝人にひつかゝつたといつたやうな歌もあるが、諷刺の歌が分けて面白い。一例をとると、

澤田川袖濱くばかり淺けれと、恭仁の宮人高橋渡す。

ただの短歌だが、催馬樂では之を三段に分けて所々句を繰返して

歌ふ。これが大變な諷刺の意を含むのである。澤田川は山城の國の豊の原を分きて流れる泉川の支流で、恭仁宮は聖武天皇が天平十二年に山城國相樂郡に地を相して設けられた都である。此高橋のことは

宮城より以南の大路、西の頭の豊の原の東との間に大橋を造らしむ。諸國の司に令して國の大小に隨つて錢十貫以下一貫以上を給せしめ、以て橋を造る用度に充つ。

と、續日本紀に見えて、中々の大工事であつた。然るに、同書の翌十五年十二月の條には

初め平城の大極殿並に歩廊を壞ちて恭仁宮に遷し造る。茲に四年其の功績に畢りぬ。用度費す所勝けて計ふべからず。是に至りて更に紫香樂宮を造る。仍て恭仁宮の造作を停む。

とある。さうして此の十月にはかの大佛殿建立の詔勅が出たのであつた。高橋が竣工したか否か史上には見えないが、支那模倣の大工事が無用物視されて、役民達に前の歌を誦はせたのであつた。此歌を取つて三段に分けて歌つたのが數十年の歲月を経ると、「あはれ來所よしや高橋渡す」などと添加して、諷刺の原意を忘れて讚歎の意に轉じてゐる。考へて見れば皮肉の話だ。たつた一首の民謡にもこんな深い意味と變遷とがある。史上の出來事を詠じた歌には、こんな類が稀でないのであるが轉じて近代の隨歌

に就いて觀察するであらう。後水尾天皇が諸國の歌を集められたもので、寛文年中に出來た書だと傳へたが、明和年中に山家鳥龜歌と題して刊行された。其の書には國々から四五首ばかりづつ選んであつて、五畿内だけは特に多い。「目出度目出度の若松さまよ、枝も榮える葉も茂る」といつた祝賀の歌もあるが、やはり多いのは愛情關係の歌で、取り分け諷刺詼諧の意に成るものに面白いものがある。

わしは小池の鯉鮒なれど、鯉男はいやで候。

五月雨ほど戀ひしたはれて、今はあきたの上落し水。

心通はず杓子の先で、言はず語らず目で知らず。

思ふ殿御と白挽すれば、白は手車ちうで廻はる。

が一例で、鄙の戀の歌であるが、かうした純朴な歌ばかりではない。

金が威光の太平顔も、昨日限りの三途川。

後生を願やれちさまと婆さま、年より來いと鳥がなく。

こちらの旦那は傘育ち、世間廣がり内すぼり。

よめをよめをとそしりやんな、そしる我が子も人のよめ。

と來ては立派な諷刺であり箴諷である。これが、其の鋭さをひそめて、教訓的にしては

知つて居れども人に又問うて、母の差圖で迎取れ。  
野にも山にも子なきはおきやれ、萬の蔵より子は賈。  
鮎は瀬につく鳥は木に止まる、人は情の下にすむ。  
はやる響かみ形より直な心が美しい。

となつた。求婚逞戀は盆踊歌の特徴だといふのだが、其の歡喜方面を語つたものは挑發的になり易くて詩味を缺く。自然それよりも、破綻の方面を語ふ。結婚後の悶着は兎角に免れ難く、新郎新婦、新婦の母の苦衷が特に語られた。先づ男の意中を語つて、

あきもあかれもせぬ中なれど暇やります母故に。  
往なしよ／＼と思つた中に、太郎が生れて往なされぬ。

といひ、破鏡のうき目に逢つた女の情を語つては、  
月の夜にさへ送りをもろて、見棄てられた上闇の夜に。  
といふ。まして其の母の日常の心やりは。

雨が降るとて沖から曇る、娘去るとて婿が來ぬ。

と語られた。さうしてこれが合唱せられたのであつて、其の語ひ手と踊り手とは少壯の男女であつたのである。不知不識の間に反省熱慮せしめられたことであらう。つひ此頃までのダンスホールの股賑情態に比して、古今の差異の著しさを感し且つ考へしめられたものは私一人では無かつたであらう。

無いものは民謡に宗教心を語つたものである。あるとすればお寺

の庭で踊ると和尚が叱る、和尚の頭をくらはしてやりたいといつたやうな歌か、

お釋迦様さへばくちに負けて四月八日にや丸裸。

といったやうな歌である。これは盆踊ではないが、こんな譬喩にとるのは宗教心乏少の證と見られても止むを得まい。「どうせするなら大きなことしやれ、奈良の大佛□で飛ばす」といつたやうな論外の歌も座興の爲に宴席で語られる。

明治維新以來の民謡には生氣が發刺としてゐた。諷刺も教訓も皮肉も一段と強く、中には罵詈もある。諷刺もある。民謡の意を廣めて流行歌をも入れて考へ、壯士によつて、語られた演歌をも入れて考へれば、肌粟を生ずるやうな歌が決して少くない。更に新民歌新歌謡と呼ばれたものは、諸君が熟知の歌であるが、如何に其の類型的なものに富み醜陋聽くに堪へなかつたかは改めて説く迄もないであらう。天譴が下るにあらずんばと考へたものは經世家道學者ばかりでは無かつた。大正十二年の大震災直前の歌謡を想出すものには、これ以上の説明は入らぬであらう。昨年來の日支大事變には新歌謡がすつかり影を潛めた。類型的の聲は聞えなくなつた。自贖自省の現れである。銃後に立つものとしてはこれが當然の態度であらねばならぬ。(瀧澤重雄著七輯)(筆者は文學博士。日本民謡研究の權威)

### 三 旅行

### 山路 愛山

#### 1 解題

旅行の趣味・價值などを論じたもので、旅行論と題した方が文意にはふさはしい。原文は「愛山文集」に載せてある。

「愛山文集」は山路愛山の著で、評論・紀行・隨筆など十九篇を収めてある。時文叢書第三篇として明治四十一年九月陸文館から發行された。(大正六年刊の「愛山文集」もあるが、これとは別である。)

#### 2 作者

山路愛山 ヤマヂ アイザン。

舊幕臣、名は彌吉、元治元年十二月二十六日江戸に生れたが、維新の際籍を静岡に移した。夙に史學に通じ、詩文をよくし、曾て國民新聞・國民の友に執筆した。明治三十二年信濃新聞主筆となり、三十七年二月辭して上京し、雜誌「獨立評論」を發刊し、又著述に従事した。荻生徂徠・新井白石・讀史集論・孔子論・愛山史論・現代金權史・足利尊氏・西郷隆盛・源頼朝・菅原獨語・乃木大将・徳川家康・東西六千年・世界の過去現在未來など、その

他にも著書が甚だ多い。大正六年三月歿。年五十四。

尙、愛山の文章・人物について、徳富蘇峯の論を左に掲げる。

△愛山君はその一生を殆ど操觚者として始終せり。加ふるにその文章は頗る爽利に、その興會は頗る多端に、その學識は頗る廣汎に、而してその精力は殆ど無盡蔵ともいふべかりしなり。されば二十餘歳より五十餘歳に互れる約三十年間の著作は、等身の字も未だ盡くせりといふべからず。

△愛山君の文章は、市に定價あり、固より予の推獎を俟たず。但だ君や、徳川幕府天文方山路家の嫡流にして、その血管には文明的科學的教養の血液を相傳せり。君や幕府瓦解の餘波に漂はされ、その少年血氣の際に於て、消柔の變に處し、慷慨自恃の精神を扶植せり。君や學に常師なく、徹上徹下獨學自修せり。而して文章に於ては、天才といふも蓋し溢言にあらず。その文體や、漢文體也、譯文體也、口語體也、如何なる文體も、一たび君の筆を握れば自由自在也。その題目や、小説也、論文也、時勢策也、史論也、如何なる方面も、その意の向ふ所可ならざるはなし。君や管を握れば萬人の敵也。所謂明治二十餘年より大正の初期に於ける文壇の飛將軍を求めば、君やその唯一人たらざる迄も、隨一人といふを憚らず。是れ故友の諛辭にあらず、嚴正なる批判者の言固に此



の如し。

△然も若し君の勝場を求めば、史論に若くはなし。日本國民史は蓋し君が畢生の心血を注ぎ、君が千載の紙碑たるべき好題目たりしなり。而して君や、これを大成するに及ばずして逝けり。是れ君に取りて終天極地の恨事たるのみならず、君の故舊同人に取りて亦實に然りとす。

△若し強ひて君の短所を擧げんか。君や多々倍々辨ずるを待とし、且つ往々人の爲にするに勇にして、餘りに自ら愛惜せず、遂に多作、濫作の弊に陥れり。君や結構剪裁に用意を缺き、駛りて止らず、往いて還らず、部分に成功して全局に失敗するの虞なしとせざりし也。若し君にして、その精力を一個若しくは數個の題目に集注し、これを以て畢生の事業と做さんか。その成績の分量は半ばなるも、その品質はこれに倍するものありしならん。乃ち頼襄以後の第一人者たる史家として、千載不朽の名を天地の間に留めたらんも未だ知るべからざりしなり。(大正六年刊「愛山文集」の序、摘録)

### 3 編纂の用意

前課と連絡して旅行に關する諸般の趣味を養ひ、且生徒をして在學中の修學旅行は勿論、卒業後各自が企てる旅行に際しても、十分自覺ある旅行を遂げさせる資としたい。又作者愛山のきびくとして奔放自在な文章を熟讀

玩味せしめて、作文・修辭の要諦を了得せしめたい。

### 4 要旨

吾人をして自然の教訓に接せしめるものは實に旅行である。即ち故郷に對する感興、詩趣を覺えしめるのも、没風流者に黃金以外の娛樂のあるを知らしめるのも、人間の俗事、造化の大經濟に對して、一擧に哲學的遠觀をなさしめるのも、さては永久無限に對する人々の欣求渴望を慰せしめるのも、すべてこれ旅行である。作者はこの旅行の眞價值・眞意義をば、卑近な取材によつて縱横自在に、しかも情味津津たる文辭を以て説いてゐる。本文の如きは、論文ではあるが、同時に抒情文であり、絳景文でもある。その旅行論としての要旨の存する所を考察把握せしめると共に、かういふ文章としての妙處をも味讀せしめねばならぬ。

### 5 概説

第一節(一四七頁—二行目まで) 書齋を出て自然の教訓に接すべきをいふ。

第二節(一四七頁末行—一四八頁一〇行) 故郷を去つて始めて故郷の感興を知る。

第三節(一四八頁一行—一四九頁七行) 前節につゞいて、旅行の吾人に興へる詩趣を説いた。

第四節(一四九頁八行—一五〇頁七行) 川を下る時の快味。

第五節(一五〇頁八行—一五二頁三行) 未明の出發、古寺、古英雄の廟、さては舊東海道の眺などの例について旅行の興味を敘べた。

第六節(一五二頁四行—一五三頁二行) 登臨の哲學的妙趣。

第七節(一五三頁三行—一五四頁) 旅行が興へる自然の教訓、即ち、自然は人をして無限ならしめることを説いた。

### 6 取扱上の注意

□愛山の文章は、まことにきびくとして自在を極めてゐる。「文章度胸」といふ語が許されるならば、愛山は全くその「文章度胸」のいふ人であると思ふ。「作者」の項に

掲げた蘇峯氏の「駛りて止らず、往いて還らず」といふことを、よい意味に用ひて評しても差支あるまい。□そはとにかく、この文の主旨の存する所をよく玩味せしめて、在學中の修學旅行乃至卒業後に於ける各地への旅行に際しても、十分有意義の旅行を遂げさせるやうにしたいものである。即ち、文を讀むとは、學校の教室だけの仕事でないことを思はせるには、殊にこの課は好個の材料であると思へられる。この點に思を致して取扱はるべきである。

□「試に千山萬水を跋涉し云々」(第二節)この一節、旅行の旅の字も言はず。しかも旅行の興趣を説いて、文章も妙を得てゐる。

□「旅行の妙趣は登臨を以て云々」(第六節)この一節は演繹的に筆を起して、前節と文の趣をかへたところに注意される。

□「雲雀よりも高き時に云々」(一五三頁五行)形而上の言説に及んだかと思ふと、かく卑近なものを捕へて來て談ずる、まことに自由自在の筆である。

7 設問

- 1 第一節に於て、最も含蓄ある語句をあげよ。
- 2 「故郷」といふものを、作者は如何に考へてゐるか。
- 3 この文には非常に細かい描寫と、非常に高尚な考察とが並び存してゐる。その各々を指摘せよ。
- 4 次の文句を解釋せよ。  
 イ、我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ、自然も亦旋りて我の中に住むべきなり。  
 ロ、昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり。  
 ハ、山に上るは一の哲學なり。  
 ニ、自然は人をして無限ならしむ。
- 5 書取。(但し、各々の意味を言ひて、その熟語を作らしめて書取らせる。)孤掌。天涯。跋涉。須臾。蕭條。雙眸。乾坤。渴望。錯綜。

8 釋義

【風水相撃ちて云々】吾人の心も、或事物に接して一種の情を起すといふことを述べるために、波は風水の相撃つ

によつて生じ、拍手の音は雙手の相撃つによつて生ずると序説したのである。

淮南子に「水撃則波興。」

【孤掌の鳴らし難きが如く云々】孤掌即ち一方の掌のみでは、拍手の音は出ない。それと同じく心と事物とが相觸れてこそ諸種の感を生ずるのである。

元の戴善夫の風光好曲に「孤掌難鳴。」

韓非子の功名篇に「一手獨拍、雖疾無聲。」

【感興】カンキ・ウ。感じて興に入ること。興味を感ずること。

太平記卷二十四、天龍寺供養の條に「大井河の景趣を表し、水紅錦を洗ひて、感興の心をぞ添へたりける。」

【書齋】シ・サイ。讀書のために設けた室。

歐陽公の東齋記に「或曰、齋謂夫平心以養思慮。」

若於此而齋戒也。故曰齋。」

事物起原に「漢の宣帝、齋居して事を決す、これ齋の名の起りなり。晉の大和中に、陳郡の殷府君、水を引きて城に入れ、池を穿つ。殷仲堪、この池の北に於て、小舎

を立てて書を読む。百姓呼んで讀書齋と爲す。即ち齋の始めは、疑ふらくはこれよりか。」

【閑居】カンキ。「閑居」とも書く。事なくして靜かに家に居ること。ひまであること。

禮記の孔子閑居の條に「孔子閑居、子夏侍。」大學に「小人閑居爲不善。」

【我をして自ら進んで自然の中に住せしめよ云々】自然を愛し且つ親しむときは、自然と我とは一體となり得るものであるといふ意。措辭の妙を味はせたい。

【天才】天然の才能。自然にそなはつてゐる才能。嵇康の絶交書に「不欲以枉其天才。」

北史の李德林傳に「識度天才、必至公卿。」【自然の光景】シゼンのク、ウケイ。山川・草木・花鳥・風月等宇宙の森羅萬象のありさま。

【湧出】ヨウシュツ。「涌出」とも書く。わき出ること。さかんにおこること。

【昔は一室に坐して秋風白河の關を詠じたる人あり】能因法師をいふ。能因は後鳥羽天皇の頃の人。俗名は橘

永愷(ヤサキ)、和歌を藤原長能に學んだ。和歌に師のあることはこれより始まつたといふ。なほ能因法師の「秋風白河の關」の歌その他について、古今著聞集に左の如く見えてゐる。

能因入道、伊豫守實綱に伴なひてかの國に下りたりけるに、夏の初、日久しく照りて、民の歎あさからざるに、神は和歌にめでたまふものなり。試に詠みて三島に奉るべき由を、國司頻に勸めければ、

天の川苗代水にせき下せ天くだります神ならば神と詠みて、みてぐらに齊きて、神づかさして申し上げせければ、炎早の天候に曇りわたりて、大きな雨降りて、枯れたる稻葉押しなべて緑にかへりにけり。忽に天災を和ぐるごと、唐の貞觀の帝の蝗を吞めりける故事にも劣らざりけり。

この入道は至れるすきものにてありければ、都をば霞とともにたちしかど秋風ぞ吹く白河の關と詠めりけるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて、人にも知らせず久しく籠りて、色を黒く日にあたりなして後、陸奥國のかたへ修行のついでに詠みたりとぞ披露しはべりける。

なほこの歌は、後拾遺集羈旅に、「みちのくにまかりけるに、白河關にて詠みはべりけ

る」と詞書して出てゐるが、袋草紙には、著聞集の説を是認して、能因は陸奥に行かなかつたと記してある。

【みながらにして名所を知れる歌人もありき】これは特に一人を指したのではなからう。歌よみは往々歌の上でのみ名所を知ることがあるから、廣くいつたものと見てよからう。

【名所】(ナドコロ)は、各國の中で、名のあらはれたところ。和歌によみこむ歌枕なども亦名所である。

謡曲、田村に「それ花の名どころ多しといへども……この寺の地主の櫻にしくはなし。」

同、鞍馬天狗に「この程御供して見せ申しつる名どころの……吉野初瀬の名どころを見残す方もあらばこそ。」

【神髓】 シンズキ。その道の奥義。事物の蘊奥。

【千山萬水】 センザンバンズキ。多くの山が重なりあひ、多くの川が流れあふこと。又、そのところ。即ち、多くの山水。

續元怪録に「章義方往天壇南尋妹。千山萬水不見。」

有路。

【跋涉】 バッセフ。山を越え水を渡ること。轉じて諸方を遊歴すること。

詩經の靡風、載馳に「大試跋涉、我心則憂。」註に、「草行曰跋、水行曰涉。」

左傳の襄公、二十八年に「跋渉山川、蒙犯霜露。」

【首を回らす】 カウベをメグラす。後をふりかへること。後へふりむくこと。

白樂天の長恨歌に「君王掩面救不得、回頭血淚相和流。」

【感情】 カンジャウ。(一)おもはく。こゝろもち。(二)苦樂について的心象。こゝろは(一)の意。

劉伶の酒徳頌に「不覺寒暑之切肌、利欲之感情。」

【親昵】 シンチツ。親暱とも書く。親しみなじむこと。ちつこん。親近。

左傳の襄公十四年に「皆有親暱、以相輔佐也。」

【心無くして飛ぶ雲】 無心に空を飛びゆく雲。

陶淵明の歸去來辭に「雲無心而出岫。」

【波濤】 ハタウ。大波。

越絶書に「波濤澎湃、沈而復起。」

謡曲、八島に「月海上に浮んでは、波濤夜火に似たり。」

【聯想】 レンサウ。一つの觀念に隨伴して他の觀念が生じること。一つの物事を見聞すると共にこれに關係のある他の物事をおもひおこすこと。

【媒介】 バイカイ。雙方の間に立つてとりもつこと。雙方の間に立つて周旋すること。なかだち。

唐書の張行成傳に「古今用人必因媒介。」

【無趣味】 ムシュミ。趣味のないこと。おもしろみのないこと。無風流。殺風景。

【詩趣】 シンシ。詩的趣味。詩にいひあらはすべきおもむき。詩にのべたやうなありさま。

【人は自ら回轉して云々】 人が自ら自己の境遇を一轉すると、自然も亦それにつれて、その状態をかへる。

【昨日天邊の寸碧は今朝杖底の千岩なり云々】 昨日大空のはるかあなたに小さく見えてゐたみどりいろのかたまり

は、今朝われ／＼の現に立ててゐる杖の下の大小無數の岩である。今朝われ／＼の現に杖を立ててゐる岩々こそは、昨日大空のあなたははるかに見あげた一寸ほどのみどりのかたまりである。」との意。

この句は頼山陽が少年時代の詩、

雨過泉聲淪、  
木落山骨最、  
今朝杖底千岩、  
昨日天邊寸碧。

から採つたものであることは、言ふまでもない。

【甕中(ヲウチュウ)にあるものは云々】 甕(カメ)の中にあるものは、自分の住んでゐるその甕の大小を知らぬ。

井の中の蛙大海を知らず。」と同意の語。

莊子、田子方篇に「孔子老聃見エ、出デテ顔回ニ告ゲテ曰ク、丘ノ道ニ於ケルヤ、其レ猶ホ醯雞ノ如キカ、夫子吾ガ覆(フタ)ヲ發(ヒラ)クナクンバ、吾レ天地ノ大全ヲ知ラザルナリ。」

「醯雞(ケイケイ)とは、甕の中の蟲をいふ。

成語考に「甕裡ノ醯雞ハ、安ソ廣見アラン。」

【蜻蛉】 セイテイ。とんぼ。

杜甫の詩に「翡翠鳴衣桁、蜻蛉立釣絲。」

古今註に「蜻蛉即蜻蛉、好飛集水上。有青赤黃三種。色青而大曰蜻蛉。」

千代の句に「とんぼつり今日はどこまでいつたやら。」

【溪流】 たにのながれ。たにがは。

張九齡の詩に「月明看嶺樹、風靜聽溪流。」

【頑童】 グラウンドウ。かたくなにしておろかなる童子。惡太郎。

書經の伊訓に「遠耆德、比頑童。」

【楊柳】 ヤウリウ。やなぎ(柳)。

詩經の小雅に「楊柳依依。」

朗詠に「兼葭水暗螢知夜、楊柳風高雁送秋。」

「柳」は楊柳科楊柳屬の落葉喬木。高さ三四十尺に達し、細長い枝を下垂する。葉は指針形、縁邊に鋸齒を有し、互生する。花は單性で雌雄異株、孰れも穗狀花序に排列する。觀賞用として路傍又は庭園に栽培し、木材は器具又は薪の料とする。

【杜鵑花】 サツキ。「つゝじ」の一種。石南(シャクナゲ)科の常綠灌木。幹の高き三四尺。葉は楕圓形、濃綠色で、黒褐色の毛がある。六月頃に紅紫色又は白色の花を開く。

雌蕊は五本。花期が頗る長く、品種が甚だ多い。古來園藝品として漸次改良を加へられ、單瓣・重瓣はもと



より、車輪咲・亂曲咲・花笠吹・袴咲・采咲等の花容のものがあり、花に咲分・鹿の子・紋などいろいろの種類がある。

【天涯の遊子】 遠い他郷の客。

「天涯(テンガイ)は、そらのはて。そらのきはみ。極めて遠方の地。遠隔の他郷。

古詩に「相去萬餘里、各在天涯。」

太平記卷二十、勾當内侍の條に「行くには跡を顧みて頭を家山の雲に回らし、留まるは末をおもひやりて、泪を天涯の雨に添ふ。」

「遊子」は、旅のそらに在るもの。

漢書の高帝紀に「遊子悲故郷。」

唐の孟郊の遊子吟に「慈母手中絲、遊子身上衣。」

臨行密縫、意恐遲歸、難下以寸草心、報得三春暉。」

【境遇】 キウグウ。その身に際會せる運命又は事情。めぐりあはせ。まはりあはせ。

【客觀的に見る】 心外の事物として、外部から觀察すること。客觀は英語 Object の譯語。自己以外の他物又は意識の目的物、即ち主たるものの對象にして、自己又は意識に觀察せらるゝ一切の外物の稱。「主觀」の對。

【涙を零さしむ】 ナミダをオトさしむ。

【四山の面目】 四方の山々のやうす、けしき。

「面目(メンモク)は、こゝでは、すがた。ありさま。

蘇軾の詩に「不識廬山眞面目、只緣身在此山中。」

【畫屏】 グァイ。畫をかけた屏風。景色のよい山にたとへていふ。

李端の詩に「花發千巖似畫屏。」

【霧島】 キリシマ。つゝじの一種。石南(シャクナゲ)科の灌木。霧島山をはじめ九州各地に自生し、又庭園に栽培される。幹の高さ四五尺。



葉は長倒卵形で、多く枝頭に叢生する、花は普通朱紅色で、繖形花序に排列し、春季に開く。その開花期には全株火焰に包まれたやうに見える。他に白・淡紫・紋等の變種もある。

【蘆荻】 ロテキ。アシとラギ。共に水邊に生じ、形も亦相似てゐる。

白居易(樂天)の浦中夜泊に「晴上江堤還獨立。水風霜氣夜稜々。回看深浦停舟處、蘆荻花中一點燈。」

「蘆」は禾本科に屬する水草。春宿根から生じ高さ五六尺に達する。葉は狭長にして尖り、平行脈を有する。花は鼠色の殻を有し、小穗狀花序に排列し、又多く集つて大きな圓錐狀花序をつくる。その莖は葦簾に製する。よし。なにはぐさ。葦。藪。

「荻」は禾本科に屬する水草。高さ五六尺に達する。葉は硬質で細長く、平行脈をそなへて互生し、二縱列に排列する。小穗

狀花序は芒を有せざる一箇の花より成り、基部に絹狀の毛を叢生する。この小穂狀花序は多數集つて長い穗狀の花叢をなし、この花叢は更に大形の圓錐花序を構成する。

【時々刻々】時刻を追うて次第に。追ひ／＼に。

御伽草子、さざれいしに「數十人の女官、時々刻々に守護を加へ、百味の御食を捧ぐるこひまなし。」

【放翁】陸放翁、名は游、字は務觀、宋の越州山陰の人。幼にして穎敏、十二歳で詩文をよくした。范成大が蜀に帥たりしとき、游は參議官を以て、文字の交をなし、禮法に拘らないので、人がその類放を諷つた。因つて自ら放翁と號した。累進して寶章閣待制に至り、渭南伯に封ぜられた。詩作が多い。蜀に居ること久しく、忘れがたいので、總てその稿に劍南と署して、その志を見はした。嘉定三年卒。年八十五。劍南集の外、老學庵筆記、入蜀記等の著作がある。

その作中左に記せる「示見」の一首は、放翁の絶筆として、特に名高い。

死去元知萬事空、但悲不見九州同。  
王師北定中原日、家祭無忘告乃翁。

【山重なり水複(カサナ)りて路無きを疑ふ云々】山が重なり、水がかさなつて、通路が無いやうに見えるのに、豈圖らんや、柳がしげつて小暗い處、花が咲いてあかるくなつた所に、又一村があるとの意。

その全詩は

遊西山西村  
莫笑農家臘酒渾、豐年留客足鷄豚。  
山重水複疑無路、柳暗花明又一村。  
簫鼓追隨春社近、衣冠簡朴古風存。  
從今若許閒乘月、拄杖無時夜叩門。

【鬱々たる山】樹木の青々としげつてゐる山。

「鬱々」は草木の繁茂したさまにいふ語。

文選の古詩に「鬱々園中柳。」

【舵師】ダシ。かちとり。舵(カチ)をあやつつて船の方向をきめる人。舵手。

【前途既に窮するが如し】船のゆくてがふさがつて、もはや、ゆきづまつてしまつたやうに見える。

【桃源一村云々】桃源境の如き一村があつて、人をして世

の霽明を思はせるといふのである。

桃源は湖南省の常德府に在る地名。

陶淵明の桃花源記に

晉太元中、武陵人捕魚爲業、緣溪行、忘路之遠近。忽逢桃花林。夾岸數百步、中無雜樹。芳草鮮美、落英繽紛。漁人甚異之。復前行欲窮其林。林盡水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光。便捨船從之。初極狹、纔通人。復行數十里、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然。有良田、美地、桑竹之屬。阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作、男女衣著、悉如外人。黃髮垂髫、並怡然自樂。見漁人、乃大驚、問所從來。具答之。便要還家、爲設酒。殺雞作食。村中聞有此人、咸來問訊。自云先世避秦時亂、率妻子邑人、來此絕境、不復出焉。遂與外人間隔。問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉。此人一爲具言所聞、皆歎惋。餘人各復延至其家、皆出酒食。停數日辭去。此中人語云、不足爲外人道也。既出得其船、便於向路、處處誌之、及郡下、詣太守、說如此。太守即遣人隨其往。尋向所誌、遂迷不復得路。南陽劉子驥高尙士也。聞之欣然欲往。未果、尋病終。後遂無問津者。

とある。一説に、この記は淵明の假託の辭だともいふ。

「霽明」(セイメイ)は「晴明」に同じ。空が晴れて、物の明らかに見えること。

歐陽修の詩に「風光著草、日晴明。」

【毛氈】マウセン。毛と綿とを雜へて粗く織つた厚い絨物。種々の色に染める。

武雜記に「白き傘袋、赤きまうせん。の鞍覆ひの事、依御免各用之。」

【柔櫓の聲】ジウロのコエ。おもむろに漕ぐ櫓の聲。

僧洪惠の詩に「夢隨柔櫓到西興。」

【須臾】シュユ。しばらくの間。ちよつとのま。暫時。中庸に「道也者不可須臾離。」

太平記卷八、摩耶合戦の條に「勝軍の利は、謀不慮に出でて、大敵の氣を挫いて、須臾に變化して先んずるには如かずとて。」

【パノラマ】Panorama. 畫の左右兩端を接して圓筒形に立て、觀者の視覺に錯覺をおこさせ、その中軸の位置から見まはして完全な實景を見るやうな感じを與へる一種の大規模の寫生的景色畫。畫題としては多く戰爭畫を取扱ふ。ダンチヒ市のブライジヒ Bridges 教授の創案、リチャードパーカーの揮毫にかゝり、西紀一七九三年始め

てエチンバラの建物内に装置せられた。  
【没風流の徒】 風流の何たるを知らぬともがら。無風流の連中。

【風流】とは、みやびたること。俗ならぬこと。風雅。文雅。

晉書の王獻之傳に「少有盛名、而高邁不羈、風流爲一時之冠。」

【娛樂】 ゴラク。たのしみ。なぐさみ。  
詩經の序に「欲其及時以禮自娛樂也。」

賀古教信七墓廻卷五に「天人娛樂の管弦は有難かりける次第なり。」

【朝まだき】 朝夜の未だあけぬとき。早朝。

拾遺集、春に「朝まだき起きてぞ見つる梅の花夜のまの風のうしろめたさに」

【駒】 コマ。「小馬」の義。(一)馬の子。小さい馬。(二)歳の馬。(三)馬の總稱。こゝは(二)の意。

古今集、春下に「こまなめていさ見にゆかむふるさは雪とのみこそ花は散るらめ」

【茅屋】 カヤヤ。「バウヲク」ともよむが、こゝはカヤヤと

讀ませたい。かやぶきやね。又、その家。

源氏物語、須磨の巻に「かや屋ども、あし葺ける廊めくやなど、をかしうしつらひなしたる。」

【炊煙】 スキエン。飯をかしぐ竈より起つ煙。煮たきのけむり。

陸游の詩に「茅檐細雨濕炊煙。」

【雲霧】 タナビキ。「た靡き」の義。「た」は接頭語。雲・霞・煙などが横に長く引くこと。

萬葉集卷十七に「夕されば雲わたなびき。」

【清爽】 セイサウ。清くしてさわやかなること。さつぱりとしてあること。

杜陽雜編に「神氣清爽。」

【殘月】 曉まで空に残つてゐる月。ありあけの月。  
朗詠に「游子猶行殘月函谷雞鳴。」

【山の端】 ヤマのハ。山のはし。山の一端。

古今集、雜上に「二つなきものとおもひしを水底に山の端ならで出づる月かけ」

【地歩を争ふ】 おのれこそその地歩を占めようものと、兩

相互に相争ふこと。

「地歩」は、たちは、位置、地位、立脚地。

【微雨】 ビウ。こさめ。細雨。

陶淵明の詩に「微雨從東來、好風與之俱。」

【蕭條】 セウテウ。ものさびしいさま。又、しめやかなさま。

朗詠に「風荷老葉蕭條綠、水蘂殘花寂寞紅。」

班固の燕然山銘に「蕭條萬里、野無遺寇。」

【蝸牛壁に紋を畫がきて】 蝸牛の壁をはひまはつたあとが、ちやうど紋畫でもかいたやうに見えることをいふ。

蝸牛(クワギウ)はかたつぶり。有肺類に屬する軟體動物。殻は薄く、多く五層位。最下層はやゝ膨大、全形はやゝ扁平。厖(ヘタ)はない。殻の色は多く淡褐で黒褐の帯條がある。觸角は二對、その大觸角の端に眼をそなへてゐる。雨の日には出て植物の若芽を食ふ。かたつぶり、まひく、まひくつぶり、でんくむし、でむし、などいろ／＼の名がある。

【侵蝕】 シンシク。「侵」はをかすこと、「蝕」はむしばむこと。熱しては、次第にをかしそこなふこと。

【夕陽】 セキヤウ。夕日。いり日。斜陽。

杜甫の詩に「夕陽薰細草、江色映疎簾。」

平家物語卷十二、女院御往生の條に「夕陽西にかたぶけば、御名残はつきせず。」

【古英雄の廟】 コエイユウのベウ。古の英雄の靈を祀つてあるたまや。

「廟」は身分ある人の靈を祀つた屋舎。たまや。靈屋。

【夏草やつはものどもが夢の跡】 芭蕉翁が奥州平泉でよんだ句。源義経をはじめその郎等たちが奮戦苦闘して斃れた事蹟が一場の夢と化し、夏草が我はがほにその古戰場にしげつてゐるさまを見て、無限の感慨に打たれ、さてよみ出でたものである。

【名狀】 メイジャウ。その状態を言ひあらはすこと。

【幽懷】 イウクワイ。幽玄な情懷。おくゆかしいこゝろ。幽情。

【羽蟻】 ハアリ。蟻類又は白蟻類の翅を生じたもの、即ち雌又は雄の交尾期にあるもの。夏秋の候、雌雄共に高く空中に飛翔し、交尾し終れば翅を失ふ。随つて特種の蟻

ではない。約めて「はり」ともいふ。  
和名抄卷十九に「飛蟻、波阿利。」

【富士の裾野】 富士山麓の大原野。北は御阪山脈に迫つて河口・精進・西の堰塞湖を作り、東は黄瀬川の谿谷に及んで箱根山に對し、西は毛無山脈に限られ、南は愛鷹(アゲ)山を擁して駿河灣に及び、東西三十八軒、南北四十軒、盤周百六十軒、面積九〇〇方軒の地域を占めてゐる。

【平湖】 平原にたゞへてゐる湖水。

【浮島が原】 静岡縣駿東郡沼津町と富士郡鈴川との間に於て浮島沼を抱く平原。砂土の海潮作用によつて移漂されたもの。平維盛の軍が水鳥の羽音に驚いて潰走したところである。

【東海道】 京都から東京に通じてゐる街道。江戸時代には、その間に五十三の宿驛があつた。これを東海道五十三次といふ。

【一幅の畫圖】 イップクのグット。一かけのゑ。「幅」とは、書畫などの軸物を數へるときにいふ語。一幅、二幅

など。

【富士嵐】 フジオオシ。富士山から吹きおろす風。

【漣漪】 サ、ナミ。「漣漪」とも書き、又「泊活」とも、「小波」とも書く。こまかく文(アヤ)をなしてたつ波。さゝれなみ。さゝらなみ。

詩經の國風に「河水清且漣漪。」

王維の詩に「青翠漾漣漪。」

萬葉集卷十二に「さゝなみの波こそあせに降ることさめあひだもおきてわがもはななくに」

【胎蕩の春色】 タイタウのシ、ンシ、ク。のどかなはるげしき。

「胎蕩」は、春の景色ののどかな貌。又曠遠の貌。

謝朓の詩に「朋情以鬱陶、春物方胎蕩。」

宋初の詩に「風光胎蕩百花春。」

【冥想】 メイサウ。目を閉ちて或物事をかんがへおもふこと。又、現前の境を忘れて或對象をかんがへ思ふこと。

【妙趣】 メウシュ。玄妙なおもむき。おもしろいおもむき。

【登臨】 トウリン。高いところへのぼつて、下を臨み見る

こと。高いところから下を見おろすこと。

【下界】 ゲカイ。天上に對してこの世界の稱。人間界。娑婆の世界。

元稹の詩に「幡影中天颺、鐘聲下界聞。」

源平盛衰記卷四十六、土佐坊上洛の條に「上天・下界の神祇を勧請し奉り起請するの文書。」

【營々】 エイエイ。あくせくと往來奔走する貌。

詩經の小雅に「營々青蠅。」

列子に「安知營々而求生非惑乎。」

【蛭】 ヒ。字書に「蟻封也」とある。ありづか。ありのたふ。

淮南子に「蟻知爲蛭。」

韓非子の姦劫に「夫世愚學之人、比有術之士、也、猶蟻之比大陵也。」

【造化の大經濟】 造化の神の大じかけのいとなみ。

「造化」とは、天地萬物を創造する神。造化神。造物者。

莊子の大宗師に「以天地爲大鐘、以造化爲大

治。」

太平記卷一、玄慈文談の條に「造化の工を奪うて、桶裏に山川を時つ。」

「大經濟」は、大じかけの經國濟世の業。こゝは、大きなとなみ、大きな施設などいふほどの意に見てよからう。

【雙眸】 サウボウ。兩方のひとみ。兩眼。

謝惠連の文に「氣之神明、雙眸善識。」

【山川の配置】 山や川をたくみに按排すること。山や川のくばりつけ。

【乾坤】 ケンコン。天と地。

易經の説卦に「乾爲天、坤爲地。」

易經の繫辭に「天尊地卑、乾坤定矣。」

朗詠に「壺中天地乾坤外。」

【悟了】 ゴレウ。さとつてしまふこと。さとりきること。

【原素】 ゲンソ。元素と同じ。いかなる方法を施しても更にこれより簡単な物質に化することの出来ない物質。酸素・水素・金・銀の類。

【原子と原子と云々】 物體は凡て原子の結合によつて成

る。今この宇宙の森羅萬象も、悟了した眼から見れば、至微至細の原子の浮動し居る状態に過ぎぬ。

「原子」はアトム Atom の譯語。化學的方法によつて分ち得べき極限のものと假定されてゐる物質の微粒子。而して元素の分子は同種の原子、化合物は異種原子の集團より成る。例へば酸素元素の分子は酸素原子二箇より成り、水の分子は二箇の水素原子と一箇の酸素原子より成るとする類。

【紛糾錯綜して】互にみだれあひ、まじりあつて。

「紛糾」(フンキウ)は、みだれもつれること。紛亂。

史記の陳丞相世家に「救紛糾之難、振國家之患。」

「錯綜」(サクソウ)は入りまじること。組みあはせること。

左傳の序に「錯綜經文、以盡其變。」

【混沌の状態】コントンのジ・ウタイ。はつきりとしなないありさま。

「混沌」(コントン)は、又渾沌とも書く。天地の未だ分れぬさま、即ち天地開闢の始め、物事の判然せぬ様をいふ。

三五曆紀に「未有天地之時、混沌如雞子、盤古生其中、萬八千歲、天地開闢。陽清爲天、陰濁爲地。」

揚子の太玄經に「渾沌無端、莫見其根。」

【劉は起りたり】劉邦、字は季、沛の人。泗上の亭長より身を起して、沛公となり、漢王となり、楚の項羽と共に秦を亡ぼして、遂に天下を併せ、皇帝の位に即いた。即ち漢の高祖である。在位十二年にして崩じた。年五十三。

【項は亡びたり】項羽名は籍、世々楚の將。羽は少年の頃より氣概があつた。書を學んで成らず、劍を學んで成らず。季父項梁はこれに兵法を教へた。

秦の二世の元年、梁・籍の二人は秦に叛いて兵を擧げ、沛公と共に秦を亡して、西楚の霸王となつた。後に漢王劉邦と争ひ、戰つて利なく、垓下に軍し、四面楚歌の聲を聞き、漢皆已に楚を得たるかと歎じ、起つて帳中に飲み、「力拔山兮氣蓋世、時不利兮驍不逝、驍不逝兮可奈何、虞兮虞兮奈若何」と歌ひ、遂に圍を脱して烏江に至り、自ら刎ねて死んだ。

【シーザー】Caius Julius Caesar. 紀元前一〇〇年生、同四四年歿。羅馬の大將で、政治家。紀元前六〇年、ボ



ンペー・クラッサスと共に第一三頭政治を立て、同五年ガリヤを征服し、又各地に出征して大いに羅馬の版圖を擴め、尋いでポンベ

トを滅し、大元帥となつて文武の大政を握り、内治を圖り、勢望隆々並ぶ者がなかつたが、遂にブルタス・カシウス等に羅馬の議事堂で刺殺された。

【覇圖】ハト。覇者たらんとする謀。覇は「ハタガシラ」で「伯」に通用し、覇は借字である。

左傳成公二年に「五伯之覇也。」

註に「夏伯昆吾、商伯大彭・豷、周伯齊桓・晉文。」疏に「伯者長也、言爲諸國之長也。鄭康成云、霸者把也、言把持王者之政教。故其字或作伯、或作覇也。」

孟子の公孫丑上に「以力假仁者霸、以德行仁者王。」

【俯視】フシ。うつむいて見ること。俯瞰。

【一氣】一つの氣。「氣」とは、萬物を生育する天地の精氣をいふ。

天地萬物の未だ分れざる前は、混沌たる一氣であつた。その一氣が分れて陰陽を生じ、天地を生じ、更に萬物を生じた。

【東坡】蘇東坡、名は軾、字は子瞻。支那宋代の文豪。唐宋八大家の人。洵の子。轍の兄。弱冠にして博く經史に通じ、文を屬すること日に數千言。大理評事簽書に除せられた。その爲る所の詩が忌諱に觸れ、死刑に處せられようとした。神宗はこれを憐み、黃州團練副使に拜して安堵せしめた。

室を東坡に築き、自ら東坡居士と號した。建中靖國元年常州に卒した。年六十六、或は六十といふ。後に大師を贈り、文忠と諡された。著すところに東坡全集百十五卷ある。

【山川と城郭と云々】「城郭」(シヤウクワク)は城のくるわ。轉じて城。「漢々」(ハクハク)は廣くして判然せぬ有様。「鴉鵲」(アジャク)は、からすとかさぎ。「浩々」(カ



ウカウ)は大水の瀾漫せる様であるが、こゝでは廣々として限りなきさま。山川も城郭も同一に見え、市井の人も鴨も鵝の聲も同一に聞えるといふのである。

「鶴」は燕雀類中鳥科に属する鳥。翼長約一八釐頭と背とは光澤のある黒色で、腰に灰白の一横帯がある。肩の羽は純白で、尾は長く、黒色で緑色の光澤を帯びてゐる。腹部の下半は白く、嘴と脚は黒い。支那・朝鮮・臺灣及び九州の北部等に棲む。特に福岡縣の二郡、佐賀縣の一市六郡はその棲息地として天然記念物に指定されてゐる。たうがらす。てうせんがらす。ひぜんがらす。かちがらす。喜鶴。

【哲學】 Philosophy の譯語。「萬有全般の根本原理を攻究する學」と定義されてゐる。哲學は人性の凡ての方面の要求より出てゐるが、知的形式を取る點に於て、想像又は信仰に立脚せる詩歌・宗教と異なり、萬有全體を對象とする點に於て、その一部を對象とする科學と異なり、一方科學の結果を材料とし、他方科學に基礎を與へる。萬有全般の攻究は、認識の形式・實在の本質・行爲の問題に分つことができる。哲學の三部門たる認識論・形而上學・倫理學はその各々に應ずるものである。

【絶頂】 ゼツチャウ。山の最も高いところ。山のいたゞ

き。頂上。てつべん。

舊唐書の李德裕傳に「維州據高山絶頂、三面臨江。」太平記卷二、天下怪異の條に「地震あつて、富士の絶頂崩るゝこと數百丈なり。」

【講壇】 カウダン。講演又は説教などするときのぼる高臺。

【永久無限を慕ふ】 永久無限に生きたい、よしそれがかなはないない、その名を永久無限に傳へたいなどと望む願をいふ。

【境界】 キヤウガイ。(一)佛語。果報によつて各自のうける境遇。(二)出會つた境遇。(三)分限内。分内。(四)範圍内。こゝは(一)の意と見てよからう。

【欲望】 ヨクバウ。不足を感じてこれを満足せしめようとのぞみ。欲しのぞむこと。ほしがること。

【雲雀より高き時にやすらひて】 こゝは芭蕉翁の句雲雀より上にやすらふ時かなによつて文を成したものである。

【時】(タウゲ)は、「たむけ」の音便。坂路ののぼりつめた

ところ。

堀河百首、雜に「足柄の山のたうげに今日來てぞ富士の高嶺のほどは知らるゝ」

「やすらふ」とは、休みいこふこと。休息すること。

源氏物語の椎本の卷に「こゝにやすらはむの御心も深ければ、うち休みたまひて。」

【渴望】 カツバウ。のどの渴(カワ)いたものの水を望むが如く、切に希望すること。切望。

范成大の詩に「國人渴望公顔色。爲報襄帷入帝畿。」

【天つ雲一つに見ゆる越の海の云々】 源三位頼政の歌。水と空との一つに見える越の海の浪間を分けてまでも、故郷を忘れずに歸つて行く雁を詠じたものである。

「越の海」は北陸道なる越前・越後・越中地方の海上をひろくさしてさふ。

「頼政」は攝津守頼光の玄孫、兵庫頭仲政の子。白河法皇はこれを擢んで判官代となされた。保元の亂に、後白河天皇は、鳥羽法皇の遺勅によつて頼政を召された。頼政は勤王の志あつく、早殿を許された。後に平氏に屬し、從三位に敘せられ、刺髪して名を眞蓮と改めた。平氏が専恣を極むるに及んで、高倉天皇

の庶兄以仁王を奉じて令旨を諸源氏に致し、平氏討滅を謀つたが、事成らずして、治承四年(一一八四〇)宇治の平等院で自殺した。時に年七十七。

【人間塵界の爲に繩せらるるべけんや】 「人たるものが、どうして俗塵世界におこるつまらないことに束縛されてよからうか。」との意。

【人間】(ニンゲン)は人界に住むもの。人。人類。

法華經の法師品に「生於此人間。」

朗詠に「此花非是人間種、瓊樹枝頭第二花。」

【塵界】は、穢れたこの世の中。俗塵世界。ちりのよ。

俗世。塵世。塵裏。

趙彦昭の詩に「星心滿塵界、佛跡現虚空。」

【繩せらるる】(ジウセらるる)は、繩でしばられること。束縛されること。

【意義】 イギ。ことこのこゝろ。わけ。意味。

神仙傳に「班孟能含墨、舒紙著前、嚼墨噴之。皆成文字、滿紙各有意義。」

9 挿 圖

東海道の松並木 安藤廣重筆  
 安藤廣重筆 東海道五十三次の内の一つ。  
 筆者安藤廣重は江戸末期の浮世繪師。幼名徳太郎。後十右衛門と改めた。江戸の八重洲河岸の定火消なる同心徳右衛門の子。一立齋と號した。始め岡島林齋に狩野風を學び、後豊廣の門に入つて歌川廣重と稱した。最も浮世繪山水に長じ、その遠景寫法の妙に至つては、天下獨歩と稱せられ、その影響は遠く泰西の畫家にまで及んでゐる。江戸名所百景・東海道五十三次・都名所百景等の名作がある。安政五年(二五一八)没。年六十二。

### 二二 斑鳩の宮

#### 1 解題

三木露風著「青き樹かげ」の中から採つた。  
 聖徳太子のおはした斑鳩の宮の古跡、即ち法隆寺の夢殿のあたりの夏げしきに面しながら、遙かにそのかみの太子のいさをしを追慕し、讚美して歌つた詩である。  
 「青き樹かげ」は三木露風の詩集で、現代詩人叢書第七篇として發行された。作者の作風の特徴たる象徴的の詩も採録されてゐるが、本書に收められたものは、主として歌詠に堪へるものを選んであるので、形式上に韻律をもつた快い諧調の作が多く見られる。大正十一年七月、東京、新潮社發行。

#### 2 作者

三木露風 ミキ ロフウ。  
 名は操。かつて羅風と號したこともある。明治二十二年六月二十三日兵庫縣揖保郡龍野町に生れた。備前開谷養に學び、早稻田大學に入り、後慶應義塾大學に轉じたが、途中で退學した。一時、

### 三三 木露風



北海道トラビスト修道院の講師をつとめたこともある。  
 氏は詩話會から岐れた「新詩會」の一人で、北原白秋・日夏耿之

介・西條八十・竹友藻風等と共に數へられてゐるが、その詩境の崇高で敬虔的であることに於ては現詩壇で第一人者であらう。世間の人が氏を以て大家とゆるすのは宜なるかなと思はれる。前記「青き樹かげ」の自序に曰

今茲に收むる作品は主として歌ふことのできる詩及び抒情詩である。今これを選んだ趣意は、現代に於ても或は何時の代に於ても歌唱に堪ふる詩はなほいつまでも必要であり、その興ふるところは萬人の喜びであることを信ずるからである。かく言へば其が大仰に似たれど然らず。歌の意思は常に詩の本質と共に存する。本質より出でず、本質流出せず、たゞ散漫に書き列ねるを詩といはず。これ鶴也。おほかたは散文とたがはざるべし。と。この數語の裡にも、氏の詩に對する信念の一端は窺はれる。この他の詩集に「夏姫」「廢園」「寂しき囁」「白き手の獵人」「露風

集「幻の田園」「良心」「蘆間の幻影」「生と戀」「象徴詩集」「信仰の曙」等があり、散文集に「詩歌の道」「修道院雜筆」「修道院生活」などがある。

### 3 編纂の用意

學習の興味を一轉して、こゝに詩を置いた。詩を置くに ついては、その格調と内容とを吟味し、直に次課と密接なる關聯をもつてゐるものを選んだ。その格調の高雅嚴肅なる、その内容の日本文化建設の一大偉人の追慕たる、共によく如上の意圖に合するものであると思ふ。更にこの詩を課することに期待するものは次項「要旨」に於て述べてあるが如きものである。

### 4 要旨

聖徳太子の鴻業偉績に對する作者の欽仰の情が、その高明博大な着想と雄渾遒勁な辭様とによつて遺憾なく歌ひ出されてゐる。そのうつくしい懷古の情に浸らせ、殊に太子によつて顯現された日本精神、日本的自覺の念と、太子によつて建設された日本的文化とを、作者と共に稱へしめると同時に、およそ詩といふものの力についても

考へさせたいと思ふ。

### 5 取扱上の注意

この作者の詩境は、現代詩人中でも特に高いと稱せられてゐるが、この作など誦すると、誠に崇高な敬虔の念に富んでゐる作者の情操が見あげられるのである。法隆寺や聖徳太子などといふ題材がすでに宗教的敬虔の情を喚起するものであるためでもあるが、この作者であつてこそ、始めてかくも莊重に、かくも謹嚴に、しかも感激に充ちて歌ひ出されるのであると思ふ。幾度か繰返して讀誦してゐるうち、實に一種の力ある流、太子を欽慕する感情の力ある流が、詩句のうちに滾々と流れてゐるのを覺えないわけにゆかない。

用語に可なり固いものもあるが、その爲に決して典雅を傷つけるやうなことの無いのは、この作者が常に讀誦するに堪へることを以て、詩の本質の一としてゐる用意に基づくものと思はれる。何にしても、幾度も反誦させて、作者の心持を體得させたいものである。

先づ季節に即して、夏の青葉の中に包まれた宮の美から歌ひ出し、次ぎ／＼に歴史的懷古の情を吟じつゝ、更に復び自然の中に靜かに大きくをさまつてゐる宮の美を繰返して結んでゐる。その首尾が、申し分なく板についてゐて、全篇の内容にこの上ない落着きと、靜けさと、深みとを與へ、懷古の情を實によく包んでゐる。この首尾の二節を一面の繪畫の額縁に比するの固より當らないが、一篇の内容を引立たせる上に、いさゝかそれに似た趣があると思はれる。

### 6 設問

- 1 この詩の調子が、莊重で力づよいのは、形式の上から考へると、如何なる特色に因るのであらう。(七五調よりも、寧ろ大體が五七調的になつてゐて、重厚な語が句尾に来てゐる。)
- 2 また、内容の上からは、その理由がどういふ風に考へられるか。
- 3 「大いなる日本のこゝろを示す」の句を解釋せよ。
- 4 次の句の圈點を施した部分を文法的に説明せよ。

イ、上宮王ののい。まし。斑鳩の宮。  
ロ、「……」と、かの太子は宣らす、おこそかに、國使をして。  
ハ、法隆寺は……昔に建ちけらし。

### 7 釋義

【斑鳩の宮】イカルガのミヤ。大和國生駒郡、現今法隆寺東院の夢殿がその宮址であるといふ。推古天皇の九年に聖徳太子の興された宮。

日本書紀に「推古天皇九年、厩戸太子初興宮室于斑鳩。十四年、天皇、播磨國水田百町、施于皇太子、因以納于斑鳩寺。」とある。

天皇の三十年、(一説に廿九年)、太子はこゝで薨じ給うた。

「いかるが」(斑鳩又は鶺鴒ともかく)は、元來鳥の名であるが、それを地名に附けたのであ



る。大和法隆寺村の地域がそれである。佛法興隆の聖地として名高い。斑鳩の名は雄略紀に初めて見え、靈異記には鶴村と書いてある。



【上宮王】 ジャウグウワウ。聖徳太子を申し奉る。用明天皇第二の皇子。御母は穴穂部間人皇后。敏達天皇の第三年に生れ給うた。(一説にはその前年ともいふ)

日本書紀によれば、「皇后懐妊開胎の日、禁中を巡行し、諸司を監察して馬監に至り給ふ、乃ち厩戸に當つて、勞なくして忽ち皇子を産み給ふといふ。生れながらにしてよく言ひ、聖智あり、壯なるに及んで、一時に十人の訴を聴きてよく辨じ、誤り給ふことなし。兼ねて未然を知

り給ふ。内典(佛教)・外典(儒教)通ぜざるなし。父天皇御鍾愛あり、宮南の上殿に居らしめ給うたので、御名を上宮(かみみや)・厩戸(うまや)・豊聰耳(とよとみみ)太子と申し奉る。」といふやうなことが誌されてある。上宮王・厩戸皇子など稱し奉る御名は、皆これより出たものと拜せられる。聖徳とは、後より奉つた稱號らしい。

太子の御年少の頃、蘇我の大臣は物部の大連と權を争うて相軋した。事皇室に關連して、蘇我馬子は物部守屋の家を圍んで之を殺した。その時、太子は十四歳にして他の諸皇子と共に軍に臨まれた。戰終つて攝津に四天王寺を造り給うた。

推古天皇御即位に及んで、皇太子に立ち、攝政とならせ給うた。時に御歳二十。盛に海外の文明(主として支那)を輸入せられ、佛教を興隆して國民思想の涵養に資せんと力めさせられた。

推古天皇の二年には三寶興隆の詔を發し、翌年には來朝せる高麗僧慧慈・百濟僧慧聰をしてこれが弘通に努めさせ、寺塔を起し、僧尼を度し給うた。

天皇の十一年には、始めて冠位十二階を定め、翌年、憲法十七條を定め、十五年には小野妹子を隋に遣はされた。由來支那は尊大ぶつた國である。然るに太子は全く對等の禮を以て當り給ひ、決して一步も引けは取り給はず、その時の我が國書に「日出處天子、致書日沒處天子。」と書かせられた。隋帝はこれを喜ばなかつたが、太子は少しも屈せず、妹子が翌年歸朝、再度の使の時にも、又「東天皇敬白西皇帝。」と書かせられた。大國をも恐れず、斷じて國辱を受け給はなかつた太子の高邁なる識見、今より追想し奉るだに心づよく嬉しい感じがする。

大化新政の基礎は、實に太子の時に於て形成せられたと云つてもよゝ。

天皇の廿八年には、馬子と共に、天皇紀・國紀・臣・連・伴造・國造百八十部、並に公民等の本紀を撰し給うた。實に我が國修史の始である。

韓土に對しては、天皇の五年に吉士磐金を新羅に遣はして朝貢を促し、次いで新羅のために任那を攻め、八年には任那のために新羅を征して忠誠を誓はしめ、後又新羅

が誓に背いたので任那の急を救ふなど、力の限りを盡くし給うた。そのため、韓土からも僧侶を貢し、文物を輸入するなど頗る信順の意を表した。

惜しむべし、天皇の三十年(一説には二十九年)御年四十九にて御薨去遊ばし給うた。哭泣の聲が行路に滿ちたとある。薨後三年の調査によるに、寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、一に太子御獎勵の結果といふ。

四天王寺を始め、法隆寺・橘寺・中宮寺・蜂岡寺等は皆太子の創建であり、法起寺・法輪寺は太子の遺命によつて建てられたものである。造寺・作佛の盛なると共に、建築・彫刻・繪畫等の美術工藝は長足の進歩をなした。現に國寶に指定せられてゐる當時の遺物は無數である。

【白き日のかぎろひ照れる中】「白き日」は、照りかゞやく日。「かぎろふ」は「かげろふ」に同じ。光のひらめくを云ふ。

【幻青し】「幻」は、實は無くして、有るやうに見えるものである。こゝでは、上宮王の古の事どもが幻に立つて見えるのである。それに、附近の縁が配合されて見えるから

「青し」と言つたのである。千三百餘年の昔と今の現状とが、この一句に盡くされてゐる。

【西域】 セイキキ。支那で、印度地方を汎稱する語。

【佛陀】 梵語ブダ(Buddha)。浮屠ともいひ、佛ともいふ。

「詩の佛陀」は「詩的佛陀」といふ義で、信仰を別にして藝術的に見た作者の氣分が現れて面白い。それに「やはらかき」といふ形容詞を添へて、はや／＼した氣分、作りたてで日がまだ浅い趣を見せてゐる。實に巧妙な形容といはねばならぬ。

【覺哥】 カクカ。高麗の人。聖德太子の師。「外典を博士覺哥に學ぶ。」とある。

【慧慈】 エジ。高麗の僧。聖德太子の師。「内典を高麗の僧慧慈に習ふ。」とある。

【衣を翻して來り】 「衣を翻して」の形容が、彼等の來朝のさまを髣髴たらしめてゐる。

【藝術興り、文明進み】 聖德太子攝政時代に文化の著しく進歩したことをいつてゐる。前出「上宮王」の條を参照のこと。

【憲法制定せられ】 有名な十七條の憲法は、推古天皇の十二年に聖德太子の成作せられたもので、太子がこの佛教的儒教的思想を以て、道德的政治的準則を示されたものである。原文は漢文で日本書紀に載せてあるから、こゝにはその各條の主要のみを摘記しよう。

第一條 上下和睦、忤ふことなきを宗とすべきこと。

第二條 佛教は普遍的のもので、能く教へれば枉れる者も直となるから、篤く三寶を敬すべきこと。

第三條 君命を承けては必ず謹むべきこと。

第四條 治國の本は禮にある、羣卿百寮より下人民に至るまで禮を重んずべきこと。

第五條 訴訟を決するには、利欲を棄てて公明に裁判すべきこと。

第六條 惡を見ては必ず匡し、詔詐佞媚の者を遠ざくべきこと。

第七條 官の任掌その宜しきを得しむべきこと。

第八條 群卿百寮早く朝し晏く退くべきこと。

第九條 君臣共に信義を重んずべきこと。

第十條 是非は比較的のものであるから、忿を絶ち瞋を棄つべきこと。

第十一條 賞罰を明らかにすべきこと。

第十二條 國司・國造は百姓に賦歛せざるべきこと。

第十三條 官に任ずる者は職掌を自覺すべきこと。

第十四條 群臣百寮互に嫉妬すべからざること。

第十五條 私あれば上下の和諧を缺く、私に背いて公に向ふべきこと。

第十六條 民を使ふに時を以てすべきこと。

第十七條 大事を決するに當つては、衆論によるべきこと。

【法隆寺】 ホフリ、ウ

ジ。奈良縣生駒郡法隆寺村に在る寺。法相宗三本山の一で、推古



天皇及び聖德太子の發願創想したまふところ。太子本願七寺(法隆寺・四天王寺・中宮尼寺・橘尼寺・蜂岡寺・池後尼寺・葛城尼寺)の隨一である。又奈良朝に於ける七大寺(東大寺・大安寺・元興寺・興福寺・西大寺・藥師寺・法隆寺)の一として、久しく皇室の尊崇を辱うし、庶民崇拜の中心であつた。平安朝に一たび衰へ、鎌倉時代に至つて復興し、中世以後は積衰の状態にあつたが、草創以來前後千三百年、七堂伽藍は儼として存し、法燈は炳として輝き、佛教史上、特に藝術史上、飛鳥時代の代表的建造物として、中外の凝視するところである。

境内は廣く、古來東院と西院との二つに分れてゐる。通常法隆寺といはれる部分は主に西院の方で、此處に推古天皇の十五年に創建せられて以來まだ一度も火事に罹らない中門・廻廊・金堂・五重塔などがある。東院の方は始め聖德太子の宮殿のあつたところで、これは太子薨後蘇我入鹿のために焼かれたが、奈良朝時代に夢殿や舍利殿・僧法堂などの建立せられたのが、今なほ残存してゐる。

【建ちけらし】 「けらし」の文法上の説明を生徒にさせてみ

たい。

「けらし」は「けるらし」の約で、過去の助動詞「けり」と推量の助動詞「らし」との結合。奈良朝時代には「けらし」「けらしき」と活用したが、平安朝以後には「けらし」のみ用ひられる。過去の推量を意味する語であるが、轉じてはたゞ「けり」の意にも用ひられる。

【大いなる日本のこゝろを示す】「僧伽藍摩」の形容句として置いたのである。げに日本國民性の雄大を示す建造物である。

【僧伽藍摩】 サンガランマ。Sangharama。梵語で、僧團、僧舎の義。寺院の稱に用ひる。

【東天の菩薩太子】 東洋の天地に御降誕あらせられた菩薩とも申し奉るべき太子。

【菩薩】とは、梵語の菩提薩埵(Bodhisattva)の略。「大覺有情」と譯す。勇猛心を以て菩提(道)を求め、大慈悲心を以て衆生を濟ひ、既に妙覺の果に近づいてゐる者。佛に次ぐ位次。

【君がせし功績のあとを】 この句の結がどうなつてゐるか

を生徒に言はせて見たい。即ち、初にかへる倒置法である。

8 通 釋

第一聯 (これは全體の起しである)

大和の國にある、その昔上宮王聖德太子のおはしました斑鳩の宮のあたりは、一面に青葉が薫つてゐて、いまや夏の眞盛りである。

第二聯 (これは前を承けて、自分の今立つてゐるあたりを眺めつゝ、懐古の情に耽つてゐる所である)

この舊蹟に今自分が立つて昔のことを追懐してゐると、眞夏のある日か照り光つてゐる中に、周圍の青葉の色に青く染められながら、上宮王の昔のことどもが幻となつて見えてくるのである。

第三聯 (以下の三聯はその青き幻として浮んでくるそのかみのことを歌つてある。この聯は佛教興隆のはじめをのべた)

その當時は、日本の文明は三韓や支那から輸入しはじめた幼稚な時代であつたが、太子の頃にしきりに輸入され弘通された西域・印度の佛教は、その時に廣くあまねく影響して、言はば詩的な佛教文化を金色の光彩を放たしめる如くに一般文化の

上に蔚然として輝かしたのである。

第四聯 (これは遣隋使小野妹子に持ちゆかせた國書のことを述べて、我が國威の尊嚴を示し給うたことを頌し奉つた)

又外交上には「日出處の天子日没處の天子に書を致す」と、太子は遣隋使をして、おごそかに、支那に對して仰せしめられた。

第五聯 (これは佛教その他の文明が、益々興隆して、文物制度の大いに整頓して來たことを具體的にあげた)

當時の學者である覺智や慧慈等ははるく衣を講して我が國に來つて文化を傳へた。この時代には藝術は興り、文明は進み憲法は制定せられて、朝廷の政治は改革せられた。これ皆悉く太子に負ふところのものである。

第六聯 (特に法隆寺建立を讚し奉る)

堂塔の規模の壯大端嚴な法隆寺は、實に太子の時、即ち今を距る千三百年の昔に建立せられたのである。この寺こそは實に日本國民性の雄大さを示す大伽藍である。

第七聯 (これは太子のなされた功績の數々を讚し奉つたのである)

東天の菩薩とも稱し奉るべき我が太子の立てさせられた數々の御功績を偲び奉つて、今自分はこゝに讚歎の涙を流すのである。

第八聯 (冒頭の一聯をこゝに反復して結びとした。前後照應して落着きがあると共に、今迄の追憶の夢からさめて、再び現實に立返り、更にしみじみと感銘を新たにするといふ氣持が心ゆくばかり巧に歌ひ出されてゐる。)

## 二三 日本文化の優秀性

鹿子木員信

### 1 解題

鹿子木員信の「やまとこころと獨逸精神」の中の第一章「やまとこころ——その現実とその可能性」の中の「二三」から「二一」までの間を採つたもので、大分原文を改めた所もある。改めた所或は省略した所は、参考の1に記しておいた。

この文はドイツを通じて日本文化の對世界的宣傳を志し、ドイツ在留研究中、日本文部省の意を體し、ドイツ學界の支持後援の下に、これが事にあたり、一旦歸朝して再度ドイツに遊び、ベルリン大學その他四五の有數大學に於て日本精神に關する講義を行ひ、大いに「やまとこころ」を獨逸精神に傳へた作者が、第一回の歸朝後直に國民新聞社の講堂に於て試みた演説の草稿である。

なほ此の書には外に、第二章、やまとこころのおひたち、第三章、獨逸精神の二篇がある。

昭和六年、東京、民友社發行。

### 2 作者

鹿子木員信 カノコギ カズノブ。

明治十七年（二五四四）東京に生れた。東京帝國大學を卒業した後、在外研究員としてドイツに學び、哲學を研究するかたはら、ドイツに於ける日本協會創立のことに盡力した。大正十五年七月歸朝し、九州帝國大學に教鞭を執つたが、翌昭和二年四月再びドイツに赴き、ベルリンに於ける日本協會の指導に任じ、兼ねてベルリン・ライプツヒ・ミュンヘン・ボン・フランクフルト等の諸大學に日本精神を講じた。昭和四年歸朝、再び九州帝國大學に教鞭を執り、現に同大學教授である。

### 3 編纂の用意

本巻の結びとして、日本文化の特質を論じた本課をおいた。日本精神研究の聲の盛にして、又その熱度の熾烈なる、今日の如く甚だしいことは近年稀に見るところである。日本精神は單に理論的考察によつて明らかにし得るものでもなく、西洋に發達した哲學的研究法によつて分

析綜合されてその眞價の知られるものでもない。日本精神は日本の文化を生み、日本の文化の中に日本精神は宿るのである。日本精神を明らかにせんとする人は、日本文化を深く具體的に探究せねばならぬのである。國語の各時代に於ける作品は優勢なる日本文化である。國史は日本文化發展の記録である。生徒は日常の學習に於ける各分科を孤立的に見て來てはゐまいか。いやしくも日本のものは悉く日本文化に關係し、日本精神に聯絡する。この理をとくと考へつゝ本課を讀むことは、最も時勢に適合した學習であると思ふ。

#### 4 要旨

「日本文化の高貴と偉大」とを各方面より論考し、或は具體的にこれを立證したものである。即ち原文結論の一節に、「余が日本文化の種々相とその特色とを語つた所以は、寔に讀者自ら立留つて、暫くその祖先健闘の跡を追懷し、日本文化の實に天下一品なる事實を、その胸裏に牢記せられんことを冀ふに外ならぬ。」とある作者の言葉の中に、本篇の要旨も、隨つてまた讀者が特に留意して

讀む點も示されてゐるのである。

#### 5 概説

第一節（一五七頁—一五八頁五行）序説。異國の文化を吸收するに當つては、先づ自國の文化を自覺の焦點に於て見ねばならぬ。

第二節（一五八頁六行—一六一頁五行）日本の藝術は、日本國民性の氣品とその深さと美はしさを語る。世界の文化・藝術に比する時、その特色は、我等の魂の奥底深く包まれた圓滿自足の心から來てゐる。内に滿を持して放たぬ、恐ろしいまでに強い力の上に坐して、しかも山湖の如く靜かな心が、よく天下一品の藝術を生んでゐるのだ。

第三節（一六一頁四行—一六二頁二行）日本の宗教について。日本國民を以て宗教心に乏しいとするのは速斷に過ぎる。日本の宗教的精神は、古來の神社崇敬について見得るし、後代に至つては、佛教にからんでその花實ともに見るべきものがある。而してその宗教的精神は時に國民的英雄の心膽氣魄の裡に、大事を執行せ

しめる原動力となつてゐる。

第四節（一六二頁末行—一六四頁四行）前節にはゆる國民的英雄の心事は、織田信長が桶狭間への出陣を前に酒宴した例でも察知される。かの「敦盛」の舞の處を描いた文章は、形而上學的思想と英雄的斷行とが経緯となつてゐて珍しいものである。

第五節（一六四頁五行—一六六頁五行）前節のつゞき。織田信長の出陣の光景を描いた文章についての哲學的解釋。世界的に共通なる「藝術流轉」の思想から「英雄的果敢斷行」の結論を導かした點が、日本精神をして世界獨得のものたらしめてゐる。

第六節（一六六頁六行—一六九頁九行）三浦道寸の最後とその辭世とを中心の例話とし、三小節に互つて、更に「諸行無常」の思想と、英雄的行爲の原動力たる大乘的精神との異同を論じてゐる。

第七節（一六九頁一〇行—一七一頁二行）日本の藝術を以て繊細巧緻の小品と爲す評の、必ずしも當らざるを論證してゐる。

第八節（一七一頁三行—一七二頁）結論。日本文化の優秀性を十分に自覺し、西洋文化に面接するに當つても我が精神的文化を以て、彼等物質的文化の犠牲とする如きことがあつてはならぬ。

#### 6 取扱上の注意

□本課にはいろ／＼學ぶべきことが藏されてゐるが、内容的に言つて最も意味深長であり、題材・文章から言つても最も精彩があり、そして作者が最も力を注いでゐる獨得のところは、「日本の宗教」に關する第三節以下の各節であると思ふ。その中でも「諸行無常」の思想と日本精神との異同を論ずる節は、十分に熟讀玩味せしめたいところである。

□固よりその他の節に於ても、從來の俗説に對する評論は、それ／＼作者の獨創的意見に基づいてゐると見られ、一々傾聴すべきものがあるので、生徒にも、虚心坦懷にこれを受取らせるやうにしたい。

□自國の文化に對しては、これを過重視してもいけない。これを輕視するのは更にいけない。要は、正しく公平に



析綜合されてその眞價の知られるものでもない。日本精神は日本の文化を生み、日本の文化の中に日本精神は宿るのである。日本精神を明らかにせんとする人は、日本文化を深く具體的に探究せねばならぬのである。國語の各時代に於ける作品は優勢なる日本文化である。國史は日本文化發展の記録である。生徒は日常の學習に於ける各分科を孤立的に見て來てはゐまいか。いやしくも日本的のものは悉く日本文化に關係し、日本精神に聯絡する。この理をとくと考へつゝ本課を讀むことは、最も時勢に適合した學習であると思ふ。

#### 4 要旨

「日本文化の高貴と偉大」とを各方面より論考し、或は具體的にこれを立證したものである。即ち原文結論の一節に、「余が日本文化の種々相とその特色とを語つた所以は、寔に讀者自ら立留つて、暫くその祖先健闘の跡を追懐し、日本文化の實に天下一品なる事實を、その胸裏に牢記せられんことを冀ふに外ならぬ。」とある作者の言葉の中に、本篇の要旨も、隨つてまた讀者が特に留意して

讀む點も示されてゐるのである。

#### 5 概説

第一節(一五七頁—一五八頁五行) 序説。異國の文化を吸收するに當つては、先づ自國の文化を自覺の焦點に於て見ねばならぬ。

第二節(二五八頁六行—一六一頁五行) 日本の藝術は、日本國民性の氣品とその深さと美はしさを語る。世界の文化・藝術に比する時、その特色は、我等の魂の奥底深く包まれた圓滿自足の心から來てゐる。内に滿を持して放たぬ、恐ろしいまでに強い力の上に坐して、しかも山湖の如く靜かな心が、よく天下一品の藝術を生んでゐるのだ。

第三節(一六一頁四行—一六二頁二行) 日本の宗教について。日本國民を以て宗教心に乏しいとするのは速斷に過ぎる。日本の宗教的精神は、古來の神社崇敬について見得るし、後代に至つては、佛教にからんでその花實ともに見るべきものがある。而してその宗教的精神は時に國民的英雄の心膽氣魄の裡に、大事を決行せ

しめる原動力となつてゐる。

第四節(一六二頁末行—一六四頁四行) 前節にいはゆる國民的英雄の心事は、織田信長が桶狭間への出陣を前に酒宴した例でも察知される。かの「敦盛」の舞の處を描いた文章は、形而上學的思想と英雄的斷行とが経緯となつてゐて珍しいものである。

第五節(一六四頁五行—一六六頁五行) 前節のつゞき。織田信長の出陣の光景を描いた文章についての哲學的解釋。世界的に共通なる「藝術流轉」の思想から「英雄的果敢斷行」の結論を導かした點が、日本精神をして世界獨得のものたらしめてゐる。

第六節(一六六頁六行—一六九頁九行) 三浦道寸の最後とその辭世とを中心の例話とし、三小節に互つて、更に「諸行無常」の思想と、英雄的行爲の原動力たる大乘的精神との異同を論じてゐる。

第七節(一六九頁一〇行—一七一頁二行) 日本の藝術を以て繊細巧緻の小品と爲す評の、必ずしも當らざるを論證してゐる。

第八節(一七一頁三行—一七二頁) 結論。日本文化の優秀性を十分に自覺し、西洋文化に面接するに當つても我が精神的文化を以て、彼等物質的文化の犠牲とする如きことがあつてはならぬ。

#### 6 取扱上の注意

□本課にはいろいろ學ぶべきことが藏されてゐるが、内容的に言つて最も意味深長であり、題材・文章から言つても最も精彩があり、そして作者が最も力を注いでゐる獨得のところは、「日本の宗教」に關する第三節以下の各節であると思ふ。その中でも、「諸行無常」の思想と日本精神との異同を論ずる節は、十分に熟讀玩味せしめたいところである。

□固よりその他の節に於ても、從來の俗説に對する評論は、それ／＼作者の獨創的意見に基づいてゐると見られ、一々傾聴すべきものがあるので、生徒にも、虚心坦懐にこれを受取らせるやうにしたい。

□自國の文化に對しては、これを過重視してもいけない。これを輕視するのは更にいけない。要は、正しく公平に

その眞價を先づ自覺するに努め、長はますく之を發揮し、短は努めて之を補ひ行くのが、眞に國を愛する所以であり、國民としての道であること今更言ふまでもない。さう言ふ意味から言つて、本課の所説の如きは、實に好箇の材料である。

7 設問

- 1 この作者は、先づどういふ積りでこの文を書いたのであらうか。(作者の意圖を問ふ)
- 2 この課を學んで、從來各自が持つてゐた考へに誤があつたと気づいた者があるか。それはどういふ點についてであるか。
- 3 諸行無常の思想とはどういふ思想か。他の言葉で何と言ふか。
- 4 その諸行無常の思想と日本精神との關係が論じてある所を読みあげて見よ。
- 5 大乘的精神とは、平たく言ふと如何なることになるか。
- 6 西洋文化と日本文化との相違の主なる點はどこにあるか。

るか。

7 この文章の中から、文學的に興味深い語句をあげよ。

8 次の語句の意義を問ふ。

イ、絶対に内なる世界(二五八頁二一行)

ロ、形而上學的思想。

ハ、數奇幽雅な什寶。

ニ、萬物流轉。

8 釋義

【國風】 コクフウ。(一)國の風俗。國のてぶり。國俗。

川中島合戦に「我が娘に不義あれば、相手を糺し、同罪に行ふ越後の國風。」

史記の殷本紀に「政事決定於冢宰、以觀國風。」

(二)その國のはやりうた。その地の俗語。

古今著聞集卷六に「多近方に命じて、國風をうたはせられけり。」

こゝでは(一)の意であるが、特にそのものの組織とか機構とかを一層重くさしてゐる。

【民俗】 ミンゾク。人民の風俗。人民の習慣。民俗。

【文化】 ブンクァ。(英佛 Culture 獨 Kultur)。自然に對する語。與へられた(内外)の自然の事實を一定の標準に照らして支配し、形成し、そして窮極に於てその理想を實現しようとする過程の總稱であり、その成果でもある。特にその過程の成果・産物を文化財ともいふ。學問・藝術・道德・宗教・法律・經濟等は即ち是である。文化財は價値の結び付いてゐる客觀實在であつて、純粹な價値そのものではない。純粹な價値そのものとして文化財から區別せられるものを文化價値といふ。これは文化史上の諸、の價値(文化財)即ち文化一般の理想・目標となるべきものであつて、文化をして文化たらしめるものは、之を措いて外にはあり得ないのである。随つて、それは單に個人の主觀的好惡に屬する興味でなくて、論理上普遍妥當性を有する先驗的價値でなければならぬ。

【吸收】 キフシウ。(一)吸ひとること。吸ひ入れること。(二)ひきよせ集めること。こゝでは(一)の意。

【攝取】 セツシュ。(一)をさめとること。すべとること。(二)佛語。佛の慈悲によつて、衆生を濟度すること。

保元物語、左大臣上洛の條に「早翻折伏。攝取之新義、被致仁徳。」

こゝでは(一)の意。

【文化を吸收攝取する】 文化を吸ひとり、をさめとること、即ち異國に發生した文化を自國の文化の中に取り入れ、これを自國の文化として價値のあるやうにすることである。自國の國風に同化し、民俗に適合するやうにすることである。

【崇高】 スウカウ。崇(スウ)はシュウ(崇)の慣用音。けだかいこと。尊嚴なこと。

易經の繫辭に「崇高莫大乎富貴。」

【優秀】 イウシウ。極めてすぐれてゐること。

【目覺む】 メザむ。(一)ねむりから起きる。現(ツツ)にかへる。さめる。(二)ねむりが去る。(三)迷ひが解ける。本心にたちかへる。(四)おどろかれる。こゝでは(一)の意。

【古き日本文化の崇高と優秀とに十分目覺めなければならぬ】 古い傳統として残つてゐる日本の文化のもつ崇高

さと優秀さに十分目覚めて、それを認識し、それを掴み取らなければならない。即ち、日本文化の性格としての崇高と優秀とを自覚しなければならない。

【皮相】ヒサウ。表皮にあらはれる象(カダ)。うはべ。うはつら。又、真相を極めず、表面だけによつておこなふ浅薄な判断。

こゝでは前者。

【崇拜】スウハイ。又、シウハイ。あがめたふとぶこ。信仰。

【皮相低級な歐米崇拜の濁流に浸されて】何等確乎とした根據のない、即ち自覺を伴はぬ、うすつべらな、うはべの、下級な歐米をたゞむやみに崇拜するといふ濁流におし流され、浸されてしまつて。

【過ぎし日の日本文化の偉大を忘却し去りがちである】過去の日本が持つその文化の偉大さを忘れ去つてしまひがちである。

何故、「皮相低級な歐米崇拜の濁流に浸されて、過ぎし日の日本文化の偉大を忘却し去りがちである。」かといふ

と、作者鹿子木氏は次の様に考へてゐる。

「然らば、何故に我等は進んで國を開き、歐米の文物制度・技術機械の類を採らねばならなかつたのであるか。ことわるまでもなく、日本國民は、無論未開國民ではなかつた。日本の多くの所謂識者が言ひ觸らしたやうな文化上の後進國でもなかつた。否、多くの點に於いては遙かに歐米の上にあつた。極めて高級な文化の階段に立てる國民であつた。その高級な文化的國民が、何故に文化の傳統を異にする歐米の文明を採らねばならなかつたのであるか。この問題に對する解答は頗る簡單だ。即ち、我等にして視野を一國の「生存」と言ふ點に限界するかぎり、少くも徳川末期維新當初の歐米の文明は、日本在來のものに比して遙かに優秀であつたからである。

獨り日本の文化に限らず、總じて支那・印度等の亞細亞の文化は、歐米の文化に比べて、國際間の生存競争に對しては、頗る不用意、不完備、劣弱なるものであつた。例を戰鬪の武器に取つても見よ。我等が未だ全く弓箭の域を脱せぬ時に、彼等は既に、小銃・大砲を以て戦ひつゝ、

あつたのだ。我等が海を渡るに、傳馬船の類を以てしつゝありし間に、彼等は既に堅固な甲板を以て蔽はれたる堅牢宏大な艦船を持つてゐたのだ。云々」(「やまとこゝろと獨逸精神」(二五頁―二六頁)による)

【暫く足を停めて】何故暫く足を停めなくてはならないかといふと、(明治初期の所謂有識者が皮相低級な歐米崇拜の濁流に浸された結果、日本の精神、日本の個性に顧みることなく、性急に西洋の機械と西洋の制度とを取り入れてしまつたので。)

「我等現代に生くる日本國民は、實にこの過渡裡に生れ、はぐくまれ、長じ、且つ教育され來つた者である。随つて混亂は我等の主觀に取つては、最早混亂では無い。寧ろ我等の生活の常態である。我等は混亂病に陥つて、混亂の裡にあつて、しかも混亂にあるを知らざるものである。この故にまた敢て混亂と混濁とを排して、整頓、秩序を持ち來さうとしないのだ。無論、混亂が若し全然無害のものであるならば、我等の周圍に、いかに混亂があらうとも、これを意に介する必要は無いかも知れぬ。し

かも余の見るところを以てすれば、混濁・混亂は、一般の國民生活に取つてばかりでなく、進んで我等の魂のいのちを取つて、最も恐しい危険の一つである。蓋し、いかなるいのちと雖も、その健かなる發展は、長期に亙る混亂の下においては、到底望まらるべきものではないからである。」(「やまとこゝろと獨逸精神」(二〇頁)による)

【獨得な日本文化とその精神】獨得な日本の文化と、その文化を生み出す根源の力たる精神。元來文化は主觀的精神と客觀的精神とを包含してゐるものであるが、作者は、客觀的精神、客觀化された精神(普通文化財と言はれるもの)のみを指してゐるやうである。

「如何なる道具と雖も、眞に程よき道具は、これを使はんがために作り出せる精神の極めて微妙・靈厚な性能に従ひ、これに適して工夫生産せられたるものである。然るにその作者・使用者の獨特微妙な性能は、具體的にこれを曰へば、常に形而上學的に且つ歴史的に制限規定せられたるもの、随つて單に一片の外物に過ぎざる觀ある機械・道具の類と雖も、その根柢には、獨特の歴史を背景

とするきはめて複雑微妙なる精神の躍動するものなのである。その最も善き、何人の眼にも著しき例は、我が日本刀である。あの魂の躍る日本刀は、やまとだましひの背景の上に始めて可能であつたのだ。随つて最も善き道具の使用は、或一定の歴史・傳説・國民性を前提とする。随つてまた多少とも有効なる道具・機械は、必ずその背後に、或種の心構へ——その道具を考へ出し、作り出すに至つた特殊な精神を豫想し、同時にこれをその背後に曳いてゐるものである。」(「やまとこころ」(一七頁—一八頁)による)

作者は「精神」を如何に把握してゐるかと言ふと、「歴史はその核心において人間の行ひの沈澱結晶せるものである。而して我等はこゝにこの行の主體即ち「行者」を人間の「精神」と名づける。即ち歴史を作るものは、先づ人間の精神である。

然るにこの人間の精神は、その根元に於て、自ら自らをつくつたものではない。寧ろその當初において神の手に出でたるものである。而して精神の源である歴史の神

は、この精神を一つならず二つならず、寧ろ數多つくれるものである。數多つくれるものなる以上、此等の多元的複數的精神は、各、相異なるものでなければならぬ。換言すれば、精神はその一つなる源泉より迸り出づる限り各、共通なるものであると同時に、その表現において各、各、獨得だ、獨自一箇だ。各、獨自一箇でありながら、しかもその間、類似近似の關係に立つものだ。かくして一國の歴史は、先天的に——先天的にはその構成の核心において——他國の歴史に近似しまたは遠隔する。國民性の類似相違の第一の原則は、實に國民精神そのものの近似遠隔である。」(「獨逸精神」(一〇五頁—一〇六頁)による)

【自覺】ジカク。(一)みづからさること。己れの價值・分際などを意識すること。(二)(佛語)みづから大悟徹底して、安心を得ること。(三)(佛語)三覺の一。阿羅漢の具するもの。(四)(哲學)(英 Appreciation)論理上、自己のいかなるもので、社會に如何なる關係を有するかを了解し、また宗教上、宇宙の實在たる神佛等といかに關

係するかを了解すること。宇宙の眞理を知つて、自己の行のその眞理と合一すること。小我を捨てて、大我に歸すること。

こゝでは(一)の意味である。

【焦點】セウテン。(英 Focus) 燒點。(一)(理)光線がレンズを透過して屈折し、又は球面鏡にあつて反射した後、相集り會する點。もと光線上、かゝる現象あるが故に、焦點といふのはあるが、廣義では、すべて曲線に關し、上記の様な性質のある點は、皆この名稱の下に包含せしめるのである。虚焦點、實焦點、共軛焦點。(二)注意・議論などの中心となる所。こゝでは(一)の意。

【獨得な日本文化とその精神とを、我等の自覺の焦點に於て見ねばならぬ】日本に於てのみ見出される特有な文化とその文化を生産せしめた精神とを、私達の最も明らかな、最も完全な自覺のもとに、見なほさなければならぬ。即ち、私達の十分に自覺した眼でもつて、日本に獨得な文化とその精神とを、見直さなければならぬ。

【藝術】ゲイジュツ。(一)學藝と技術と。わざ。技術。(二)(英 Art) 人生及び自然に觸れて生ずる人の感覺・情緒・氣分・感性等を、眞實に表現するもの。その表現の形式によつて、文學・美術・音樂・劇等に分れる。文藝。こゝでは(二)の意。

【日本の藝術は、實に日本國民性の驚くべき高き氣品と深さと美はしさとを物語るものである】日本の藝術は、日本國民性の眞に驚嘆すべき高尚な風韻品位と奥深さと優美さとを、さながらに物語つてゐるのである。即ち、日本の藝術を自覺した眼で眺めるならば、その藝術には我々國民精神の驚くべきほどの、高い氣位と深さと美はしさとが具現してゐることを掴むことが出来るのである。

こゝに獨得な日本文化とその精神とを語るに當り、何故藝術から始めたか、といふことは、参考欄の「原文省略」の條に補つてある所を参照せられたい。

【冷淡】レイタン。(一)花の色などの、淡(ハ)くさびしいこと。

白居易の詩に「白花冷淡無人愛。」

(三)深く心にとめないこと。熱心でないこと。同情心の無いこと。不親切。

こゝでは、(二)の意で、不熱心なこと。

【無關心】ムクワンシン。關心しないこと。關心とは、心にかゝつて、忘れられないこと。きがかり。

【共鳴】キウメイ。(英 Resonance) (一)物理)二つの發音體が、互に同じ週期を持つ單純音を、その固有音中にもつ時、その一を鳴らせば、その音波が、他の一つに當つて、これを振動せしめて、音を發する現象。共鳴作用。(二)互に感應して、感情の融合すること。強く同感の念を起すこと。他の著作を讀んで、作者又は篇中の人物と同感する様な場合にも使ふ。

こゝでは(二)の意。

【愛着】アイチャク。をしんで大切にすること。愛情。

【依然滿たされない或ものが残る】あらゆるヨーロッパの偉大な藝術をもつてきても、なほ我々日本人の心には、やはり何としても滿たすことが出来ない何物かが感じられる。即ち心から敬服するにはある物足らなさがある。

こゝでは(二)の意。

【それは深き心、魂の奥底深く包まれた圓滿自足の心である】それは深い心、言ひかへると、魂の奥底深く包まれ、それ自らで滿ち足りてゐて缺ける所のないそしてみづから自己に滿ちしてゐるといふ心である。

【圓滿】(エンマン)とは、(一)滿ちわたること。(二)滿ち足りて、缺けた所の無いこと。(三)佛語)圓妙であつて滿足すること。十界の一切諸法、條然として具足すること。

【圓足】(四)交際上、おだやかでかどだたないこと。

【自足】(ジツク)とは、みづから滿ちしてあること。みづから足れりとする事。

【圓滿自足の心】とは、作者の言葉に従へば、「自ら以外、何等他に求むるところなき心、自らの力と徳と美との美はしさを他に誇示表現するをさへ蔑む心、否、この蔑む心をさへ脱却超越せる心」である。

【脱却】ダツキヤク。(一)ぬぎはなつこと。すてさること。(二)ぬけ出ること。

こゝでは(二)の意。

【超越】テウエツ。(一)こえまさること。ぬき出ること。超

絶。超拔。(二)とびこえること。順序に拘はらず進むこと。(三)宗教)神と世界とを相即せしめず、神を世界から離れて存在するとなす意味。(内)在の對。(四)哲學)經驗又は認識の範圍以外の意。(先)驗(内)在の對。

こゝでは(一)の意。

【絶對】ゼツタイ。(一)何者にも制限されないこと。又、何ものにも依らずして獨立すること。(二)何等の條件も附隨しないこと。條件附でないこと。(三)他に比較すべきものがないこと。他に對立するものがないこと。(四)一切の現象に超越すること。

こゝでは(二)の意。

【絶對的に内なる、内に滿ち内に憩ふ内的世界】全く自由な内の心の世界、即ち何等他に求むる所もなく、他に誇りやかに表現することをさへ蔑む心、否々、かゝる蔑む心さへ脱却し超越して、心はそれ自身で滿ちあふれ、それに安息し滿足する魂の世界。更に言へば、全世界は毀れ、碎け、焼け、落ち去つても微動だにもしない心、既にかゝる強さそのものを超越した心の豊けさ、静けさで

あり、一撃にこの世界をも打碎くべき力を湛へて、これを外に示すことなく、滿を持して放たぬ心、その恐しい程の強い力の上に坐して、しかも山湖のごとく靜かに動かない心である。

【強さそのものを超越せる心の豊けさ、静けさ】強さ、即ちたとひこの全世界が毀れ、碎け、焼け、落ち去つてしまはうとも、微動だにもしない強い心を現にしつかりと持つてゐながら、この強さそのものを超越した、そこに見られる心の豊けさ、静けさ。

【深遠】シンスキ。奥深いこと。幽邃。深遠。

【幽玄】イウゲン。(玄は理の深遠にして微妙なる意。)奥深く微妙であつて、容易に知ることが出来ないこと。趣が深く、味はひの盡きないこと。

徒然草に「詩歌にたくみに、絲竹にたへなるは、幽玄の道。」

歌袋に「鴨長明のいへらく、幽玄は詞にあらはれ、姿に見えぬ景氣なるべし。」

謡曲、放下僧に「入つては幽玄の底に動じ、出でては

三昧の門に遊ぶ。」

【湛へ】タ、へ。塞き止めて満たす。入れ満たす。こゝでは内に静かに持つてゐる、こもらせてゐるといふ意。

【強き力の上に坐して、しかも山湖のごとく静かに動かぬ心】強い力即ち一撃でこの世界をも打碎くことの出来る力を内にこもらせ、しかもその力をさへ外に向つて示すことがないといふ奥底のしれぬ恐しさ、それこそ満を持して放たないといふ恐るべき力であり、そのむしろ恐ろしいとも言ふべき強い力を底に包みこんでゐて、しかもその心の姿は山の湖の様に静かで動かない心。

【飛鳥】アスカ。明日香。飛ぶ鳥の「あすか」と續ける枕詞から轉じて、飛鳥の二字を充ててゐる。元來は地名で、今の大和國高市郡飛鳥村及び高市村の附近。奈良遷都以前に允恭・顯宗二帝の皇居及び推古天皇から持統天皇まで（孝徳・天智の二帝を除く）百餘年間の岡本宮・板蓋（イタ）宮・川原宮・淨見原（キヨミ）宮などがあつた處。こゝでは、推古天皇から持統天皇までの百餘年間の時代を指す。一般の歴史では推古朝と言ふが、美術史上では

飛鳥朝といふのである。

【奈良朝】ナラテウ。元明天皇の和銅三年三月から桓武天皇の延暦三年十一月山城國乙訓郡長岡宮に遷都し給ふまで、元明・元正・聖武・孝謙・淳仁・稱徳・光仁の七代の天皇が、大和國奈良に都をお置き遊ばした時代をいふ。

【鎌倉時代】カマクラジダイ。後鳥羽天皇の治承四年源頼朝が幕府を鎌倉に開いてから、後醍醐天皇の元弘三年新田義貞が北條氏を滅亡した時までを言ふ。

【佛像】ブツザウ。佛の眞影。彫像・鑄像・畫像に通ずる。佛は優填王に始めて之を造らせ、住持の佛寶とさせ、在世滅後の四衆をして眞身の想を以て之を信敬せしめた。彫像始、（増一阿含經二十八）佛一夏初利天に昇つて母の爲に説法す、拘翼國の優填王、佛を思念し、旃檀を以て如來の像を造る。高さ五尺。」

鑄像始（増一阿含經二十八）波斯匿王、優填王の彫像を聞きて、乃ち紫磨黄金を以て佛像を造る、亦高さ五尺。時に閻浮提内、始めて二像あり。」

畫像始（大唐内典錄）「漢の秦景、使して月支國に還

り、優填王の旃檀像を得、第四の畫像様を師とし、來つて洛陽に至る。帝勅して之を圖せしめ、西陽城門及び顯節陸上に於て供養す。爾より素丹今に流演す。」

【神々し】カウんし。ものさびて尊く感ぜられること。尊くおごそかなこと。神さびてゐること。源氏物語の桐の卷に「くろき鳥居どもは、さすがにかうがうしく見えわたされて。」

【宗教】シウケウ。神佛などを崇拜し、信仰する一定の組織。即ち神道・佛教・耶蘇教・回教などの類。

【しかく深き神々しき宗教的精神をさながらに呼吸する彫刻があらう】かくの如く、深い神々しい宗教的精神そのまゝを表現してゐる彫刻があらうか。

彫刻そのまゝが、深い神々しい宗教的精神を呼吸してゐるやうに思はれる、といふは、更に言へば、佛像彫刻をじつと見つめてゐると、深い神々しい姿、絶對者に歸依してゐる姿、否自らが自らに安心立命してゐる姿、内に満ち内に憩ふ内的世界、強さそのものを超越せる心の豊けさ・静けさ、恐ろしきまでに強き力の上に坐して、し

かも山湖のごとく静かに動かぬ心の姿がいきづいてゐるやうに感ぜられるといふ意である。

【バロック】バロック建築。Baroco Style. バロック建築は歐洲十七世紀の建築を指すと考へてよい。十六世紀を頂點としたルネサンス建築が時代の推移と共に次第にその形式を崩し、外容上の豊富と外面裝飾の蓄積と奔放極まりない表現とを示すに至つたものが、バロックの建築である。ルネサンス様式を粗野にし、これを誇張化したものがバロックである。



バロック時代の至つて建築は古典時代または文藝復興期盛時の建築に見るやうな、素朴で明快典雅な形式と内容とを失ふに至つたが、その代り極めて繪畫的な、また力強い記念性に

富む表現効果を達成することに成功した。繪畫的効果の強調は、バロックの様式の最も大きな特徴の一つであるが、極端にそれが重視された結果は、建築を著しく不安錯雑濃厚なものとなすに至つた。宮殿や教會堂の建築の正面は、その確乎とした權威ある安靜を失ふに至り、その線は徒らに不安定なものとなり、破風や窓飾も軟弱なまた鈍重な曲線で蔽はれ、突然不調和に切れる輪郭線で飾られるやうになつた。當時の人々は驚愕することにより、また強烈な刺戟を受けることによつて、彼等の美的感情の満足を経験したのである。この驚愕といふ感情に最もよく適合し調和した藝術様式としてバロック様式をみると、我々はこゝに始めてこの本體に觸れることが出来るのである。

【ロココ】 Rococo. フランスのルイ十五世時代の裝飾様式に與へられた名稱。ロカイユ様式 Style Rocaille とも呼ばれる。大體一七二三年に始まつて一七六〇年頃まで流行した。様式の特徴はロカイユを基調とする。ロカイユは人工の巖穴を形造る裝飾的な岩の斷片または裝飾的に用

ひられた貝殻の表現を意味する言葉であつたが、十八世紀に自然科学博物館や貝殻蒐集の流行に伴つての裝飾形態が當時の貴族の趣味に投じ、特殊の「ロカイユ」を生んだ。貝殻の形態を保有してゐるものもあるが、多くは貝殻から暗示された曲面や曲線を用ひ、面もその施羅を誇張してゐる。その結



果CやSを引伸ばした形の曲線の空想的な組合せになつてゐる。このロカイユの曲線は屢々アカンサスと結びついたり、カルトウーシユを抱いたり、リボン巻いた細莖の束で縁取られたりして、その裝飾的效果を一層煩雜にした。小型の貝殻の形や有翼のカルトウーシユを伴ふことも多い。かくの如きロカイユは建築の細部、殊にア

ーチのアグラーフ(額飾)、煖爐や露臺の持送りに適用され、また小工藝品の基本形態ともなつた。ロカイユを用ひない場合でも、ロココの作品は施羅の多い曲線の饒多な構成を特色とするのである。

【室町時代】 ムロマチジダイ。足利時代。

延元三年八月、足利尊氏が始めて幕府を京都に開いてから、十五代將軍義昭の時、織田信長と隙を生じ、天正元年その逐ふ所となつて亡びるまで、凡そ二百三十六年の間をいふ。

【數奇】 (一)スキ。風流・文雅の道を嗜むこと。特に和歌又は茶道などに心を寄せること。

(二)スウキ。ふしあはせ。「數」は運命、「奇」は耦の對で、相合はないこと。

【幽雅】 イウガ。奥深く、もの靜かみやびやかなこと。

【什寶】 ジフハウ。寶として秘藏する什物。たからもの。什物(ジフモツ)とは、(一)うつは。道具。器物。(二)寶物。

【幾多の名工の鍛へた日本の刀、日本の鏢に匹敵するものがあらう】 こゝの部分の解釋には、参考欄の「原文省略の箇

所」を参照していただきたい。差し當つて緊要なものを次に引けば、

「無論、藝術として魂のないものはない。名あるヨウロツバの藝術は、悉く或魂を表現せるものだ。しかもそれは實に或魂を外に向つて表現せるものだ。眞に日本的な優れた藝術は、これに反して、人間の魂、それも最も深い人間の魂を籠めたものである、深い内なる魂の入つたものなのである。實にこゝに、日本藝術の傑出せる特殊性がある。」

【勁烈】 ケイレツ。つよくてはげしいこと。

【崇敬】 スウケイ。(シュウケイ)。あがめうやまふこと。尊敬。

【暗黙】 アンモク。目にも見えず、耳にも聞えないこと。こゝでは、何等意識的、積極的ではなく、自然にといふ意。

【神社】 ジンジャ。神社とは、我が國の神祇を鎮祭し、社殿・境内・氏子または崇敬者を有し、神職を置いて公の祭祀を行ひ、一般公衆の參拜に供するものをいふ。こは

我が國體と同様、世界に比類なき最も麗はしい且つ尊い制度で、建國と共に起り、後國體の精華の一となつて今日に及んでゐるのである。古來皇國を神國といひ習はれてゐるその意は、神代の昔多くの神々によつて肇造せられ、しかもそれ等神々達の永久の守護あらせられる國の意で、その初め建國の祖神たる諸冊二尊の御子天照大神及びその御末たる皇統を中心とし、神代以來これにお仕へした諸々の神々達の子孫はやがて忠良な臣民として代々の天皇にお仕へしたので、國家の組織は、皇室を總本家と仰ぎ奉る一大家族、一大血族團體といふべきで、それ等神々は國家建設の大功勞者として子孫臣民のために恩恵を垂れられると共に、日本臣民の遠い祖先に當らせられるのである。故にその恩顧のため、またこの國家を永遠に守護あらせられんことを希ふがために、こゝにその神靈を鎮め奉る神社といふ形式が始められたのである。その起原は勿論神代悠遠の昔に存する。長くも皇室に於かせられては皇祖天照大神を伊勢の皇大神宮に奉齋あらせられ、臣民の家々にあつては、例へば天照大神に

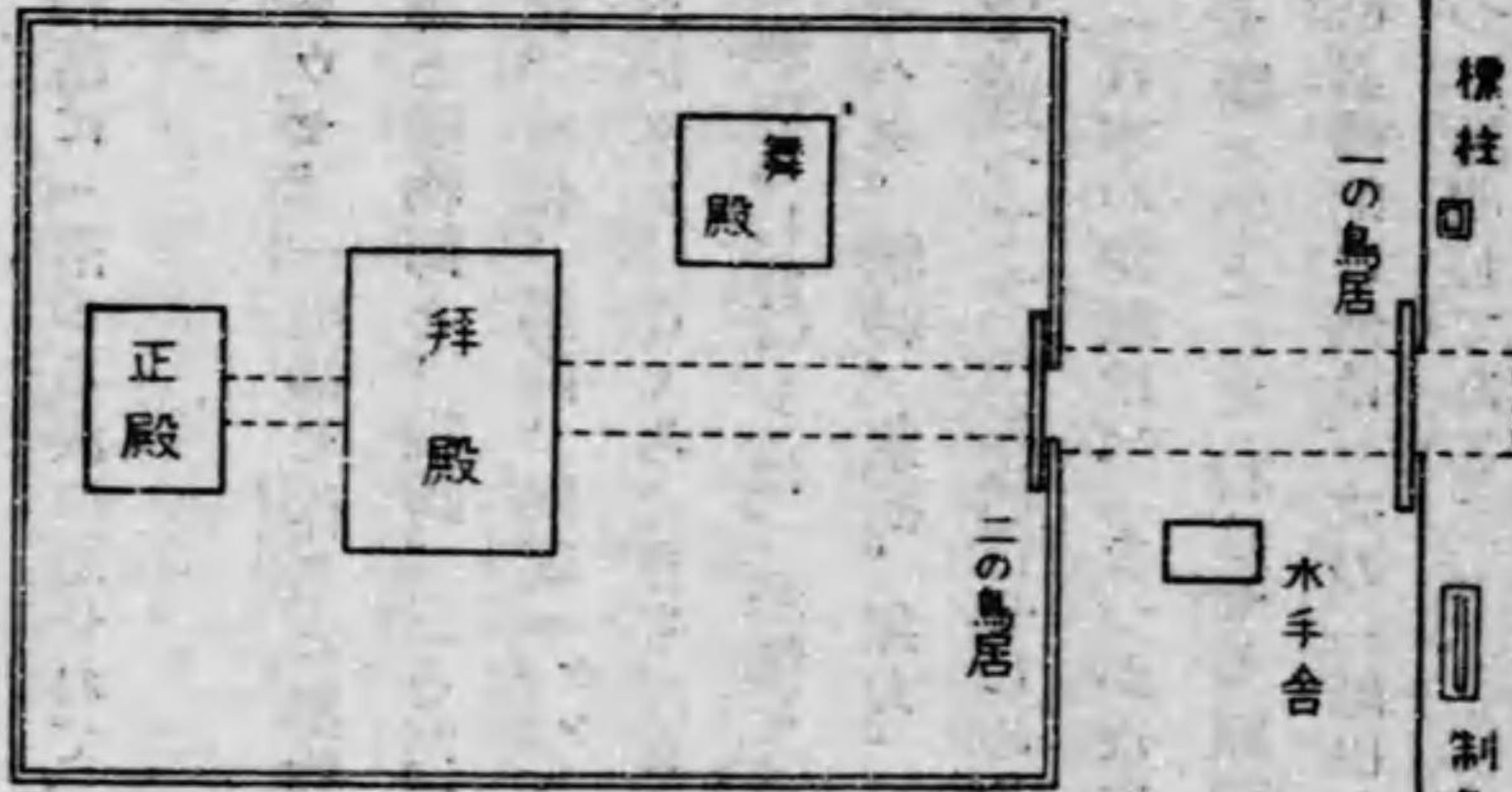
奉仕して功績を樹てられた天兒屋根命は中臣氏即ち藤原氏の祖神として河内の枚岡神社に祀つてゐる。かく神社はその起原が古いのみならず、神を敬し、神社を祭祀する風儀は、皇國倫理道德の大本である。我が父祖に對する考へを以て祖先を祀り、この祖先に敬事する觀念は、移して直に神々に仕へ奉る心持となり、敬神と崇祖との二つのものの間に隔てのない極めて微妙の働きが潜み、即ち敬神崇祖は實に神社奉齋の大本たるに止まらず、同時に皇國道義の根源となり、國民道德の大精神となるのである。そしてこの大精神の上に我が國家の基礎が据ゑられてゐるのであつて、古來この精神を「惟神の道」と傳へてゐる。神社は實にかゝる意義を有し、我が國家と離るべからざる緊密なる所以を藏するのである。

【神社の建築】

我が國惟神の道に従ひ、神を祭祀する建築、並に附屬設備一般を神社といふのである。その建築は純正の日本固有の建築であつて、遠き御祖の在すがまゝの社殿を造營するのを根本義とする。伊勢神宮はその端的な實例であ

り、今日その建築によつて上代の建築をさながらに拜み得ることは、全く世界無比の奇蹟で、光輝ある國體と國民思想との結果に他ならない。また出雲大社が大國主命の天の日隅の宮造のまゝの平面を保有し、形體もまた比較的純正なのは尊しとも尊い。その他大鳥造・住吉造・神明造など、みな他國の建築の影響を受けぬもので、すべてが上代の住宅建築を基調とし、材料は植物性として、曲線を交へず、色彩を施さず、以て高天原に千木高知りたる森殿を原則とする。佛教傳來に伴なふ大陸建築の影響は神社にも及んだが、我が健全な拜神思想は能くその長を採り、その短を補ひ、少しも大陸建築に壓倒されず、曲線の優美、色彩の華麗、細部の豊富を添へて却つて變化ある特殊の國民的様式を大成した。平安初期までには大成したと考へられる春日造・流れ造・八幡造・日吉造など、これに屬する。その他香椎造・祇園造・入母屋造・吉備津造・權現造など、漸次大成した様式である。但し近世の日本建築が全般的に衰落の傾向を生じたのに推され、奇矯なるか、または萎縮せるかの傾向を生

じ來つたが、明治以後は、建築史家の歴史的研究をもつて、愈々神社の本質が明らかにされると共に、今後の神社造營の方針も確立し、内務省には神社局あつて官幣社の營繕に従事し、國幣社以下、また嚴密な注意の下に營繕を行ひ、以て神社建築史上二紀元を劃して益々その發達を促さうとする状態にある。神社の大多數が流れ造を採つてゐるのを見ると、流れ造が造り早くして、しかも最も國民に歡迎せられたことが





判る。今日では官國幣社の各階級に對して、神社規模の標準を神社局で決定實施してゐる。

最も完備した神社は、本殿・拜殿・祓殿・祝詞舎・神饌所・神樂殿・寶藏・祭器庫・神既舎・手水舎・社務所・樓門・鳥居・廻廊・垣等を備へてゐる。

【莊嚴】サウゴン。おごそかでいかめしいこと。りつば。芭蕉の句に「莊嚴の柱によりてねむの花」

【宗派】シウハ。一、宗門の分派。二、流儀。流派。こゝでは一の意。

【宗團】シウダン。宗教團體。

【浸潤】シンジュン。一、しみとほつて濡れること。二、次第にしみこむこと。浸潤の語(リシ)。水が物を漸次に浸す様に、徐々に人を諷すること。

論語の顔淵篇に「浸潤之譖、膚受之愆、不行焉、可謂明也已矣。」

太平記に「浸潤之譖、膚受之愆、事起三千小禍、皆速大。」

【冥々】メイメイ。くらいさま。よく見えぬさま。

保元物語に「落つる涙に道昏れて、行く先、更に冥々なり。」

【陶冶】タウヤ。一、陶器を作ると鑄物を鑄ると。陶鑄。二、陶器師と陶物師と。陶鑄。三、そだてること。養成。育成。陶化。教化。鑄陶。陶甑(タウ)。陶薰。

【心膽】シンタン。こゝろ。きもだま。魂膽。「心膽を寒からしむ」とは、恐怖を懐かしめること。

【氣魄】キハク。精神。氣概。氣力。

【紅の血潮と躍つて大事を決行せしめる原動力であつたのである】(日本の佛教は、まづかな血潮となつて躍り、大事業を斷々乎として行はせる原動力であつたのである。この具體的な例は、次の「織田信長」と「三浦道寸」とによつて説明してある。

【今川義元】イマガハヨシモト。今川氏親の第三子。初め僧となつたが、後、還俗して、兄、氏輝の封を襲ぎ、威を駿遠參の間に振つた。永祿三年(二二二〇)織田信長と桶狭間に戦つて敗死した。年四十二。

【織田信長】オダノブナガ。小字は吉法師。資性剛勇果斷

で、細節に拘らなかつた。永祿三年今川義元を桶狭間に破つてから、威名が天下に鳴つた。正親町天皇の勅を奉じて、海内を平らげようとしたが、天正十年(二二四二)京都の本能寺で、その臣明智光秀に弑せられた。年四十九。従一位・太政大臣を贈られた。(参考2参照)

【清洲の城】キヨスのシロ。尾張國西春日井(ニシカ)郡清洲町にあつた城。五條川の西畔にあたる。斯波氏が初めて、これを築き、織田信長がこれを修築した。關ヶ原の役後、家康はその四子忠吉をこゝに封じたが、名古屋城が成るに及んで、廢墟となつた。

【籠城防禦】城にこもつて敵を防ぎ守ること。「籠城」(ロウジャウ)は、一、敵の圍みを受けて、城にたてこもること。二、家にこもつて、外出しないこと。

【斷乎】ダンコ。思ひ切るさま。斷然。きつぱり。

【先君の遺誠】父上の残し給うたいましめ。「遺誠」(シカイ)は遺戒とも書く。後人のために訓戒を遺し留めること。又、その訓誡。ゆゑか。遺訓。

徒然草「……とぞ、九條殿の遺誠にも侍る。」

【敦盛】アツモリ。こゝでは、謡曲の一。平敦盛の幽霊が、蓮生法師(熊谷直實)に逢つて、合戦の物語をし、遂に生前の遺恨をひるがへして成佛するよしを作つたもの。

【祐筆】イウヒツ。佑筆。右筆。一、古、貴人の傍にあつて物を書くことをつかさどつた役。かきやく。書記。筆吏。二、學問にたづさはること、又その家すぢ。平家物語に「われ右筆の身にあらす、ぶようの家にうまれて」

【太田牛一】オホタウシカズ。尾張國春日井郡の人。はじめ織田信長に仕へ、後に豊臣秀吉に仕へた。信長記・天正記等を著はした人である。

【化天】ケテン。化樂天。梵語 Nirmahoraya の譯語。六欲天の第五、兜率(トツ)天の上三十二萬由旬、須彌山(シユミ)からすれば、六十四萬由旬の處にある。こゝに生れるものは、みづから五塵を化して、みづから娛樂し、壽八千歳に至るといふ。化自在天。

【五塵】ゴチン。煩惱の種となり、衆生の眞性を汚すべき五種のもの、即ち色・聲・香・味・觸。五境。

【一度生を得て、滅せぬ者のあるべきか】一度生をこの世に得たものは、即ちこの世に一度生れて来たものは、死なない者があらうか、誰も必ず死ぬのである。どうせ死ぬるときまつてゐるならば……といふ心持である。

【法螺吹け】ホラフケ。法螺を吹くとは、(一)法螺貝を吹きならすこと。(二)大言を吐くこと。虚言を言ふこと。こゝは(一)の意。

【法螺貝】はホラガヒ。寶螺貝。(一)動物。腹足類に属する軟體動物。殻は長さ一尺四五寸に達し、重厚であつて、圓錐形を呈する。螺層には、圓くて大きな隆起がある。殻口は卵圓形であつて、前端が伸び、厚い蓋を具へてゐる。表皮には、紅・褐・白など種々の波動状の紋を有し且つ疣状の突起が散生してゐる。我が國では専ら琉球



に産する。肉は食用に供する。(吹螺・椋尾螺)(二)この貝殻の頂に孔を穿つて加工し、吹き鳴らすに適當なやうにしたもの。古、軍陣に用ひ、又は山伏などが山人のときに

用ひた。かひ。

【具足】グツク。(一)具はり足つて、十分なこと。揃つてゐること。(二)伴なふこと。具すること。同行。(三)諸道に於ける主要な道具。例へば射手の具は弓矢、法師のは經文・念珠の類。(四)強飯に添へる盛物。(鎌倉時代の語)。(五)武士の用ひる主要な道具。甲冑。こゝは(五)の意。

【形而上學】ケイジジャウガク。形而上に關する學問、即ち純正哲學、超物理學など。形而上とは、無形で、心のみ知り得るもの、即ち道・道理・道德・學問・靈魂・神などに關すること。精神的なる物事の意味である。

【形而上學的思想】とは、具體的には、印度傳來の東洋共通の思想、諸行無常の理、或はヘラクレイトスの萬法流轉の思想、などをさすのである。

【端的】タンテキ。(一)事の明白なさま。品字箋に「端的、言ニ其事之端倪的然可見也。」(二)まのあたり。てきめん。てつきり。(足利時代の頃から言ひ初めた語)。

【經緯】ケイキ。(一)堅と横と。たてよこ。(二)南北と東西と。大戴禮に「地東西爲緯、南北爲經。」(三)組織を治めと

とのへること。「天下を經緯す」「禮は、上下の紀、天地の經緯なり」(四)入組んだ事情。いきさつ。(五)地)經線と緯線と。また經度と緯度と。こゝでは(一)の意。

【意味深長】イミシンチャウ。意味の奥深いこと。

論語の序説に「程子曰、頤自三七八、讀論語、當時已曉文義、讀之愈久、但覺意味深長。」

【概念】ガイネン。多くの觀念中から共通の要素を抽象して、綜合した一つの觀念。

例へば松・杉・檜などから抽象して、木といふ概念を得る類。抽象的觀念。

【生ける行爲の上に於ける綜合統一】たゞ單に概念の上で、即ち自分の心の中でのみ綜合したのではなくして、ピチ／＼と生きて動いてゐる行爲の上での綜合統一、即ち、行爲として具現すること。人は概念の上では綜合することはたやすい。しかしそれは死んでゐる。これが實際の行動・行爲に具現され、實踐の姿となつて顯現される時に、始めて生きてゐるもの、眞に價値のあるものと

言へるのである。人は、意志し實踐することによつてのみ、眞に生きた人の名に價するからである。

【諸行無常】シ・ギヤウムジャウ。梵語 Anicca vata sikkhara の譯語。萬物は常に轉變して、暫くも常住しな

こと。平家物語に「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常のひびきあり。」

【印度】インド。亞細亞洲の南部にある大半島。住民は、四階級に分れ、皮膚は褐色。宗教は佛教・印度教・マホメット教等を主とし、基督教も行はれる。英國の領地であつて、英國王は印度皇帝をも兼ねてゐる。天竺。前印度。

【傳來】デンライ。外國から、又は先祖から傳はり來つたこと。又、そのもの。

【東洋】トウヤウ。亞細亞洲の東方の泛稱。「西洋」の對。

【流轉】ルテン。(一)佛語。生死因果の斷えず輪轉して窮極しないこと。「流轉生死」、「流轉輪廻」とは、衆生が無明の惑ひのため

生死の界を流轉して窮りのないことを、車輪の廻つて盡きないのに譬へていふ語。

(二) (リウテン)。流れ移ること。うつりかはること。遷移。こゝでは(二)の意。

【希臘】ギリシャ。(羅 Grecia 英 Greece) 歐羅巴洲の南部バルカン半島の一端に位する王國。首府をアテネ (Athens) とす。

【ヘラクレイトス】(英 Heracitus) 又は Heracletus) 前五四四頃一四八四頃の人。ギリシャの哲學者。小アジアのエフェリスの人。貴族の家に生れた。民衆を蔑視し、諸先輩の哲學者たちを罵り、孤高な生涯を送つた。その説は簡潔な箴言を以て語られ、その難解の故に「暗き人」(希 Hoskotes) と呼ばれた。火を以て世界の原質となし、火は下つて水・土となり、土・水は再び上つて火となる。宇宙の真相はかゝる生成と融解との相反する過程の入交る絶えない流轉である。存在・同一性は、かゝ



る反對の共存、矛盾の統一によつて生ずる外見上の假象にすぎない。「萬物は流轉す」「人は再び同じ流に入るを得ず」等はかゝる思想を示してゐる。彼は又この流轉を支配する嚴密な世界法則(ロゴス)の存在を確信してゐた。彼のこの極めて獨創的な思想は後世に大いなる影響を與へた。

【喝破】カッパ。(一)大聲を發して、他人の言を説破すること。(二) 邪説を排し、眞理を説き明かすこと。

こゝでは、言ひ盡くしたといふ意。

【截然】セツゼン。(一)きりたつさまに言ふ語。(二)區別の明らか立つたさまにいふ語。はつきり。判然。こゝでは(二)の意。

【爾餘】ジョ。自餘。これから外。そのほか。その他。源平盛衰記廿三、入道奉勸起請條に「入道と宗盛と父子二人、院の御前に参りよりて、自餘の人々をば被除て。」

【厭世】エンセイ。世の中を厭ふこと。この世をいやに感ずること。「樂天」の對。

飽照の詩に「情高不戀俗、厭世樂尋仙。」

【隱遁】イントン。隱遯。世事を遷(カ)れて山野などに隠れ住むこと。齊書の孔稚珪傳に「有隱遯之懷。」

【峻別】ジュンベツ。きびしく分けること。はつきりと分けること。全然別箇のものとする。

【桶狹間】ヲケハザマ。小丘相連つてゐる間に狹まつて、地勢が桶のやうであるから、かやうにいふ。尾張國知多郡有松村の大字。その一部にある屋形狹間(田樂窪ともいふ)は、永祿三年(二二二〇)九月、織田信長が、今川義元を襲ひ、奇捷を博した地として有名である。

【危急存亡】キキフソンバウ。存するか亡びるかといふ、極めて危い場合。

蜀志の諸葛亮傳に「此誠危急存亡之秋也。」

【果敢】ク、カン。果斷に物事を敢行すること。王安石の文に「果敢之氣、剛正之節、至晩而不衰。」

【生者必滅、會者定離】シヤウジャヒツメツ、エシヤヂャウリ。生あるものは必ず滅び、會ふ者は必ず離れるといふこと。

保元物語、法皇崩御の條に「有爲無常の習ひ、生者必滅の掟で。」

ふこと。

「盛者必衰」(シヤウジャヒツメツ)は盛んな者は必ず衰へる時があるといふこと。平家物語卷十に「生者必滅會者定離は、浮世の習ひにて候。」

遺教經に「世皆無常、會必有離。」

【避難】ヒナン。災難をさけること。難から遠ざかること。【苟安】コウアン。偷安(トウアン)。かりそめに一時のやすきをむさぼること。一時しのぎ。一寸のがれ。

【所謂】イハユル。世に言はれる。常に言ふ。

【明智】メイテツ。聰明にして、事理に通じてゐること。又、その人。

書經の説命に「知之曰明哲、明哲實作則。」

【蜉蝣】フイウ。(一)かげろふ。(二)かげろふは朝に生まれて夕に死ぬといふことから、身のはかないさまに譬へていふ。謡曲、千手に「命は蜉蝣の定めなきに似たり。」

「かげろふ」とは、(一)トンバウ(蜻蛉)の古名。(二)昆蟲類中、擬脈翅類、かげろふ科に属する一種。蜻蛉に似て小さい。四翅は膜質で、褐色部がある。體の長さには、等しい長さの三本の尾毛を具へてゐる。殊に夏日の黄昏に河畔・湖上に群飛する。幼蟲は水中に住し、兩三年で漸く成蟲となるが、羽毛を生じ、産卵した後、數時間で死んでしまふ。かぎろふ。  
こゝでは(二)の意。

【幽遠】 イウエン。奥深く遠いこと。幽深。

【高踏】 カウタフ。高踏(カウタウ)。(一)遠く行き去ること。(二)官位に戀々としてゐず、俗間を遠ざかつて氣高く身を處すること。

【脱俗】 ダツゾク。俗氣を離れてゐること。凡庸から超越してゐること。

【乾坤一擲】 ケンコンイツテキ。天下を賭して、いちかばちかの勝負を決行すること。

韓愈の詩に「誰勸君王回馬首、眞成一擲賭乾坤。」乾坤とは、(一)あめつち。天地。(二)いぬるとひつじさる。

西北と西南。こゝは(一)の意。

【自適】 ジテキ。自身の心のまゝに楽しむこと。

漢書の高鳳傳に「潛心篤行、屢辟不應、以漁釣自適。」

【出家】 シュツケ。(一)家を出ること。(二)家を出て佛門に歸すること。(三)僧侶(ソウリ)。  
こゝでは(三)の意。

【出家具戒(ダカイ)】 出家の身で、正信を起し、正道を修して、戒行を具足すること。

【出家得度(トクド)】 出家して、官から度牒を得て僧となること。

【出家・士・犬・畜生】 農工商の人の相手に取り難いものを並べて言ふ語。

【沙門】 シモアン。(梵語 Stramana の約)。勤息などと譯する。善を勤め惡を息める義である。

【シャム】 暹羅・沙室。(英の Siam) 亞細亞洲の東南部なる印度支那半島の中部にある王國。首府は盤谷(バンコ)。

【ビルマ】 緬甸。バルマ。バアマ。(英 Burma) 亞細亞洲

印度支那半島にある舊獨立國。今は、英領印度に編入せられて、その一州となる。首府をラングーン(Rangoon)といふ。

【優柔】 イウジウ。やさしくものやはらかなこと。活潑ではないこと。

【優柔不斷】 やさしくものやはらかで、決断のないこと。

【高邁】 カウマイ。衆にすぐれてゐること。けだかいこと。

【行藏】 カウザウ。すゝみ出て道を行ふと、退いて隠れてゐると。

論語の述而篇に「用之則行、舍之則藏。」

【煩惱】 ボンノウ。佛語。情欲・願望・瞋恚・愚痴等が心を煩はし、身を惱ますこと。

【執着】 シフチャク。物事に深く思ひ入ること。執心して思ひ離れないこと。

【飽くまで地を匂うて塵を吸ふの嫌なからしめ】

どこまでもどこまでも煩惱に取りついてゐて、恰も地をはつて塵を吸ふやうな浅ましき、いやらしきをなくさせること、即ち、思ひきりよく諦めて、毅然として立ち、捨つべき時には一切のものを捨て去つてしまはせることをいふ。

【大乘的精神】 大乘佛敎の精神。「大乘」(ダイジ・ウ)の

「大」は、法體の廣大無限にして、一切萬有を包含することを言ひ、「乘」は、佛の所説の教法の、衆生を運載して生死を超越し、涅槃の彼岸に達せしめることをいふ。小乘に對するもので、佛敎の深玄の義理を説くものである。

【小乘(セウジ・ウ)】とは、聲聞・緣覺の修めるもので、大乘の高尙・深遠なのに比して淺近な教理をいふ。五戒・十善を修して四趣を脱離するを旨とするが、自利のみを説いて利他を言はない。修行の時間も大乘に比して小であるから、その果も佛果の様に廣大無邊なものではない。

【概念的構成】 ガイネンテキコウセイ。單に概念としてのみ構成されたといふ意。

【構成】とは、かまへつくること。組み立てること。こし

らへること。

【三浦道寸】 ミウラダウスン。三浦介と稱し、相模の三浦地方の豪族であつた。その後裔は三浦淨心茂信で、小田原の北條氏に仕へた。

【最期】 サイゴ。(一)最終の時。をはり。はて。(二)命の終はる時期。いまはのきは。まつこ。臨終。  
こゝでは(二)の意。

【辭世】ジセイ。(一)この世を辭すること。死ぬこと。身まかすること。(二)死ぬ際に遺す詩歌など。絶命の辭。  
こゝでは(二)の意。

【北條早雲】 ホウデウサウウン。北條長氏。

小田原北條氏の祖。もと伊勢にゐて伊勢氏といつた。初の名は氏茂。通稱は新九郎。出家の後、早雲と號した。沈勇大度にして智略があつた。はじめ伊勢國から駿河國に来て、親戚今川氏に依つたが、やがて關東八州を併呑せんと欲して東行し、遂に伊豆國を平定して、葦山に居り、小田原を取り、連年上杉・三浦の諸氏を攻めて相模國を略した。永正十年(一一七三)卒した。年八十八。

【三浦】 ミウラ。三浦半島。武藏相模兩國の國界から南方に突出し、東方、房總半島と相對して、東京灣を扼し、西方、伊豆半島との間に相模灣を擁する半島。大部は相模國三浦郡に屬し、横須賀・浦賀・三崎(ミサキ)・葉山等の名邑がある。



三浦半島の南端にあつて、南方城ヶ島に對し、その間を以て港灣とする日々東京往復の船便がある。

【油壺】 アブラツ

ボ。神奈川県三浦半島西岸の小灣。外海の巨濤もこの灣に及ぶことなく、灣はいつも油を流したやうに穏かで、一種神秘的な色を湛へてゐる。灣内に油壺驗潮所(明治廿七年創設)があり、牡蠣の養殖が行はれる。又油壺灣と小網代(ゴア)との間に突出した岬頭には三崎臨海實驗所

がある。

【油壺の海城】 今は城山といふ、別名は寶藏山。北條山ともいふ。里俗によれば、鎌倉幕府の盛だつた頃、山莊を構へたのはこの地だらうといふ。東鑑には、三浦山莊、三崎御所などと記し、頼朝及び實朝が屢、爰に逍遙して、小笠懸などがあつたことが見えてゐる。海岸の高丘で、佳景の地であるから、その舊跡であらう。城郭を築いたその始は分らない。永正の頃は三浦道寸の持城であつた。五代記によれば、この頃道寸の持城で、道寸が滅亡の後、早雲が再興したといふ。小田原記に道寸の滅亡を永正十三年とし、早雲が築城した如く記してゐるのは誤である。【討つものも討たるものもかはらけよくだけて後はもとの土くれ】 敵味方となつて命のとりあひをしてゐるが、考へて見れば、相手を討ち殺すものも、又相手から殺されるものも、恰も土器のやうなものであつて、死時の遅速があるだけだ。死んだら、一樣に土くれになつてしまつて、何の差別もないものであるとの意。

【一味一樣】 同じ仲間といふ意。

「一味(イチミ)は、(一)一つの味。一品。(二)味方すること。同じ味方。徒黨。同志。(三)佛語。佛の説く所。時に従ひ、機に應じて多様ではあるが、結局同一の旨に歸すること。」「一樣(イチヤウ)は、(一)事物が變化することなく、常に同一の有様であること。同様。(二)二つ以上の物が、互ひに似寄つてゐること。

【偏執】 ヘンシツ。かたいちなこと。偏見を固持すること。偏固。偏窟。

砂石集に「偏執・我慢を存するは、小智・愚鈍の致す所也。」

こゝでは、敵味方と互に分れて自己の方を固く守つてゐるといふ意。

【認識】 ニンシキ。(一)みとめ知ること。(二)獨 Erkennen) 普遍的に妥當する、即ち眞理性をもつ思惟。

こゝでは(一)の意。「この認識の上」とは、敵も味方も、討つ者も討たれる者も、元來一味一樣の、隔てのないものである、といふことをちやんと知つてゐながら。

【尙その幻の世に生くる限り、悪戦苦闘を辭さないのである】なほ、その者が夢や幻の様にはかないこの世に生きる間は、生きてゐる以上は、自己の正しいと信じた所に向つて、自己の與へられた使命に對して、運命づけられた自己の境遇に於いて、最善の努力をなし、死力を盡くして矢盡き刀折れるまで悪戦苦闘をやめないのである。

【劍戟】ケンゲキ。(一)つるぎとほこと。又、武器の總稱。(二)たゝかひ。戦争。こゝでは(一)の意。

【親族】シンゾク。親屬。(一)みより。やから。親類。縁者。親戚。(二)(法律)六親等内の血族・配偶者及び三親等内の姻族の總稱。こゝでは(一)の意。

【親等】とは、親族間の親疏の等級。直系親は親族間の世數を算してこれを定め、傍系親はその一人又はその配偶者から同始祖に遡り、その始祖から他の一人に下るまでの世數によつてこれを定める。

【郎黨】ラウダウ。郎等(ラウドウ)。わかもの。けらい。

從者。郎從。こゝでは、從者、けらいの意。

【一族】イチゾク。(又はイチゾウ)。ひとつのやから。同じ族。一家。血屬。

【没落】ボツラク。(一)城地などを敵に攻め奪はれること。(二)國が減びて流離すること。(三)身代がつかれること。破産。倒産。こゝでは一族が離散すること。

【岬】ミサキ。崎。陸地の水中に突き出た處。崎。鼻(ハ)。【清韻】セイキン。清らかなひびき。こゝは、爽やかな松風の音をいふ。

【超邁】テウマイ。こえすぐれてゐること。たちまさつてゐること。

【清爽】セイサウ。きよくさわやかなこと。さつぱりとしてゐること。

【あの岬角に聳ゆる老松の清韻の如く、よく超邁清爽なることを得たのである】

日本のつはものは、この幻の世に生きる限りは、悪戦苦闘を辭さないものであるが、その心の奥底には、敵味方といふ差別や特殊や流轉やを、斷然と抜き出して、一味平等

の絶對者に參入してゐるが故に、往々歐米の偉人英雄に見るが如く、煩惱執着、飽くまで地を匂うて塵を吸ふの嫌なからしめて、あの油壺の岬の突端に高く聳えてゐる老松が、太平洋の怒濤を渡つて來る風に吹きたわめられて鳴る、すがすがしい松風のひびきの様に、歐米の偉人英雄などにたちまさつて、十分にさつぱりとしてゐることが出來たのである。

【法然】源空(ゲンクウ)。浄土宗の開祖。法然房と稱した。美作の人。九歳の時父漆間(ウル)時國が敵に殺されたので、菩提寺の觀覺の弟子となつて教を受け、十五歳



比叡山に上り、源光・皇圓に就いて天台の教觀を學修した。十八歳黒谷に移り、慈眼房叡空に師事して、浄土教を究め、後下山して諸宗を學び、安元

元年四十三歳で専修念佛の宗に歸した。文治二年大原の勝林院で南都・北嶺の僧徒と會して法門を論じ(即ち大

原談義)、元久元年延曆寺の衆徒に對して専修念佛の禁を論破した。承元元年門弟の過失によつて念佛を禁ぜられ、讃岐に流された。後、赦されて建暦元年(一八七一)歸洛し、翌二年京の大谷で入寂した。年八十。圓光大師・東漸大師・慧成大師・弘覺大師・慈教大師・明照大師等の諡號を賜はつた。

【親鸞】シンラン。浄土真宗の開祖。日野有範の長子。母は源義親(一説に爲善)の女吉光。幼くて父母を喪ひ、伯父範綱に養はれた。九歳の時、慈鎮の門に入り、のち法然に従ひ、名を禪空と改めた。僧侶の、肉食・妻帯を禁ずるのを患へ、在家往生の實を示さんのために、藤原兼實の季女を娶つて、名を善信(ヨシノブ)と改めた。後、師法然の事に坐して越後に流された。この間、愚禿(ゲト)と自稱し、名を親鸞と改めた。勅免の後、關東に在ること二十年、弘長二年(一九二二)京都の西洞院で入寂した。年九十。明治九年に見真大師の諡を勅賜せられた。

【榮西】エイサイ。禪宗臨濟派の開祖。備中國の人。明菴・葉上房などと號し、後、千光國師といつた。兩度、宋に

遊び、歸朝後、香椎(カシ)の建久報恩寺・博多の聖福寺を建てた。建仁二年、頼朝が建仁寺を京都に建てて、榮西を請じた。實朝もこれを鎌倉に聘して壽福寺を建てた。紫衣を賜はり、權僧正に補せられた。建保三年、(一八七三)建仁寺に入寂した。年七十五。

權北條時頼に呈したが顧みられなかつた。後益、諸宗を誹謗したため、北條時宗の命で、龍口(タチノ)に斬られやうとしたが、軽減されて、佐渡に流された。時に年五十。建長十一年赦されて、甲斐國身延(ミノ)山に住し、弘安五年(一九四二)武藏國池上(イケ)に赴き、その十月入寂した。年六十一。上足に、六老僧・十八中老僧がある。その遺文を、高祖遺文録といふ。大正十二年、立正(ヤウシ)大師の號を勅謚せられた。

【道元】 ダウゲン。曹洞宗の始祖。越前國永平寺の開祖。京都の人。久我通忠の子。希玄と號し、佛法房と稱した。叡山に登り、台宗の祕典を究めた。貞應二年宋に入り、安貞元年に歸朝。畫を善くした。建長五年(一九一三)入寂。年五十四。明治十三年謚を承陽大師と賜はつた。

【雄健】 ユウケン。をしく強いこと、又そのもの。雄強。雄勁。

【日蓮】 ニチレン。日蓮宗の開祖。安房國小湊(ナト)の人。貫名(ヌキ)重忠の子。十二歳の時、國內なる清澄(キヨ)寺に入り、十六歳(一説に十八歳)薙髮して、蓮長といひ、後、日蓮と改めた。二十一歳、比叡山に登つて、天台の玄旨に通じ、法華經所説の眞理に基いて、當時流行の諸佛敎を邪法と斷じた。三十二歳、故郷に歸省し、地頭の迫害に遭つて鎌倉に入り、立正安國論を草して、執

【源氏物語】 ゲンジモノガタリ。中古の精神間の有様をうつした小説。全篇を五十四帖に分つ。幻までの四十帖は前篇で、光源氏を主人公とし、紫上(ムラサキ)等幾多の才媛を配して、その得意の生活を寫し、雲隱の一帖は、光源氏薨去の意を寓したもので、名のみで文はなく、匂宮・紅梅・竹川の三帖は、後篇への連鎖、後篇なる橋姫以下の十帖は、光源氏の子薫(カヲ)大將を主人公とし、宇治の八宮の姫君等を配して、大將の失意の狀を寫し、特に宇

治十帖と稱せられる。紫式部の著。げんじ。源氏の物語。紫の物語。

【洗煉】 センレン。物を洗ひ、又は煉るがごとくする意。思想または詩歌の字句を工夫し、推敲すること。

【典雅】 テンガ。正しくて、品のよいこと。正しくて、みやびやかなこと。典麗・雅正。

【悲壯】 ヒサウ。悲哀の中に、壯烈の氣味のあること。

【巧緻】 カウチ。綿密なこと。工緻(コウチ)。巧でこまかいこと。技術が微細な點までゆきわたつてゐること。

【凄艶】 セイエン。凄豔。すさまじい中に、あでやかなさまの見えること。

【平家物語】 ヘイケモノガタリ。平氏の繁昌から没落に至るまでの事を記したもの。作者は、信濃前司行長入道であらうなど種々の説があるが、詳かではない。普通本は十二卷であるが、六卷二十四冊の延慶本、二十四卷の長門本などの異本がある。これらの異本は普通本よりも記事が詳かである。平語。

【史詩】 シシ。獨 Histisches epik。敘事詩の一。歴史上の事實に基いて作つた詩。

【背景】 ハイケイ。(英 Back ground) (一)美術)繪畫で、一箇の肖像又は一群の人物の周圍の餘地。バック。(二)劇場で、狂言の補助として、舞臺の正面の奥などに飾る、景色その他を示す畫。かきはり。(三)周圍の形勢・情況。

【遺勁】 シウケイ。つよいこと。力のあること。

【豫言者】 ヨゲンシャ。(一)未來の事を語る人。(二)基督教) (英 Prophet) 神から授けられた使命を宣へ言つて、國民を導く人。信仰によつて事實を豫釋する人。聖靈に感じて、神の啓示を蒙り、これを世人に傳へて、現在を教へ、且つ未來を告げる人。

【織細】 センサイ。細密なこと。こまかでつまびらかなこ

と。緻密なこと。

【小品】 セウヒン。(一)ちひさいしなもの。(二)小形で、簡粗な藝術上の作品。(三)せうびん。川蟬の異名。(伊勢國の方言)こゝでは(二)の意。この部分の解釋には、(参考1参照)

【體現】 タイゲン。(哲學)。形にあらはすこと。具體的に表現すること。模倣ではなく、直接に自分のものとして表現すること。

【平安朝】 ヘイアンテウ。桓武天皇が延暦十三年(一四五四)に平安に都を奠められてから、鎌倉時代に至るまで、凡そ四百年間の時代。平安時代。



【運慶】 ウンケイ。彫刻家。

後鳥羽・順徳兩朝時代の人。

康慶の子。名は譽。備中法

印と號する。東寺の大佛師

の職に補せられて、建久再

興の事に功があつた。又、鎌倉の大倉新御堂・持佛堂等の佛像を作つて大いに著はれた。その作風は寫生を基礎とし、剛健の精神を表現してゐる。鎌倉に住んだが故に、

鎌倉佛師の祖と言はれる。東鑑では雲慶と記してある。

【記憶】 キオク。(一)心に留めておいて忘れないこと。おぼえ。(二)哲學)英(Memory 又は Remembrance.) 過去の経験が、再生・再現せられ、且つそれが過去において、経験せられたといふ意識を伴ふ心的状態。こゝでは(二)の意。

【ミカエランヤロ】 Michelangelo (1475-1564) イタリアの彫刻家、畫家、建築家。沈靜と氣品ある氣高さを以て十六世紀彫刻のクラシック様式を代表すると同時に、ルネッサンスに不調和を齎してバロック様式の礎を準備した。夙にメディチのロレンツォの寵を受け此處に青年時代の教養を積んだ。ロレンツォの死後ローマに招かれたことがあるが、多くは故郷のフィレンツェで仕事をした。晩年ローマに移つてこの地で生涯を送つた。生來の彫刻家であつて、又彫刻家の一面に留つた。彼の藝術にとつては現象の凡ゆる世界はなく、唯人間のみが表現の價値を有し、優しい感情ではなく、激情的な嚴肅さが彼の藝術を充した。彼の強い性格の偉大さは時代を

それに従はせたが、彼の影響は多くの人々にとつては却て有害に終つた。建築に於ける彼の活動は晩年に於て始つたが、彼はバロック様式の祖とせられる。この標石をなすのは "Biblioteca Laurenziana" であるが、彼の代表的な活動はサン・ピエトロ寺の造營である。畫家としては彼は唯人間をのみ描き、その繪畫は寧ろ線描的彫刻的であつた。有名なシステム禮拜堂の天井畫はクラシック様式に入り、「最後の審判」の壁畫はバロックの扉を開いたとされる。彫刻家としては彼は最も遺憾なく彼の藝術を發揮し得た。既にクラシックの精神を以て表現されたピエタ群像や巨大なダヴィッドは青年時代の作である。ユリウス二世の墳墓、メディチの墓は彼の大作で、後者は既にバロックの様式に入る。

【徳川時代】 トクガハジダイ。江戸時代。慶長八年(一一二

六三)徳川家康が幕府を江戸に建ててから、慶應三年(一一

五二七)の大政奉還に至るまでおよそ二百六十五年間。

【江戸城】 エドジヤウ。武藏國江戸(今の東京)にあつた城。長祿年間太田道灌が始めて築城し、後、上杉・北條

兩氏に屬し、天正十八年徳川家康の居城となり、文祿・慶長の頃再築し、更に慶長十一年から大いに工事を起し、寛永十三年外郭を築いて、全く大成した。本城(本丸・二の丸・三の丸)・西城(西の丸)・吹上の三部に大別する。後屢、火災に逢つた。

西城は明治初年以來、長れ多くも皇居となつた。

【規模】 キボ。(一)正しい例。てほん。(二)しくみ。結構。

(三)生まれ。てがら。面目。功。(四)趣意。口實とすべき一かどの功勞。

こゝでは(二)の意。

【城郭】 ジャウクック。城郭。(一)城とくるわと。城と外郭と。(二)城のくるわ。(三)城と同じ。

こゝでは(一)の意。

【所以】 ユエン。ゆゑ(故)の音便。

「これ、その云々なる所以なり。」等と用ひる。

【故】は、(一)わけ。いはれ。すち。ゆゑよし。ゆかり。原因。(二)人の品格・身分又は物事の趣などの、なみ／＼ならぬ點。かど。特色。(三)常とかはつた事。事故。



【牢記】 ラウキ。物おぼえのいゝこと。よい記憶。強記。

こゝでは、確かに心におぼえること。

【冀ふ】 コヒネガふ。希ふ。庶幾ふ。尙ふなど同語。請願ふ義。ねがひもとめる。切に望む。

【在來】 ザイライ。ありきたり。しきたり。

【變革】 ヘンカク。根本から變へること。

かくしてこゝに單なる「存在」のための高貴なる文化の變革「精神的文化」の「物質化」は始る。これをしも悲劇と言はずして、何をか悲劇といはう】

かうして、こゝに單に自國が生きんがために、國際闘争場裡に生きんがために、高貴な文化、魂の奥深く包まれてゐる圓滿自足の心、一味平等の絶對者に參じて、よく超邁清爽なる心、しかもこの世は幻のはかない世と觀じながら、この世に生きる限りは、惡戰苦闘を斷じて辭さない崇高な心、かゝる心の表現を根本から變へてしまふときには、即ち精神的な高貴な文化を單なる低劣な性質のみの文化にしてしまふといふことが始まる。これをさして悲劇といはないで、何を悲劇と言はうか。これこそ眞に

悲劇の名に價するものであらう。

この文の解釋について、作者自ら

「しかも翻つてこれを思ふに我等日本國民がかくの如き破目に陥るに至つたといふ事は、少くともその規模の大なる點において、世界史上、未だ嘗て他にその類例を見ぬ悲劇たるの觀がある。一つの極めて高い文化を生める國民が、その文化的努力を以て、永き歴史を経て鍛鍊し、陶冶し、洗煉し來つた獨特の氣品ある國民的生活様式を捨てて、唯その存在のために、多くの點において寧ろ劣るところある他の國民的生活様式に移つて行かねばならぬといふことは、實に慘ましき悲劇といつて好い。いかにも、若し日本の文化と歐米の文化との相違が、たゞ量と程度との相違であつて、質の相違でなく、日本と歐米諸國との文化的關係が、往々世間でいふが如く、單に後進國と先進國との關係であるならば、我を棄てて他に就くことは、低きより高きに進む向上であつて、寧ろ喜びこそすれ、何等悲しむべき理由なきもの、そこにあるものとは、唯だ英雄的努力であつて、未だ悲劇的英雄の面影で

はない。然るに日本國民の場合にありては、事實は、決して、さうでない。日本の文化は、多くの點において、

殊に、奥深き幽玄、微妙、高貴なる點において、遙かに高く歐米の文化に擡んづるものである。それにも拘らず、唯だ生きて行かねばならぬために、即ち國際的生存競争の必要より、我を捨てて彼に就かねばならなかつたといふこと——而してその事たるや、決して容易の事業ではない——この困難なる事業に、日本國民が半ば意識的に、半ば無意識に、なかば強制せられ、なかば自ら進んで飛び込んで行つたといふことは、世界史上、殆どその類例を見ぬ悲劇、しかも我等の場合においては、實に、一つの大いなる希望を孕む悲劇、實に一つの偉大な *Divine comedia* であつたのだ】「やまとこゝろ」(三〇頁—三二頁)による)

と言つてゐることは、大いに参考とならう。

【悲劇】 ヒゲキ。(英)Tragedy。(一)個人が、或目的のために、幾多の辛酸・艱苦と戦つて、悲惨な結果に終る事を脚色した演劇。「喜劇」の對。(二)悲惨なる人事。「喜劇」の對。

こゝでは(一)の意。

【祭壇】 サイダン。祭祀を行ふ壇。

【犠牲】 ギセイ。「犠」は色の純な牛、「牲」は、トして吉を得、未だ殺さない牛。(一)天地・宗廟を祭る時に供へるいけにへ。(二)他人のために己を顧みない精神。こゝでは(一)の意。

【更生】 カウセイ。(一)生れかはること。(二)(基督)重生(チユウ)。(英)Regeneration) 信者となつて、新たな心靈的生活に入ること。再生。新生。こゝでは(一)の意。

【大死一番】 禪の語。禪定力により煩惱妄想を斷絶して、眞の無念無想の境地に入ること。こゝに大悟徹底し、一朝にして、如來地に直入し得るのである。これを禪では、「一則の公案と戦つて死に切つて了ふ」などともいふ。

【大悟】 タイゴ。大いにさとること。だいて。

【徹底】 テツテイ。(一)底まで徹(ト)ること。とほりつらぬくこと。(二)蘊奥に達すること。「大悟徹底」(三)意志のよく疏通すること。

【ダンテ】 Dante Alighieri. イタリア中世の大詩人。ボッカチ。によつて、イタリア族の唯一の光輝と推稱されてゐる。洗禮名は Durante 後自ら縮めて Dante と改めた。その幼少の生活に就いてはあまり知られてゐない。然し彼自ら "Vita Nuova" "初めの生活" に記す所から推測すると、一二七五年五月即ち九歳の春、同じ年頃の少女ベアトリッチェ Beatrice を見てその美に打たれ、後九年を経て再び彼女を街上に見、生涯その幻影を捨てることが出来なかつた。實に彼女を思ふ心が彼をして Vita Nuova を書かしめ、又 Divina Commedia (神曲) を書かしめた。しかし彼女の何者であつたかは、正確には知られてゐない。その後間もなく彼はジェンマ・ドナ



イテイ "Gemma di Manetto Donati" を妻として四人の子供の父となつた。その結婚が不幸であつたといふ説もあるが根據はない。一二八八年カンバルチノの戦争に出征。翌年凱旋し、それから哲學の研究に没頭したが、その情熱は次第に政治の方へ移つて行つた。一二三〇年彼は四名の同士と共に追放され、彼の長い漂流の生涯が始まつた。その間彼は断えず故郷フィレンツェに歸る日を夢みてゐたが、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ七世の陣歿(一二三三年)後はその望を捨て、ヴェローナの宮廷に客となつて、「神曲」の稿を完成し、領主の使としてヴェネチアに赴き、歸途病を得てその熱愛するフィレンツェを再び見る事なしに、千三百二十一年九月十四日、五十六歳四ヶ月の生涯を終つた。主著には以上の外 "Convivio" "De vulgari Eloquentia" "Il Canzoniere" 等がある。

もあるが根據はない。一二八八年カンバルチノの戦争に出征。翌年凱旋し、それから哲學の研究に没頭したが、その情熱は次第に政治の方へ移つて行つた。一二三〇年彼は四名の同士と共に追放され、彼の長い漂流の生涯が始まつた。その間彼は断えず故郷フィレンツェに歸る日を夢みてゐたが、神聖ローマ皇帝ハインリッヒ七世の陣歿(一二三三年)後はその望を捨て、ヴェローナの宮廷に客となつて、「神曲」の稿を完成し、領主の使としてヴェネチアに赴き、歸途病を得てその熱愛するフィレンツェを再び見る事なしに、千三百二十一年九月十四日、五十六歳四ヶ月の生涯を終つた。主著には以上の外 "Convivio" "De vulgari Eloquentia" "Il Canzoniere" 等がある。

はり、次には愛人ベアトリッチェに導かれ、最後には聖者クレルヴァーのベルナルツスに導かれて天國の頂上まで達した。これは一面から見れば靈魂の死後の状態を描いた驚くべき幻影の表現であり、又人間の凡ゆる思想行爲に對する精神的・道徳的批判の發表でもあるが、その核心を成してゐるものは彼自らのベアトリッチェに對する愛と信との心情の抒情的發現であるとも見られる。【それは實にダンテの意味に於ける神曲である】ダンテの神曲の様に、地獄・煉獄を経て、やがては「天國」に到達すべき未來を持つてゐるのである。

9 挿 圖

月光菩薩 奈良三月堂  
奈良東大寺の法華堂にあたる三月堂の中に安置されてゐる月光菩薩である。天平時代の製作で、日光菩薩と相對して、女性男性になぞらへ、その出来は頗る優秀なものとして美術鑑賞家のつとめて推稱するものである。  
信長教養の舞を舞ふ 繪本太閤記  
繪本太閤記中の挿圖である。繪本太閤記は、萬治四年版の小瀬

道喜著の太閤記に、後世法橋玉山が挿繪を施したものである。三浦道寸の墨畫 北條五代記  
北條五代記中の挿圖である。北條五代記は足利末期から江戸初期にかけて生存した三浦茂信が、小田原の北條氏に關する見聞を記したものである。  
江戸城 歌川國輝筆  
江戸幕府末期より明治初年にかけて生存した歌川派の浮世繪師歌川國輝の描いた江戸城である。江戸城としてははるか後代のもので恐らく明治維新前後の様を寫したものと思はれる。

10 参 考

一 原文書略の箇所  
○「しかも日本國民の經驗しつゝあるこの偉大なる Divina Comedia を滿分に味到し得んがためには、我等は先づ云々」を「國風と民俗とを異にせる異國に發生した文化を吸收攝取するに當つては、我等は先づ云々」と改めた。  
○一五八頁初めから五行目と六行目との間に「而してこゝに日本文化を語るに際して、余は先づ日本の藝術より始めようと思ふ。蓋し一國、一時代の文化をさながらに表現し、さながらに物語るに於いて、藝術のごとく著しきものはな

いからである。

或夏のこと、余は、イタリアのヴェネチアに、あの小豆のやうに小さな、島といふより寧ろ洲の上に棒杭を打ち込んで巢を造り、しかもその蕪蕪たる洲の上に打ち建てられたる一小都市國家を以てして、曾ては千年の永きに亙りて、殆ど地中海々上權の過半を占め、希臘の半ば以上、進んでは、コンスタンチノポリスに至るまで、その上に支配權を揮ふ儼乎たる帝國となつた、あのヴェネチアに、その過去千年の、實に光榮に満ち輝く歴史を回顧しつゝ、暫らく余の世界的漂泊の足を停めたことがある。或日、そのヴェネチアの本屋を漁りて、不圖、第十九世紀の英國の生んだ最も高き精神の一つであつたジョン・ラスキンの『The Saint Mark's Rest』といふヴェネチアの歴史及び藝術巡禮記ともいふべき小冊子を得、日毎、これをあのアドリアの海をあをくち、アン獨特の黄金色そのまゝの光に包まるヴェネチアの汀に、その海風に吹かれながら愛讀したことがある。この書の巻頭に、ラスキンはしるして、ある國民の特性・精神を知るに、三つの道がある。その一は、その政治的・軍事的功業の歴史であり、その二は、その生んだ哲學學問であり、而してその三は、そのつくれる藝術である。しかもこの三者のうち最

もよくその真相を直截簡明に物語るものは、實に藝術である。蓋し、國民の事功的行蔵は、往々、國民性、内的國民的精神以外のものに依つて影響さるゝところのものであり、また哲學學問は、多くの場合、國民全體の所産といふよりも、寧ろ一國民のうち傑出した拔群な數智者個々の事業であつて、必ずしも是れを以て、その國民全體の智能の高さを測る標準と爲し得ざるものである。然るに獨り藝術に至りては、少くとも或程度まで、國民全體若しくは國民多數者の共にたのしみ、共にいつくしみ、共に鑑賞することを、その前提とするものである。多數國民に没交渉な、全然個人主義的藝術は、あり得ざるものである。實にこの故に、或國民の特色・天才を最もよく表現するものは、その功業の歴史や、學問であるよりも、寧ろ、建築・彫刻・繪畫・音樂等の藝術であるといつてゐる。而してこのラスキンの見方には、たしかに深き一面の眞理がある。實をいへば、余も亦、これと略々相似たる精神史學的見地より、三年に餘るヨーロッパ文化巡禮漂泊の旅の間、つとめてその藝術を見且つ究めんとせる一人であつた。

○一五九頁の一行目、「……禁じ得ないものである。」と、が、それら總べてのヨーロッパの云々との間に、

「余は、素、藝術の専攻者ではない。随つてその微細に亙る研究と、これに基く學證指摘は余の任とするところではない。しかも、實にその故に、余は常に精神史學的見地より、藝術の核心と精神とをつかむに苦心し來れるものである。而して藝術に對するかくのごとき態度を以て、ヨーロッパのそれに接する時、そのうち、余に、終生忘れることの出来ない深刻なる印象を與へしものが三つある。その第一にして且つ最高なるものは無論ギリシヤの藝術である。その第二はヨーロッパ中世紀の城砦及び伽藍の建築である。而してその第三は、イタリア・ルネッサンスの彫刻、殊にその絢爛豐潤な繪畫である。」

南イタリア、ベスツムにおけるドリア式のポセイダンの宮若しくはシチリア、アグハンツムに於ける同じくドリア風の宮は暫く措き、殆ど完き姿して現在せるものとしては、世界最古のものの一と思はるゝ、あのギリシヤ、アテナイのアクロポリスの城山の上高く聳ゆるパルテノン宮に行つても見よ。ペリクレス、ソクラテスの時代に建てられたあの全大理石の神殿・樓門・祠社——その雄大と崇高と莊嚴とを兼ね合せたドリア及

びイオニア式のあのすばらしい大理石柱の集團に、我等は、實にあの飽くまで強い、到るところに秩序、即ち勝利克服のうるはしさをもちたるさすんば已まなかつた、勝ち氣な、徹底して緊張した男性的ヘルラス國民の精神を、今日なほ、まのあたり垣間見る心地がするのである。翻つて、我等は、永しへに流れて止まぬラインの流に臨んで、清冽な西歐の空をつんざきて、高く天に向つてあこがる、獨逸ゴールの伽藍、若しくはその影をワイクセルの流に落す西プロイセン、マリエンブルクの中世紀における獨逸騎士僧團の古き城砦の建築に、さながらに獨逸民族の雄健崇高幽玄な心意氣を知り得るのである。若しくはまた降つてルネッサンスの生んだ數多き繪畫のうち、たとひその最大なるものとは言ひ難しとするも、たしかに最も神々しき女性のうるはしさを現はすドレスデンの所謂シキチニクシニ・マドンナを仰いでも見よ。その神々しき無垢純潔の氣高き女性——母としてやがて菩薩心に入る凡てを包む女性の美はしき姿は、一度びこれを仰ぎ見し者に、終生忘れ難き印象を焼き付けずにはおかないであらう。何と言つてもヨーロッパの精神とその藝術とには、驚くべき崇高、雄大、深酷なるものがある。

○一六一頁三行目と四行目との間に、  
 「無論、藝術として魂のないものはない。名あるヨーロッパの藝術は、悉く或魂を現せるものだ。しかもそれは實に或魂を外に向つて表現せるものだ。眞に日本的な優れた藝術は、これに反して、人間の魂、それも最も深き人間の魂を籠めたるもの、實に深き内なる魂の入つたものなのである。實にこゝに、日本藝術の傑出せる特異性がある。」

大正十五年の或夕べ、余は、ベルリンの日本大使館に、ドイツにおける東洋美術史の權威者たるグロッセ、キョシネル、コホンの大家と膝を交へて敷談するの機会を持つた。議論好きな我等の間には、幾多の藝術論が交はされた。しかも議論の場句、我等の一致せる結論は、日本の藝術には天下一品なるものがあることであつた。特にグロッセ博士の如きは、既に過去において、かくの如く深遠高貴な藝術を生んだ日本は、既にそれだけにてその存在の使命を果せるもの、そのたとひ、再び怖るべき異常なる天變地異の見舞ふところとなりて、太平洋の水底深く沈み去らうとも、また心残りあるべきではない、とまで極言するほどに日本の藝術に傾倒し心酔し、これを禮讃せるものであつた。

古ギリシヤの藝術の後、これに優る藝術無し、とは、今日に至るまでの定論だ。また實際、一度まのあたりギリシヤ藝術の前に立つてこれを打ち仰ぐ時、我等は、今日なほ、その微塵の隙と、垢と、たるみとを見せぬ完成の美、すべての點に、今少しといふところを羨まぬ徹底して全き玲瓏透徹の精神の前に、限りなき驚嘆畏敬の念を捧げざるを得ざるものである。然るに、前にしては、かくの如きギリシヤ完成の美、後にしては、崇高剛健のゴチックの藝術、近くは絢爛豐艶のルネッサンスの藝術にはぐまれし此等ヨーロッパ美術史家をして、日本藝術に對して、前述の見解に出でしむる時、それは決して所謂井底の痴蛙の管見では無い。

藝術に就いて、やまところのいかなるものなるかを、垣間見た我等は、進んで日本の宗教について尙ほ深くその姿を探り見るところあらねばならぬ。  
 ○一六二頁十一行目と十二行目との間には「印の餘白をもつ。  
 ○一六九頁十一行目「いかにもそれが無いではない」と「しかし思つても見よ。」との間には、  
 「いかにも、日本の藝術は、その廣き範圍のうちに、一種獨特な『小藝術』と稱するところのものをも生み且つ榮えしめたる

ものである、既に一度び言及せる刀の鐔の如き、若しくは、手宮・頑箱・ねつけ等の所謂美術工藝品が、その一例である。これ等はいづれも、微妙・繊細、これを眺めて飽かず、而して、グロッセ博士のいみじくも指摘せるが、ごとくに、實にこれを撫でさすりて飽かぬもの、この小藝術は、實に一種獨特な『觸覚』の藝術を形作るものである。

日本の廣汎なる藝術的作品のうち、最も早く、一般に歐米に知らるゝに至つたものは、浮世繪その他これ等の小藝術の作品であつた。而してこの見易き特殊の事情は、歐米の人々をして、往々日本の藝術は、すべてかゝる繊細微妙の小藝術であると思ひ込ませしめた。この歐米人士の日本藝術に對する甚しき誤解が、近代日本における歐米崇拜主義の潮流に乗つて、舶來品として日本に渡來し、舶來品として持て囃されて、日本人自ら、日本藝術の小規模を信じ、且つこれを口にするに至つた。  
 しかも退いて思つても見よ。」

○一七〇頁十一行目と十二行目との間に、  
 「最後に余は、我等の眼の前に、而して、我等のたゞ中に、儼乎として存するものを指したく思ふ。それは他でもない、千代田の城である。徳川時代は、種々の點より見て、決して、日本國民の精神史上、光彩陸離たるものではない。それは、多くの點にお

いて、寧ろ墮落期であつたとさへも言ひ得る。しかもなほその時代は、その當初において、我等の眼の前に聳ゆる千代田城を築いてゐるのである。世界中を探しても、かほどまでに雄大、かほどまでに大規模な城郭は恐らくまたとあるまい。あの千代田城を築いた精神は決して單に繊細可憐を事とする精神ではなかつたのだ。若しまた我等現代日本人の感懷情操の小規模を指摘する人ありとするも、それは、たゞ／＼現代日本人の墮落を語るものであつて、そのそしりは、必ずしも未だ日本の精神そのものに當るものではない。

○一七二頁の七行目。即ちこの文の終りの後に、  
 「しかもそれは、寧ろ明日への希望だ。昨日の舞臺は、高貴なる精神的文化の見地よりいへば、『物質』の祭壇への『精神』の犠牲であつたのだ。余は、今爰に、事をして爰に至らしめた責任者の詮、立てをしようとは思はぬ。寧ろ、この事實そのものに當面して、その最も深き原因の那邊に存するかを尋ねようと思ふ。」

2 補遺 合戦の略  
 信長が坐して亡びんよりは、乾坤一擲の奇襲をせんには如何かと決意するに至つた裏面には、義元は將に將たるの資格なく、多

くの傑出した家來は彼の下を去つてしまつてゐること、今川軍の通過した村々へ百姓に化けて様子を探つてゐた物見から、義元が府中城（本城）を發して沓掛城に到着するまでに、五度も馬から轉落したことを知つて、義元は馬術は下手なりといふ結論に到達し、最後の決戦に於いて不意をついたならば、必ずや彼義元は逃げ終せないと決断した信長の細心の注意が動いてゐることは、見逃がすことが出来ないであらう。信長がわづかな手兵を本城に残して、熱田神宮へ、丹下岩へ、善照寺等へと途次前進した時、放つた物見の報告に基き、一方佐々政次を牽制部隊として鳴海の城を攻めさせ、自らは沓掛から桶狭間に向つた義元の後援から、後から後からと追ひついた二千

の兵をひつさげて突撃するために、太子ヶ根山、田楽狭間に位置した。敵は間もなく清洲の本城に迫るであらう。今川方では、「丸根の砦も鷲津の砦も我が手に落ちた。先手の部隊は清洲に近く攻めてゆく。鳴海の守備隊は奇手を全滅させた。」と心おこつて、百米四方の山と山との窪地桶狭間に本陣を置いて、安逸の夢をむさぼつてゐる。信長は本隊の動靜を善照寺の砦に残る僅かな兵に賊の聲を擧げさせてカムフラードし、自らは突撃にうつらんとする、折しもあれや、一天俄にかき曇つて、大雷雨。時こそ到れと決死隊、自ら破壊筒となつて、敵陣に突入し、玉碎する。かくしてつひに義元は毛利秀高の手に取へなく首級をとらるゝに至つたのである。

# 中國文教科書教授備考 卷七

中國文教科書教授備考 卷七 修正再版用

昭和十四年六月二十日印刷  
昭和十四年六月二十五日發行

非賣品



編者 光風館編輯所  
發行者 上原才一郎  
發行所 光風館書店  
印刷者 根力三

光風館編輯所  
東京市神田區神保町一丁目五番地  
上原才一郎  
東京市神田區神保町一丁目五番地  
光風館書店  
(電話) 神田三〇八七番  
(振替口座) 東京三二七番

吉田彌平編  
石井庄司補訂

修正再版

昭和十三年二月二十八日  
文部省檢定濟

中國文教科書

和裝全拾冊

光風館編輯所編


中國文教科書教授備考

洋裝全拾冊  
(非賣品)

御審査用御見本  
御申越次第呈獻

新 教 授 要 目 準 據

類書中道隨ヲ許  
ルザサ備完備

吉田彌平編 石井庄司補訂	吉田彌平著					吉田彌平編 石井庄司補訂
東西遊記常山紀談雲萍雜誌鈔	藩翰譜駿臺雜話樂訓鈔	平家物語太平記神皇正統記鈔	增鏡徒然草十訓抄鈔	玉勝間花月草紙琴後集鈔	學日本文法第一學年用	學日本文法上級用
四七錢	四九錢	五三錢	五八錢	五五錢	四一錢	六〇錢
昭和十四年三月八日發行	昭和十四年二月二日發行	昭和十四年二月二日發行	昭和十四年二月二日發行	昭和十四年二月二日發行	昭和十四年二月二日發行	昭和十四年二月二日發行
昭和十四年二月一〇日檢定	昭和十四年二月一六日檢定	昭和十四年二月一六日檢定	昭和十四年二月一六日檢定	昭和十四年二月一〇日檢定	昭和十四年二月一六日檢定	昭和十四年二月一六日檢定

395  
120

